
誰かを救える五分前 Part0

神戒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰かを救える五分前 Part 0

【Nコード】

N4827R

【作者名】

神戒

【あらすじ】

時衛士^{ときえいじ}は平穩に過ごしていた。姉の理恵に、友人の山田、中村：アルバイト先でも人間関係に恵まれた、比較的シアワセな人生を歩んでいた。

しかしある日、高校二年生に進学した日に『ミシェル』を名乗る女性から砂時計を受け取る。その砂時計は五分間を測り――五分が経過した瞬間に、砂時計を使用する直前まで時を巻き戻すものだった。

これはそんな砂時計を手に入れた少年が、それ故に変異してしま

う運命に翻弄される物語。

初日

世界は限り無く平和だ。

現代社会では流石に戦争と言うものはなくなっているが、知る限りでは紛争程度しか起こっていない。それも日本から遠く離れた異国での出来事であり、極めてオレとは無関係だ。

「テスト終了五分前、クラス番号氏名の書き忘れが無い様にしっかりと確認すること」

そんな事を考えながら解答欄の半分を埋め終えた所で集中力を力いっぱい引きちぎるやる気の無い声が耳に届き、短く息を吐いた。少年は目に掛かる髪を掻き揚げながら、そこだけが丁寧な氏名欄の『時衛士』を二度、三度確認し、もう一度大きく嘆息する。

秒刻みでリズムを取る指先は解答用紙の上から机を叩き、それが二〇〇近く繰り返された中で、不意に音が途絶える。直後に彼は机の中に手を突っ込むと、その中で倒れた”砂時計”を掴み、手の中で微妙な重さを理解しながら砂が溜まっている方を上にしてガラスのくびれの部分をつまむ様にして持ち直し、体勢を崩して床に置く。慣れた手つきで行う彼を横目に、隣の席に座る男子生徒は大袈裟に腕で解答用紙を覆い隠した。

それから程なくしてテスト終了の合図である終業の鐘チャイムが校内に響き渡る。彼は担当教師の指示に従って彼は立ち上がり、解答用紙の回収を迅速に行った。

「おいエイジ、出来たか？」

壁に沿わせるように置くカバンの中から教科書とノートを手を席に着いて、テストの復習とばかりにそれらを机の上に展開。血眼で暗記するように答えを凝視する彼の肩を叩くのは、その友人であった。が、彼はその言葉に返答することも反応することも無く、ただ指先でリズムを取りながら、先ほど埋められなかった解答欄の問題を思い出しつつ答えを暗記していた。

短髪を掻き耂り首を振る彼は、「勉強熱心なことだ」と一つ溜息混じりに呟くと衛士から離れ、他の友人の下へと歩み寄って離れていった。

砂時計の砂はあと数秒もすれば完全に落ち終わる。そんな頃になつてようやく彼は顔を上げ、

「勝った！」

ざわめく教室内が一瞬にして静まり返る程の、叫び声に似たその勝利宣言は彼の起立と同時に放たれて――。

次の瞬間。ただ一度のまばたきによる世界の暗転の直後。

教室内は完全なる静寂と適度な緊張感に包まれていた。先ほどまで出歩いていたクラスメイトは机を凝視するようにして皆席に着いており、さらに時衛士は机の上に雑に捨てた筈の筆記用具を手に半分が空欄の解答用紙を睨んでいた。

その内容は、つい先ほどまで解いていたテストと相違ないモノであつて――彼は口元に嫌らしい笑みを浮かべながら、素早く覚えたばかりの解答を、その空欄に書き込んでいく。

それから間も無く、二度目の鐘がテストの終了を伝えた。

口々に墮落の言葉を吐き続け、やがてそれが耳に心地よいざわめきになる頃、彼はつい先ほどとは違う緩慢な足取りでテストを回収し、自分の席に戻る。カバンを机の上に叩きつけるように置いてあげると、彼は机の中に手をつっ込んで、砂時計を掴んだ。

「おいエイジ、出来たか？」

軽く肩を叩く友人に、衛士は笑顔で振り返る。そんな表情を見て彼は嫌味だな、と顔を引き攣らせた。

「このオレが出来ないとも思つたか？」

砂時計をカバンに仕舞い、それから筆記用具をつっ込んで立ち上がった。

「どっか行く？」

「そーだなあ、でも山田、お前部活あるんじゃないっけ？」

あ、と思い出したように間抜けな声を上げる彼に、衛士は肩をす

くめて苦笑する。山田は既に帰り支度を済ませており、スポーツバッグを左肩に掛けて両手はポケットに突っ込む格好のまま顔を伏せるように前屈みになって唸り、

「エイジ悪い、俺行くわ」

ポケットから抜いた手を挙げて、彼はそそくさと教室を後にした。――セミの声が聞こえ始める季節。高校二年の中間テストはそれを最後に終了した。

「くははっ！ 常勝すぎて笑いが止まらん！」

つい数ヶ月前まではテストなどは未解答で提出するのが世界の常識だと思い込んでいた彼は、笑いがなら限り無く楽しそうに人通りの多い廊下を闊歩した。本来の目的も忘れて不正行為にばかり手を染める彼は、その中でどうしてこんな幸せな気分で居られるのだろうかと考える。

そう、それは今から約一ヶ月前――高校二年生に進級した春の出来事である。

「あんた、また何か頼んだの？ 大層な封筒が届いてたわよ」
入学式から帰宅するとまず出迎えたのは、母親のそんな台詞だった。

「は？ いや、何にも注文^{たの}んじゃ居ないケド……」

「まあなんでもいいけど、部屋に置いといたから」

「だっ、勝手に部屋に入るなって！ いつも言ってるだろ！」

口元に手を当てながらも笑いを零す母を背に、衛士は見覚えの無い品物を頭の中で思い描く。だがどうにも最近は通信販売を利用した覚えも無いし、懸賞に応募した記憶も無い。だから何かが届くわけも無い筈だった。中学卒業と同時に引越したから旧友から何かが送られてきたのかもしれないとも考えたが、その友人等に住所を教えていないことを思い出す。

「じゃあ何なんだ？」

その答えを待ちきれなくなった彼はその半ばから階段を駆け上が

り、廊下に到達したところで取っ手を掴み自分の身体を引っ張るようにして加速。そのまま突き当たりにある自分の部屋に駆け込んだ。ドアノブに手を掛け、捻り、扉を突き破るようにして身体全体で押し入る。大きな音を立てて扉は壁に叩きつけられて、彼はその反動で跳ね返されて吹き飛び跪く。その瞬間の事である。

急に、人の気配が強くなったのは――。

「トキ・エイジさんでお間違いないですね？」

跪く彼の脇に立つ少女が居た。紡がれる声は空間内の全ての障害物に染み渡るような、透き通る声音だった。素直に耳に入り込むその言葉はただの本人確認だけだったのだが、それでも彼はその台詞を理解できずに居た。

不意に声を掛けられた驚きで心臓を激しく高鳴らせながら、大きく息を吸い込んで立ち上がる。彼は声がした方へと向き直ってその主を見据えた。

「お届けモノですが、この道具を扱うには専門的な”慣れ”が必要です。その為に不躰ながらもお邪魔させて頂きました。少しお時間をお借りいたします」

日本人離れた琥珀色の瞳が衛士を捉える。

彼女はその身体に張り付くウェットスーツのような衣服だけを着込み、一体化しているようなブーツを履いたままそこに立つ。漫画に良く出てくる強化服のようだと彼は思いながら、はっと我に帰って飛び退く様に身を構えた。

「だ、誰だアンタは！」

何故この部屋に居るのかは今理由を述べられたから聞かなかった。土足で上がり込んでいるところを見ると外国人なのだろうと適当に考えた。だがそれを踏まえても明かに異常な事態だったから、彼はそう聞かずに入れなかった。

常識はずれだと心の中で叫びながら、彼の瞳はウェットスーツのような素材が故に形が丸々分かる豊満な乳房に釘付けだった。

彼女は透き通るような金髪の上に疑問符を浮かべながら、衛士の

視線を受ける乳房を掴むと、おもむろに左右それぞれを揺らして裏声を上げた。

「私ハ乳デアル。名前ハ未ダ無い」

それから手を離す。と支えを失ったソレは大きく揺れてから、彼女は再び衛士へ顔を向けた。

「私はミシエルです」

その行動から、彼は彼女をとんでもない人間なのだと理解、認識する。それと共にもう一歩分退くと、彼の背は廊下へ向いた。

動揺、それと恐怖。言い知れぬそれらを感じた彼は本能的に逃げを選択しようとする。だが単純な好奇心が勝り、それを一歩手前で押さえつけていた。

だから言葉は口をついて、会話を続けてしまう。

「……その、道具ってのは何なんだ？」

「先に説明致しますと、砂時計です」

彼女が背にする位置には勉強机がある。最もそこは勉強をするためには使用されて居らず、ただパソコンが据え置きされているだけであった。そしてそこに置かれる、粗品と書かれた箱を彼女は取って見せた。

「粗品って……」

そんなものを送って、さらに使い方を教えるために上がり込んだのか？　だが砂時計を利用するのに専門的な慣れが必要ってなんだよ……。彼は心中で愚痴を零しながら、箱を開けて、やがてどこにもあるような砂時計を取り出すその手元を凝視した。

箱を机の上に戻し、砂時計——と妙な一枚のカードはその手の中に。彼女はそれを見せるように外枠をつまむように持つと、説明の為に口を開いた。

「これ以降の説明には驚かないで口を挟まないで下さると好ましいです」

「はい」

「ありがとうございます。ではこの砂時計、五分間測れる品物なの

ですが……この砂時計で五分を測り終えた直後、自動的に五分巻き戻ります」

「意味が分かりません」

五分巻き戻る。それはつまり、砂がもう片方に溜まるから直ぐに五分計れますということなのだろう。だからなんだというのだ。一度しか使用できない砂時計など聞いた事が無いから、それが当たり前だ。

ふつつつと湧き上がる疑問と怒りを胸に抱くと、彼女は首を振る。そうして半歩右側に寄ると、机に置かれた白い小さな箱が見える。ミシエルはその上に砂時計を置いて、その五分を測り始めた。

「この砂が完全に落ち切った瞬間、全世界の時間は”砂時計を使用する直前”まで巻き戻ります」

彼女は言いながらも一步一步横にずれて、デジタル時計を手で指した。促されてそこを見ると、時刻は一時二二分。彼女の言葉が事実ならば、その時計が二七分になった瞬間にそれを認識する暇もなく一時二二分に戻る筈である。

ミシエルは続いて、残ったカードを差し出した。それは運転免許証のような形式で、氏名と生年月日、それと”交布”の欄に今日の日付が刻まれてある。どこで入手されたのか顔写真も張られてあって――何よりも目を引くのは、『善行を一〇〇回積みまで有効』と青いラインが引かれる箇所に書かれる一文である。

何が有効なのかは分からない。しかしそれに、衛士は得も言われぬ不安を覚えた。

何かが理不尽だ。巻き込まれたような気がする。もう逃げられないと、直感が頭の中で囁いた。

「これはこの砂時計を使用する為の免許証です。関係者には貴方様がこれを使用することを連絡してありますが、念のため、です。それから残りの善行数の確認にも使用いただけます」

「この、善行云々ってのは……？」

「こちらは一応”仮免許証”となっております、権限としてはこ

の砂時計の使用のみとなっています。正式な免許証を取得するために、ノルマである善行一〇〇回を積むことが原則なのです」

「ノルマ？ 原則？ やらなきゃ一体何が起るんだ？」

プラスチック製のそれを弄びながら、疑問を呈する。彼女は涼しい笑顔で答えて見せた。可愛いなあと頭の中でお花畑を構成し始める衛士の耳には、もう言葉は届かない。

「仮免許証と砂時計の剥奪に加え、それに関連する記憶の操作を行います。また記憶操作が不完全だった場合、貴方様の存在を隔離させていただきますのでご了承ください」

デジタル時計が二六分を示す。それに気付く衛士は不意に緊張によって胸を高鳴らせて目を見張った。砂時計はもう数十秒もすれば上の管から完全に砂が失せるだろう。彼女はそれに気付いて口をつぐみ、それ故に室内の張り詰めたような緊張感はより高まって……。

最後の一粒が流れて落ちる。その瞬間——何も起こらなかった。否、正確には衛士が予想していたようなド派手な時間の巻き戻しが無かっただけなのだ。

ミシェルは相変わらず棒立ちしたままであったが、砂時計は彼女の手の中に在り、ついでに言えば衛士が手の中で弄んでいた免許証は消失していた。彼女は横に数歩分ずれるとデジタル時計が見える。時刻は一時二一分で、間も無く二二分に移行した。

——時間は確かに、砂時計を使用する直前に巻き戻っていた。

だが、だからなんだというのだろうか。使用した瞬間に五分間巻き戻るのならまだ使い道も分かるが、わざわざこれから五分間を体験した上で、体験する前に戻るなんてのは使い勝手が悪いのではないだろうか。

彼が口を開こうとする。だがそれを遮るかのようにミシェルはルージュによって肉感溢れる唇は言葉を紡ぐ。

「そしてこの砂時計の効果を理解する者は、体験した五分間の記憶だけを持ち越せます」

彼女の言葉から察するに、何も知らぬ人間は五分間が巻き戻った

という自覚はないらしい。

部屋は驚くくらいに静かで、彼の鼓動は、先ほどの高鳴りを忘れたように落ち着いていた。

「時間は流れの速さ遅さこそ個人によって違いますが、存在は誰にでも平等です。時間は観測者が居るからこそ存在し、貴方の身に”何があっても”進みますし、巻き戻ります。さらに、砂時計の効果を他者に教えるのは自由ですが、使用する許可を持つのは貴方様だけですので、お気を付けください」

「……他人に使わせたなら俺にペナルティを課す、って事か？」
彼女はこくりと頷く。

衛士は信じざるを得ない信じがたいこの状況を仕方無しに、真実だと自分に刻み込む。だが当分は無理だなど、少し現実離れた、夢でも見るような感覚で接するように試みる。

「ペナルティの内容はその状況に応じて変わりますが、砂時計の計測時間が減ると考えていただければ良いでしょう」

——この砂時計を使えるのは衛士だけ。そして五分間しか計れず、巻き戻せない。必要なのは先を読む力……いわゆる、先見の明というモノだ。

出来るか？ オレに。いや、普通に、常識的に使えば良いのだろうが……。

そう考える中で、彼女は何かを思い出したように手を叩く。衛士はそれに反応して、俯いた顔を上げた。

「砂時計を使用して不正行為に手を染めた場合は勿論ペナルティを課しますが、内容は善行のノルマにプラス三をする事となっておりますのでお気を付けてください」

彼女はそこで深く一礼する。重力に引かれる乳房は再び衛士からの注目を受けるが、彼女は然して気にする様子も無く立ち直り、

「また本件に覚えが無い場合、誠に大変お手数ですが以下までご連絡をお願い致します。電話番号——」

唐突に、端的に機械的に明かに日本のモノではない電話番号を口

頭で告げる。そんな突然の行動に番号を暗記もメモも出来るはずも無い衛士はただ呆然として、また一礼する彼女の胸に目を向けた。

「また正式免許取得まで担当がお付き致します。何か不備や疑問が有りましたら、仮免許証の裏に記載されている電話番号までお願いします」

では。彼女は満面の笑みで少女らしく手を振ると、「お借りしたお時間をお返しします」と最後に残して――。

一度のまばたきの後、部屋の中から彼女は消え去った。

机の上には、未開封の『粗品』と記された白い箱。その奥にあるデジタル時計は時刻を一時一八分を示していた。

そんな僅か数分間の出会いが、事の発端である。

「ねえトキイツ！」

「何の恨みがあつてそんな力のこもった呼び方すんだよ」

ウキウキと肩の荷が下りたような気楽な気分で廊下を歩く。やがて三階から二階へと降りる階段に差し掛かったときに背中を蹴飛ばすような叫び声が彼の動きを止めた。

振り向くと女子生徒。見覚えがあるのは山田に積極的なアプローチをしている彼女だからであるが、山田には全く通じていない可哀想な女の子である。

肩に掛かる髪を乱舞し廊下を全速力で駆け抜け肉薄する。敵影だと思わず誤認した衛士は数段降りて手すりを背にし彼女が通り過ぎるのを待つ。と、間も無く想像通りに彼女は通り過ぎ、まるで効かないブレーキでようやく立ち止まると再び衛士の下へ急いだ。

「や、山田クンは!？」

空気を貪るような呼吸のせいで肩が激しく上下する。それほどまでに急ぐ用事とはなんだろうかと想像するも、どうせ山田とイチヤイチャラブするための計画を実行するためなのだろう。

山田、という名字のせいで勘違いされやすいが、彼の顔面はかなり整っている。きりつとした目鼻立ちはステキで、すらりとした体

型は締まった筋肉質。運動は勿論抜群にこなし、勉強もそつなく片付ける。これで女生徒から人気が出ないはずが無かった。

「もう部活に行った。……お前も随分と執念深いね」

「あら、執念深いとはお言葉ね。深いのは愛だけよ」

衛士が背を向けて階段を降り始めると、彼女は乱れた髪を正して呼吸を整え横に並ぶ。

そろそろ衣替えの季節のせい、少し動くとすぐに汗が吹き出てしまう。だから制服も乱れやすくなってしまいうし、生徒の半数以上は制服を崩して着る。だが彼女と山田だけは、去年から見て一度も妙な気を起こすことは無かった。彼女は山田の影響を受けているだけだろうが――などと考えながら、ネクタイを緩めてワイシャツの第一ボタンを外す。それから胸元を扇いで少しでも冷えた空気を服の中に送るも、冷却効果は薄かった。

「はあ、またバスケ……。マネージャーにでもなろうかしら」

「なれなれなっちまえ。俺は一々お前に因縁つけられて精神的にキツイぞ。学校が嫌になるくらい」

「ちょっと、アンタねえ、女の子に向ける言葉がソレ？　だからモテないのよ」

――何か、奇妙なくらい嫌な予感がする。心臓にズキンと響く痛みがあるのが決定的だった。

彼はショルダーバッグに手を突っ込んで砂時計を掴む。それをすぐさま反転させ、雑に握る手の中で砂時計を作動させた。しかし慣れた様に顔は、会話の中で不自然にならないような表情に固めたままである。

「大体ねえ……」

彼女は相変わらず彼の言葉に突っ掛かって愚痴を零し――その中で、不意に彼女の左肩が大きく揺れる。

「あ、悪い！」

背後から追い越し急ぐように階段を駆け下りる男子生徒はそれだけを残して瞬く間に姿を消す。彼女は驚いたように目を見開きなが

ら体勢を崩し、衛士へ向いて縋るように手を伸ばす。が、既に段差に背を向けて踏ん張れない状況にあると理解した瞬間、延ばした指先はすぐさま拳を作り、悲壮に満ちた笑顔を見せた。

「中村ッ！」

馬鹿野郎と心の中で怒鳴りつけながら、衛士に迷惑を掛けぬ選択を選んだ彼女と、嫌な直感が現実となった状況に苛立ちつつ手を伸ばす。何よりも素早く差し出されたその手は槍のように鋭く彼女の腹部辺りを鷲掴んだ。が――無防備となる人体は想像以上に重量を持っていて、到底、運動も何もしていない彼が堪えられるものではなかった。

時の流れが遅く感じる。下腹部に、締め付けられるような鈍い痛みが走った。噛み締める奥歯がギリリと軋む音を鳴らす。指先に掛かる彼女の全体重が腕全体に纏わり付いて、引き寄せようとしても彼の身体が彼女に近づくだけだった。

――頭の中が妙に冷える。いや、正確には既に頭の中は冷え切っていた。

既に砂時計は使用している。だからここで彼女が死のうと大怪我を負おうと無傷であろうとも、結局は何事も起こらなかったあの時間に戻る。

だから衛士がここで彼女を護ろうとしても、逆に蹴飛ばそうとしてもなかったことになる。助けても彼女の記憶に残ることは無いし、彼自身が、人間として助けようとした、その選択を実行したという事によって自尊心は保たれる。

だから、もう良いんじゃないかと、誰かが心の中で囁いた。

時間が巻き戻っても、肉体の損傷は無かったことになっても、痛いと感じた記憶だけは残るのだ。

だから、もう――。

「違う！ でも、まだ――だッ！」

叫び、彼は全ての力を腕にこめて彼女を引き寄せる。最早状況確認をしている余裕は無い。倒れた体勢が危険な角度だったから、入

射の瞬間に後頭部を叩きつける危険性があつたという事しか認識できていない。

やがて彼女が衛士に近づいたところで、今度は彼が壁に背中を叩きつける。そうすることで壁沿いに彼らは滑り――彼は体勢と整える余裕も無く横転。

段差に背を叩きつけ、身体が僅かに浮き上がった瞬間に今度は後頭部を叩きつける。衝撃が体内に駆け巡って、肺の中から全ての気体を吐き出させた。脳細胞が半分以上は死んだだろうと思う程の激痛が脳内に浸透したところで世界は白く染まりあがり、暗転。

「――大体ねえ……」

そして時間は巻き戻る。

「だから！　うるせえって！」

そして衛士は間髪置かずに並ぶ彼女の肩を掴み、力いっぱい引き寄せる。気分的には人命救助だが、その行動は客観的に見るに柄の悪いナンパ男のようだった。だから「初めては山田君に」なんて悲鳴じみた言葉を彼女は発して……直後、慌てたような高速度で階段を駆け下りる生徒が通り過ぎていった。

――頬に拳が突き刺さる。同時に悲鳴が鼓膜を貫いた。

「へ、変態！　ド変態！　クソムシ！　そう言う人間だとは思わなかったわ……弱みに漬け込んで力任せになんて……馬鹿あ！　山田君にいいつけてやる！」

廊下の中腹辺りで怒鳴りつけられ浴びせられる罵詈雑言は、そこだけに留まらず周囲数十メートルに響き渡る。故になんの騒ぎだと詰め掛けてくる野次馬魂逞しい人間が集まってきて、それにバツが悪くなったのか、中村は人垣の中に飛び込むようにして逃げ出した。間も無く姿は見えなくなって、残された衛士は、一つ脱力の息を吐く。

「畜生、誰か慰めてくれ」

心が折れそうだと嘆くが、最早彼の精神は幾度かの鍛錬によって鋼に変わっていた。だから彼が思うより彼の心は下手に折れたりは

しなかった。

時衛士の周りには周囲を見ない人間が多い。だからこそ、命に関わる危険ごとが奇妙な程に多かった。今のがその良い例である。

そして衛士は、今回の事がきっかけでようやく身体を鍛えようと決意した。

「なんで体感した五分を巻き戻すんだよ……巻き戻したいときに五分巻き戻すので良いじゃんか！」

もう痛いのは嫌なんだと頭を抱えて衛士は嘆く。その右手には、薄いプラスチックカードが握られていて――残りの善行数は、一〇五で止まっていた。

だが幸いなのは、善行をするのに砂時計を使用しなければならぬ、という原則ルールが無いことだろう。だから年寄りに好意で席を譲っても、道に迷う外国人の案内をしても確実に善行を一つ積んだと認識される。免許証に刻まれた数は、その行動を終えた瞬間に自動的に一つ減った数に修正される。

また、不正行為に砂時計を利用した場合は、悪意を持って砂時計を作動させた瞬間に数が三つ増える。

現在、衛士が知っているのはその程度の情報だけであった。

どこからが善行なのか、世界を救う行為でもたった一つの善行なのか。そこだけは知っておきたかったが、見知らぬ番号に電話を掛けるのは気が引ける程度の警戒心を持ち合わせる彼は、妙にそこだけを抑えて、未だに電話を掛けられずに居た。

『私立・霊成学園たまなし』は広く大きい閑静な住宅街を抜けた先にある。住宅街から少し進むとアーケード街があつて、そこを過ぎると大きな百貨店デパートが良く目立つ駅前到達する。ここまでが約三〇分であり、衛士の自宅はそこからさらに真っ直ぐ進んで十五分程の場所にあつた。

当ても無くアーケード街をぶらつき、その中の本屋で新刊を漁って購入。散策もやがて一時間が経とうとする中で、衛士は空っぽの

胃が悲鳴を上げるのに気付いて空腹を理解する。だから、さて帰ろうかと本屋を後にし、アーケード街を抜ける。

その入り口はまず右側に伸びる一車線の道路があつて、正面には徐々に幅広になる二車線歩道付きの道路が視界内に広がる。駅に向かうには、ただ車の往来だけを気にして歩道に入り、真っ直ぐ歩けば良いだけだった。

衛士はまばらになる人の行き交いの中に割り込んで歩道へ。やがて車道と歩道を隔てる縁石が顔を出して安全性を確立させていた。時間が経ったせいか制服姿はほとんど見かけなくなり、見かける影は買い物帰りの主婦や昼食に出かけるスーツ姿の会社員が殆どだった。やがて車の通りが相も変わらず多い駅前を抜ける。

しばらくして、右折するために信号が青で点滅する横断歩道の前で立ち止まる。走って渡れば赤になつて数秒程度の所で向こう側にたどり着けたであろう距離なのだが、空腹が彼の足を重くしていた。帰りは怠惰を極めよう。そう頭の中で宣言していたのだ。

車道の信号が赤から青に移り変わる。エンジンを唸らせるバイクを口火に、発進しても良いという合図をまっていた後続車はここぞとばかりにモータを唸らせ滑るように道路を走った。

——その中で、頭の中で羽虫の蠢きが鮮明に浮かび上がるような不快さが彼を襲う。衛士は慌てて、震える腕をバッグに突っ込み、砂時計を地面に置く。その時点から五分間は計測され、本来感じる一秒が二秒にも三秒にも感じられる緩慢な時間の流れを覚え、衛士は大きく息を吸い込んだ。

体内は僅かな安堵を得て、目を細めて信号を睨む衛士はただ何事も起こらずにソレが青になる事を祈っていた。その時点で周囲を確認することこそが、本来自分に出来て、しなければならぬ事だと言ふ事も忘れて。

「後一分……」

しかし何事も起こらず、緊張に高鳴る心臓は落ち着きを取り戻し始める。同時に車の通日も静かになり始め——信号は黄色に移動し、

やがて赤になる。

彼は安堵の息を吐いて膝から崩れ落ちそうになる。そんな彼の脇を、仲睦まじそうな親子……というよりは姉妹のような二人が過ぎで行った。透き通るような金色の髪を巻いてセレブさを醸し出す姉と、小学校低学年らしい内気そうな女の子。両者はそれぞれフリルのついたワンピースを着て優雅そうに横断歩道を歩いていた。

衛士が心臓を跳ね上げたのは、彼女等に心を癒された次の瞬間のことである。

ふと視界に入り込む、左側から走ってくる普通自動車。それは中央線を跨ぐ位置で走り続け、既に停止線からそう距離も無いのに徐行も減速もする気配が無かった。極めつけは、

「走れ！」

顔を伏せて動かない運転手が見えたことであつた。

居眠り運転。衛士はそう確信して思わず叫び、道路に飛び出した。ただ呼んだだけではその足を止めてしまう。否、恐らく殆どの人間が突然叫ばれたら、その内容に関わらずその場で止まってしまうだろう。しかし、せめてその危険から逃れる可能性があるならば――。

刹那――その思考は突如として掻き消され。

次の瞬間、彼の視界からはその車も、仲睦まじそうな姉妹の姿も消えてなくなった。

砂時計が規定の時間を経過させ、世界は砂時計に手をかける直前に戻っていた。

なら、もう後は彼女等に声を掛け引き止めれば良いだろう。出来る事は、しなければならぬ事はそれだけだ。

衛士がそう考えて安堵するのは、それが今まで通用したからで、今回もそうだと信じていたからだ。

しかし胸に渦巻く不安は未だ拭えず、下腹部に奇妙な違和感を覚えたままだった。

「……まだ、何かあるって言うのか？」

顎に手をやり、砂時計を片手に考える。

本当にそれだけか……？ いや、違う。もっとだ、もっと深く考えろ。

あの――居眠り運転に姉妹が轢かれた直後の展開。否、今回は姉妹が轢かれなかった場合だ。衛士が何もせず声も上げず運転手が居眠りに落ちる中で、彼はどこで、そしてどうすれば覚醒するのか。そこが今回で一番重要になる。

思惟の最中で信号は青から黄色に移り変わり、衛士は無数の展開を頭の中に思い描きながら、地面に砂時計を置く。すると背に、先ほどまでは余裕の無さから感じられなかった気配を覚え、彼はちらりと背後を窺った後、知り合いでも見つけたような気軽さで振り向いた。

それに気付いて衛士を捉えるのは、青藍色の瞳。不信感を抱いていると表現する細い眉はしかめて眉間に皺を寄せる。前で組む手を解いて口元に伸ばすと、恐る恐る、彼女は疑問を呈した。

「あの……何か？」

この平凡な街には似つかわしい外観を持つ女性は、しかし衛士とは然程年齢が離れているようには見えず、大人っぽい少女といったも差し支えはなさそうだった。

長い髪は幾本かに分けられ縦に渦を巻き、上品そうな雰囲気は彼女の背に隠れる子どもからも伝わってきた。

初めて出会ったという気がしない。何か、因果的に繋がりがあ
るのではないかという程、彼女には見覚えがあった。しかし彼女がどこの誰なのか分からず、またどこでいつ出会ったのかすら思い出せない。恐らくテレビか何かで彼女に似た人物を見ただけなのだろうと結論付けて、間を空けてから、衛士は口を開いた。

「あ、いやあ、特に用と言うのはないんですがね。実は――」

刹那、全ての音を掻き消す警笛が耳に劈き――間も置かず、ついに反対車線飛び出してしまった車と、本来通るべき道を走っていた車と瞬く間に距離を縮めた。クラクションは絶えることなく、停

止している車に肉薄する対向車はなす術も無いままに、車を降りて歩道へ避難。そして残された車へと、居眠り運転士は速度を落とす事無くそのまま縁石に側面を擦り火花を上げながら、その車の正面から衝突した。

凄まじい爆音が周囲に衝撃波の容易に走り、衝突の衝撃によって浮かび上がる車体は、縁石を乗り越えて衛士を含む姉妹ら三人の目の前へ飛び出し、襲い掛かる。

身体が硬直する。

何かを思考するよりも早く、空中で横転する車の側面が頭を弾き飛ばした。酷く簡単に、衛士の首はひしゃげて意識は途絶え、無防備になる肉体を、車体は無慈悲に巻き込んでいく。

何が起きているのかすら理解できていないその姉妹は悲鳴を上げることすらままならず、ただその背後に通りかかったサラリーマンによって後ろに引かれ距離を取り、やがて車が横断歩道の正面にある建物に突っ込み大破するのを見届けた。が、その光景が彼女等の記憶に確かに刻まれたのかは定かではなかった。

そこから約二分が経過して――。

「畜生、どうすりゃいいんだッ!？」

生命いのちと意識を蘇らせた衛士は叫び、砂時計を地面に置く。頭を抱えて地団太を踏みたいところだが、そんな時間的余裕は存在しなかった。

車道の信号が赤に変わる。

――三度目の正直だ。

「あの、どうかされましたか？」

優しい声が背中に降り注いだ。

砂時計を地面に叩きつけながら振り返ると、彼女は驚いたように身を引いた。だが構わず、衛士はその怒りと恐怖と悲壮を混じらせた表情を解けずに言葉を紡ぐ。

「一生のお願いだ、ここから離れていてくれ!」

怒りに任せて、恐怖を抱く心を誤魔化すように喚き散らす。驚愕

か恐怖か、そのいずれかに表情を染める彼女はただ呆然とするように衛士を見詰める。そんな彼女に心の中で地面で額をすり潰しながらその場から離れて道路に飛び出し、やがて見えてくる居眠り運転の車へと走り出した。

「起きろ起きろ起きろおおおおッ！」

一度死んだ。その事実は記憶として刻まれた。

そしてその時の、瞬間の恐怖はまだ肉体に息づいている。傷一つ無いその側頭部に、強烈な打撃を受けたような痛みの余韻が残っている。

だから怖い。今すぐにでも縮こまって暫く一人きりで居たい。でもそれだけじゃ寂しいから誰かと一緒に居たい。そんな矛盾した気持ちしが腹の奥底で膨らんだ。

彼の行動は既に常軌を逸する異常性を持っており、少なくとも今彼を理解できる人間は居なかった。だから道行く人々は足を止めて彼に注視する。視線は何よりも冷たいが、衛士はそれを気にする時間、それに気付く余裕すらもない。

——車が見える。

運転士の頭は未だ俯いていた。

「デメエが起きてりゃ、平和なのによォッ！」

一つまばたきをすると、車はもうすぐ目の前に迫っていた。運転士の頭は、未だ下がっている。時間的な問題によって彼を起こすことはもう不可能で——身体は殆ど反射的に、右側の車道へ飛び込んだ。

クラクション

警笛が周囲に鳴り響く。間髪置かずに暴走車は衛士の横を通り過ぎた。

「君！ 危ないよ！」

背後で、クラクションにも負けないくらいの、喉を破らんばかりの大声が誰かに向けられる。破裂しそうなくらい大きく高鳴った心臓に痛みを覚え、衛士は振り返り、見た。

横断歩道のど真ん中でクセのある長い黒髪の子どもを抱いて立ち

止まる、先ほどの彼女の姿を。

そして次の瞬間――人の姿が車影に飲み込まれ、鈍い音が響く。
衛士の、今回の記憶はそこで途絶えた。

それから幾度かの五分間が経過した。

「――あのすいません、ちょっとここらへんでハンカチ落としたみたいなんですけど、知りませんか？」

「ハンカチ……ですか。すみません、どのような柄でしょう？」

「青と白のストライプです。あはは、あの……もしよろしければ」「はい、お手伝いしますよ」

金髪縦ロールの彼女は目を細めて笑い、頷く。それから身を翻して、来た道を引き返す。衛士は何度も見た暴走車の登場を再び視界に収めた後、地面を向いてありもしないハンカチを探す少女の後に付いた。

――間も無く警笛が鳴り響き、衝突音が耳に届く。周囲の人々の悲鳴が聞こえて、横転し縁石を越える車が地面に叩きつけられ、それは転がり建物に突っ込んだ。

辺りはざわめきに満ちて、それに驚く少女等は事故現場に視線を向け口元を押さえて硬直する。それほどまでに、始めて見る光景とは衝撃的なのだろう。衛士は他人事のように思ったのは、酷く冷め切った感想だった。

衛士はそれらに短く嘆息して、ズボンのポケットから青と白のストライプ柄のハンカチを取り出し、彼女の視線の先を塞ぐような位置で振る。と、それを捉えた彼女はようやくハンカチに焦点を合わせた。

二人の停止した時が再び刻み始める。それを確認してから彼は口を開いた。

「あはは、すいません。ポケットにありました」

冗談めかしく頭を掻いて、

「ありがとうございました」

短い感謝の言葉を最後に彼女等に背を向ける。

呼吸は無意識に苦しくなる。最早それは見慣れた事故現場こうけいであるはずなのに、心臓は懲りずに高鳴り緊張する。

——だけど、もうそれが終わった。砂時計を使っていないから時間は決して戻らない。

衛士に助けられるのはこの二人が精一杯だった。しかし幾度もの検証の中で一番被害者が少ないのが、彼が出来る中で最良なのがこのやり方であった。運転士一人の犠牲。自業自得と言えばそれまでだが、彼にとって納得のいくやり方では決して無い。しかし全てが丸く収まるなんて事は、今回に限っては存在しなかった。

「あ、あの……」

踵を返し、振り向いて帰路を急ぐ。呼び止める声が背中を掴むが、衛士は足を止めない。

「……もう嫌だ」

無意識に呟くソレを残して、彼は足早にその場を後にした。

——午後一〇時。

部屋で腕立て伏せにはげんでいると、不意にドアが開く。そこから家政婦のような鋭さで中を覗き込むのは、衛士の姉『時理恵』ときりえだった。

「はあはあ聞こえたから」

というのが彼女の言い訳だ。特に責めても無いのにも関わらずそう口にするのは、やましい気持ちだけを原動力にしてドアノブを捻ったからなのだろう。

衛士は苦しそうに息を吐くと立ち上がり、首に掛けたタオルで汗を拭う。彼女は興味津々な年頃の娘のような清々しい笑顔を見せ、頬を薄桃色に上気させていた。

まだ五月なのにタンクトップにホットパンツと言う薄着で大丈夫なのかと衛士は思うが、春夏秋冬、暑い日も寒い日もソレで乗り切った彼女なのだから大丈夫なのだろう。ヨレヨレのタンクトップか

ら胸元が露わになるが、それも一切気にならなくなるのが姉弟きょうだいの悲しいところだと彼は吐き捨てた。

「こんな美人のせいで目が肥えちゃってるからね」

のしのしと大腿で部屋の中を横切り、衛士の寝台ベッドに座り込む。腕と足を組み、まるで部屋の主のような大きな顔をするのが彼女の日常つともだった。

「何の用？」

筋トレを中断して椅子に腰を落とす。彼女は勝手にベッドに寝転がり壁を背にすると、そのまま小器用に窓を開けた。もう六月に近いかから風は少しばかり冷たさを失っていて、しかし汗を噴出す衛士にとってはそれさえも心地よく感じられた。

「用が無いと来ちゃダメ？ あと……そこどいて」

「だって姉さん、オレが寝るまで普通に居座るから……」

——体がだるい。疲労が溜まっているのだろうか。瞼はもう開けていられる程の力を持たず、彼女の要望に答えられるような体力は残っていないかった。

脱力したまま背もたれに全身を預け、それから深く長く、息を吐き続けた。

——席を立つと、入れ替わって彼女が座る。そのまま肉付きの良い二の腕を震わせながらパソコンへと手を伸ばし、電源ボタンを押す。机の上に据え置かれるディスプレイには数秒の内にBIOSが起動し、やがてOSが立ち上がった。

彼女は人目を、というか衛士の眼も気にせずソーシャルネットワーキングのサイトと動画共有サービスのサイトとを入れ替わりで閲覧し、最後にゲームをして彼が眠る頃になって漸く席を立つ。それがここ一ヶ月近く続いているせいで、彼は精神的に休まる暇が無かった。

どちらにせよ殆ど筋トレも終わりだったから、と衛士は諦めて肩をすくめた。

立ち上がり、彼はぶっきらぼうに言葉を投げる。

「風呂、入ってくるよ」

「あ、それじゃついでに私も入ろうかな」

短い嘆息。期待を裏切られたというような視線を理恵へ投げると、彼女はあくまで冷静に首を傾げた。

「……入るなら先に良いよ」

「違うのよ。私はエージと一緒に入ろうかな、って意味で言ったわけよ」

——今日ばかりは、彼女の相手をする元気が出ない。

身体を動かすことで気を紛らわせていたが、それでも”死んでしまった”と言う奇妙な後ろめたさが残っているのだ。しかしこの胸の中のモヤが、本当に自分の死について意味しているのか分からない。もしかししたら、車に轢かれたあの姉妹の方かも知れない。だがそれを知る術は無く、今は吹っ切るしかない。だからといって、誰かに頼る事も出来ないのだ。

砂時計の事は誰に喋るわけにもいかない。情報漏洩は極限にまで少なくするのが、彼の理想であり最低限守らなければならないことだった。

「じゃあ入る？」

投げやりに吐き捨てたその台詞は、

「——おーおー、立派になっちゃって」

水着姿で現れる理恵に、風呂場で背中を流されるという事態を招いていた。

——最後に彼女と風呂を一緒にしたのはいつだろうか。確かアレはまだ二人とも幼かった小学……六年だったような気がする。本当に幼かったのかと頭を捻るが、自分の記憶ほど曖昧なモノは無いとの言葉をどこかで聴いたのを思い出して、回想を断念する。

一つ年齢が離れただけの彼女だ。同じ血が流れてるとはいえ、流石に弟と裸の付き合いが出来る程の無神経な女性ではない。

柔らかな泡を纏うスポンジが——無い。きめ細かい肌がその代わ

りとなって、そのまま手で背を撫でるように洗ってくれている。多分気紛れなのだろうが、気にならないと言ったのが嘘のように、彼女を女性として考えてしまう自分に戸惑った。

「そういえば今日女の子と階段でイチヤイチャしてたでしょ」

理恵は同じ学園の三年生である。だから無論、彼の動向を知られてもそう不思議なことでもない。が、とても恥ずかしいことではあった。

多分彼女が言うのは、中村が男子生徒とぶつかって階段から転げ落ちそうになった時の――否、ぶつかりそうになったのを衛士が引き寄せ、防いだ際の事を指しているのだ。それを説明した上でただの善意と言いたいが、その直後に顔面を殴られてしまえば、説得力は失われてしまう。

仕方無しに、白状するよと米国のホームドラマのような白々しい所作で肩をすくめる。

「ああ。後ろから人が来たから危ないつつつて抱き寄せたら……あのザマだ」

「ちゃんと事情を話さないからよ。アンタはいつつもヘンなところで口下手なんだから。昔っからねーちゃんねーちゃんて育ってきたのが原因かもしれないわねえ」

それなのに最近になって何を改まったのか、突然姉さんなんて呼び始めて……。そんな愚痴と共に彼女は背中を強く叩き、泡が宙を舞う。衛士は促されたようにシャワーを渡して、栓を捻った。

「わざわざトレーニングしなくてもいい肉体じゃない。ムキムキの筋肉質より薄く腹筋が割れてる程度の方がいいのに」

「それは姉さんの個人的な趣味だ。オレはもっと、こう……簡単にへこたれないくらい強くなりたいんだよ」

精神的にも、肉体的にも。そうすればあの時死なずに済んだかもしれない。誰かが犠牲にならなくても良かったかもしれない。

だがあの事故の責任が衛士にあるわけでも無いし、それを背負っているわけでもない。単なる自己満足に過ぎないのだが、彼の決意

は揺るがなかった。

「……ったく。なんで私がここに居るか、まだ分からないの？ ニ
ブチンさんよ」

「はあ？ 気紛れだろ？」

「アンタが帰ってきてからずっと死にそうな顔してるから話しやすい環境を作ってるんじゃないのよさあつ」

——風呂まで付いて来たのは声が外に漏れないようにとの配慮である。ちなみに彼女は既に二時間前に入浴を終えており、今回で二度目の湯浴みであった。

衛士はそこまで言われて始めてコレが彼女の好意であることを理解する。”死にそうな”と言う言葉で思わず胸を高鳴らせたが、反応の無い彼女にはどうにか誤魔化せたいと確信する。が、理恵は勿論それに気付いているのだ。衛士がそれを察せ無いのは、やはり大きな動揺が原因となっていた。

伊達に姉をやっていないな、と嘆息し、首を振る。脇から手を伸ばしシャンプーを手のひらに乗せる彼女は、そのまま擦って軽く泡を作り、頭をわしゃわしゃを掻き乱した。

「話したくないの？ 話せないの？」

——今回の問題が一体何なのか、衛士自身理解しきれていない上に確実に砂時計が関わっている事象だから両方なのだろう。

申し訳ないという気持ちが膨張し、ごめんなさいとすら口に出来ない自分に呆れる。首筋に嘆息の吐息が掛かって、その感情はパン生地を寝かせている最中のような緩慢さで膨らみ始めた。

だけど、このままじゃいけない。これではなにも変わらない。今までと同じだ。何も変わらずに強くなれるはずが無い。すぐに変わることは誰にも無理だが、強くなるヤツは皆、変わろうとする始めの一步を強く踏み出している筈だ。

だから——。

「——もし、さ……」

勇気を持って、喉の奥から声を絞り出した。呼吸が苦しくなるの

は、緊張から来るストレスの所為だろうか。

理恵はただ静かに頷き、口を挟まない。それが今の彼には大きな助けとなっていた。

「もし、オレが……」

勇気を持って、告白する。もしオレが死んでしまったという事実を持っていたとしたら。説明が下手な彼はそれを口にするのにも精一杯だった。なのに……。

——浴室の扉が勢い良く開かれる。乱暴に突き破るような音を立てて入り込む気配に驚いて振り返ると、

「エーッ！」

それを遮る声が、背から抱きつく彼女がその行動自体を完全に阻止し——覚えた。彼女の肉体に何かが突き刺さる感覚を。

——強盗。殺人鬼。空き巣。

脳内に連想が全て浮き上がる。

首だけを向けて振り返った。

——男。勝てるか？ 凶器は包丁。見知らぬ男？ 知り合い？

オレも、殺される？

悲鳴は出ない。恐怖は、否、衛士の肉体からは意識以外の全てが抜け落ちていた。

——包丁を抜いた。姉さんは死……？ 嫌だ。死にたくない、嫌

だ、もう、嫌だッ！

身体は動かず、背後に立ち尽くす男の挙動だけが妙に理解できる。背中が熱い液体で濡れる。心臓は破裂しそうなくらい激しく鼓動を打ち鳴らしていた。

——死にたくない。殺されたくない。守りたい。だけど、もう……。

「いや、違う」

「……ジッ！」

男の鈍い声は、言葉を紡がない。壊れたラジオのノイズじみた音は舌打ちの様に音を鳴らし、正体不明のその存在にさらに不気味

さを付加させた。

勇気が腹の奥底から迸る。同時に、その全てを塗り替えてしまうほどの恐怖が根底にはあった。

足に力が戻る。衛士は踏ん張り、理恵を背負ったまま立ち上がる。腕に力が戻る。理恵を抱きしめ、そっと床に寝かせて、彼を睨んだまま立ち尽くす男の影へと対峙した。

——死にたくない。

なら最後まで抵抗してやる。

——殺されたくない。

その直前まで足掻いてやる。

——守りたい。

なら叫べ。

「でも、まだ——だッ！」

「エージッ！」

声と同時に降り注ぐのは平手打ちだった。

「どけてのに寝ちゃうし、寝たら寝たでうなされるし、泣いちゃうし……風邪引くわよ？」

薄く開く目は景色をぼやけて映す。だがすぐに理解できたのは、汗によって濡れる衣服から感じる不快感と、数キロを全力疾走でもしたかのような激しい鼓動のせいで苦しくなる呼吸だった。

身を起こすと途端に感じる、肩の鋭い痛み。そこでようやく椅子に座ったまま眠っていたことに気がついた。

右腕の感覚が無いのは腕が痺れているせいだろうか、震えてしまっているのは本当にそれが原因なのだろうか。彼は腕を引き上げ顔の前に寄越すと、すぐさま理恵が手を優しく両手で包んだ。

「明日は土曜だから別に良かったんだけどさ」

凄惨な光景が、まるで本当にあった事のように蘇る。しかし恐怖が薄れているのは、理恵が握る手のお陰だった。

やがて視界が鮮明になる。そうすると、顔を覗きこむ様にしてい

た理恵の、心配そうな顔がまず目に入った。それから、申し訳ないという気持ちが膨れ上がって――ソレに、妙な既視感^{デジャヴ}を覚える。ここ最近で、砂時計を使用せずに見るデジャヴはこれが初めてだった。「せっかく買い物に付き合ってもらおうと思ってたから、風邪でも引かれちゃ計画もおじやんになっちゃうし。エージの看病でせっかくの休日潰すのも、エージのバイト先にお休みの電話を入れるのも嫌だしさ」

「姉さんが買い物に付き合えてウルサイから明日は休みを入れてあるし、風邪引いても自分で電話するし、そもそもそんな甲斐性があるような事言っても、結局看病してくれるの母さんだし」

「っさいわねえ」

「そのせいで今日、来週にプラス一日シフト入れられたんだからな」「いいじゃない。親愛なる超美人のお姉様のお買い物にお付き合いただけるのよ？ 学園でどれほど人気があるかアンタも知ってるでしょ？」

――所詮、姉といっても現実はこのものだ。

しかしさすがは夢と言ったところだろう。オレが求める理想の姉の像が見事に反映されていた。鋭い洞察眼と、人を思いやる気持ち。そして極上の優しさと、命の危機があるのにも関わらず、それを顧みぬ行動で弟を守る聖女的献身さ。彼の眼に映る彼女には、それらが欠如していた。さすがに完璧なまでには言い難いが。

彼は心の中で愚痴を零す。全身の凝り固まった筋肉を解しながら椅子から身体を引き剥がし、漸く立ち上がる。大きく息を吐くと、それだけで体内に溜まった全ての毒が抜けたような清々しさが通り抜けた。

「姉さんの”美貌”は客観的に見ても確かに”それなり”だけどさあ、実際学園で姉さんの話題なんか聞いたこともない」

「ナニその強調部分」

「別に。あ、そうそう、今から風呂入ってくるけど……絶対に来るなよ！ もう夢じゃないんだからな！」

力いっぱい警告する。もしアレが正夢となっていれば冗談では済まないからだ。が、彼女はなにやら呆然と軽蔑の眼差しを衛士へ向けるだけだった。

「……さっさと入ってきて、その寝ぼけた頭と面を覚まして締めて来なさい」

机上のデジタル時計は一〇時一三分を示していた。あれほど濃厚な夢のせいで一時間も二時間も過ぎた気になっていたが、どうにも僅か数分の出来事だったらしい。

彼は嘆息して、なにやら恨みがこもった様に叩かれた背中 of 痛みの余韻を感じながら、寝巻きを手には部屋を後にした。

二目

衛士の深い眠りを覚醒へと誘うのは、自室に届く頃には些細な響きとなる呼び鈴の音だった。

代わり映えの無い音色のドアチャイムは短く家中に響いて余韻を残す。思考を停止していればソレが鳴った事に気付く為に数十秒を費やしてしまう程度の、ささやかなもののだが。

うつ伏せで布団の中に沈む身体を、鎌首をもたげるように引き起こして四つんばいになる。布団は、彼が夢の中で悪漢を蹴散らすのと一緒に吹き飛ばされ寝台の下に塊となって落ちていた。衛士は頭をブンブンと振って首の骨を鳴らし、起き上がって凝り固まる全身を解して寝台を降りた。

開けっ放しの窓から入り込む風が背中を撫でる。その窓からはこれでもかと言うくらい眩い朝日が降り注いでいた。

「清々しい」

言葉は口に出すことによって、彼の心情を強制的に変えさせる。

そこまでして漸く、彼の頭から眠気は払拭されたのだった。

机の上に据えて置かれるデジタル時計が示す時間は午前一〇時。

先日は、というか今朝は午前四時まで姉に付き合わされた彼だから、この時間に起きるというのは我ながら天晴れだと自画自賛する。心豊かで天気が良いのだから、機嫌が悪くなる要因が見当たらないと、彼は鼻歌を歌いながら洗面所へ向かった。

その最中に、

「エイジ！ お客さんだよーっ！」

母の呼ぶ声が彼の心臓を俄か数秒、停止せしめた。

——まさかこの場で大声を張り上げて、そのお相手は一体どなたなんですか？ お母さん？ と口にするわけにもいかず、だが相手が分からない以上無視するわけにもいかない。そもそも、自宅の場所を知っている人間なんて山田か中村か、その辺りしか居ないはず

だ。しかし彼らが今日この時間に訪れるはずが無い。

なら一体……。彼はどんな夜更かしが続く日々でも染み付いた習慣は拭い切れずに必ず朝早く目が覚め、身支度を整え華麗に家を出るところで目が覚めた。そんな夢を見た直後のように心臓を高鳴らせながら、一段一段、しっかりと降りてますよと知らせるように音を鳴らして降っていく。

緊張が下腹部を握り締めるような痛みを与えていた。

なぜコレほどまで緊張と嫌な予感とを携えねばならないのか衛士には分からない。その思考の奥底で、もし訪問者が友人で、家に乗り込まれてしまったら――などと最悪の状況を思い描くが故かもしれないと衛士は考えるが、さらに根底で、姉と出かける約束が踏み躪られ細切れにされる結果を恐れていることに、自覚症状を持てなかった。

彼女との約束を破って苦い思いをしたのは数知れず。美人と呼ばれる程度の美貌を持ち合わせているのは弟という位置から見ても頷けるが、それに対して性格と言うべきか、そういったものが明かに一辺に偏っていた。彼は幼少期に”天は二物を与えず”を理解したのは、そのためである。

中学時代のジャージを寝巻きにしている彼は、その姿のまま、その格好であることも忘れてやがて階段を降り切ると、なにやら笑い声が聞こえる。玄関へと目を向けると見えるのは、玄関と廊下とを隔てる段差に腰を掛ける金色の影と、母の姿。相手は相槌を打つだけで声は殆ど聞こえないが、その声音の高さからして女性のモノであるうと衛士は判断するが、それがより、彼の頭を混乱させていた。「あ、エイジ。遅いわよ。女の子を待たせるなんて」

栗色の髪を翻し、立ち上がるとお客に手を振りその場を後にする。そうして残されたその金色の影も同様に立ち上がると、なんの躊躇いも無く衛士へと振り向いた。

衝撃の出会いに時の流れが緩くなる……。なんて事があるはずもなく、彼女は衛士の顔を見てにつこりと嬉しそうに微笑んだ。その姿

に見覚えが無いはずが無く、衛士は脳裏に半ば反射的に蘇る記憶を見た。

——先日 of 交通事故。彼女との出会いはそれが始めての筈だった。しかし何よりも彼の記憶に残ったのは、彼女になぜか見覚えがあったという事だった。その青藍色の宝石のような瞳にも、透き通るような金髪にも、どこことなく漏れ出す上品そうで近づきがたい雰囲気も、いつかみたようなものだった。

それが何でいつ見たものか思い出せないから、然程重要でも無いと、再び蘇らせた記憶を彼方へと蹴飛ばして、彼女へと向き直る。

「朝早くから申し訳御座いません……しかし、少しでも早くお礼がしたくて」

「お礼……ですか」

しかし彼女は昨日の事故から偶然でも、オレが助けてくれたと考えているのだろうか……。

衛士は後頭部あたまを掻きながら困ったように言葉を繰り返す。

昨日はより確実に安全を得られるようにあの場から距離を取っただけで、実際は彼女たちがあのまま横断歩道を渡っていても恐らく無事だった。暴走車は横断歩道の直前では既に反対車線の縁石に車体を削っていたし、衝突して吹き飛んだのも彼女たちとは正反対の方向である。衛士がしたことはおせっかいと見てもそう間違ったものではないのだが、しかしそれを知らぬものは恩人と感じても仕方が無かった。

それを知るのが衛士だけだからか、彼は妙に気まぐず感じていた。あの行いが自作自演とすら思えてきて、表情が引き攣らずには居られないのだ。

「まあ、玄関で立ち話も失礼ですし、上がってください」

「ありがとうございます……お邪魔します」

素性は知らない。なぜ家の場所を知っているのか分からない。

彼女が、彼女にしては似合わぬ派手な、ヒールの高いブーツを脱ぎ衛士と目線を同じくしたところで彼はそれを思い出し、思考を停

止させる。

もしかして取り返しの付かない事をしてしまったのかもしれないと、振り返って彼女を見ながら額に汗する。相手はまた薄い笑みで微笑むと心が癒されて、可愛いから大丈夫だろうと彼は自分に言い聞かせた。

「母さん、彼女にお茶を出しておいて。ちょっと着替えてくる」

居間へ彼女を促すと、母は丁度テーブルにお茶を用意しているところだった。声をかけると彼女はこちらへ歩み寄り、そこで引き渡してから衛士は自室へと踵を返した。

「――何？ お客さん？」

髪を逆立たせて衛士の寝台に座り込んでいるのは理恵である。彼は嘆息をしながら服を脱ぎ捨て、パンツ一枚になったところで着替えるための服を探す。タンスを開けると独特な木の臭いが香ってきて、それが鼻をくすぐり勢いよくくしゃみが出た。

「ああ」

「友達？ 買い物は？」

「知り合い……かな。予定では午後だろ？ 大丈夫だって」

ジーンズに足を通し、ベルトを締める。次いでシャツを着たところで、理恵は立ち上がりのそのそと歩き始めたかと思うと、衛士のすぐ後ろで立ち止まった。

「何のようなの？ 遊ぶの？」

まだ頭が醒めていないのだろう。そもそも今朝まで起きていれば彼女はいつも昼過ぎまで眠りこけているのだ。騒ぎが耳に入って偶然目が覚めたただけだろうからと衛士は考え、どうせ説明しても無駄だろうと首を振る。

「オレも知らん。いいから部屋に戻って寝てろよ。時間になったら起こすから」

この状態なら次起きてもこの時点での記憶は確実に無い。ぼーっと棒立ちして薄く開かれる目には光が無いが、幼子を彷彿とさせる

純粹さがそこにはあった。知能指数は限り無く低下し、認識力も理解力も全て畜生以下に成り下っているからだろう。

だから怒髪天でも衝いているような頭をわしゃわしゃと掻き乱し、部屋から追い出すように背を押した。

いつもこの位ならまだ可愛げもあるものだ。覚醒時は平気で人を殺しそうな目をする彼女だが、外当たりがいい。だからこそ質が悪いのだ。

そう考えながら靴下を履くと、理恵は再び衛士の部屋へ舞い戻り、寝台に酷く緩慢で心許ない足取りで向かう。それを見守るとやがて身を傾け、膝から崩れると、そのままうつ伏せに寝転がった。

彼女の部屋は万年床でさらに寝台ではないからわざとやっているのかもしれないが、本気で衛士^{ひと}の部屋の方が寝やすいと言って寝床を奪う癖がある。そのクセ自分の部屋で寝られると横腹を蹴っ飛ばして無理矢理に起こすのだ。

衛士は幾度目にかなる嘆息と共に、仕方が無い姉さんだなどひと言残して自身を待つ客人の元へと足を向けた。

「――お待たせ……しました」

実はあまり知らない人間と打ち解けるのは苦手な衛士である。異性であれ同姓であれ表面上はあたかも打ち解けた風に踏み固められた雪原の如く口は滑るが、会話はプライベートなものには移らない。飽くまで実務的であり、事務的。それでいて自分にとっての疑問を解消するモノと、相手から受けた質問に対する答え。大抵初対面の人間との会話なんてものはそれだけで時間は過ぎて終わるものだ。

しかし、見知らぬ、歳の近い異性に命を助けられたお礼として家を訪ねられてしまえば、逃げ場は無いし言葉は無いしで、殆ど八方塞に近かった。億劫で憂鬱なのだ。それが例え、お美しいお嬢さんが相手だとしても。

「いえ、美味しいお茶まで頂いて、面目ないです」

「あ、はは。そりゃ良かったけど……」

テーブルには飲みかけのティーカップ。そこからはまだ淹れたて

というのが良く分かるように蒸気が上がっている。彼女はその手前で膝に手を置き椅子に腰掛けていた。正面にはなぜか衛士の母が座り、父親の姿は不在。恐らく先週から趣味となった日曜大工に打ち込んでいるのだろうから、庭にでも居るのだろうと彼は適当に位置を把握する。

そして母の隣に座ろうとすると、その前になにやら値が張りそうな紙袋が置かれており、達筆な字で店名が書かれていたが、あまりにも達筆すぎるので衛士にはそれがなんと記されているのか読むことは出来なかった。

「それじゃお母さん、ちょっとお昼の買い物に行って来るから」

「あいよ」

明け渡された少女正面の席だが、衛士は断固として斜め前に腰を落とす。空間は閑静な住宅街に相応しいくらい静寂に満ちていて、玄関扉の開閉の音だけが耳に届いた。やがて彼の母が家を出て、扉を閉める音が聞こえると直ぐに口火を切る少女は、真っ先に件の礼とやらを話題に叩き出した。

「あの時は本当にありがとうございました。もし、貴方があそこで私たちに声を掛けてくださらねば、この命は失われていたかもしれません」

「いや、良く考えて見た方が良いと思いますよ？ 自動車は横断歩道の信号が青になって少ししてから衝突しました」

場所は殆ど反対車線。それも縁石に寄りすぎているから中央線からもやや距離がある位置だ。だから彼女が渡り始めても、いかにも危機一髪という場面だが無傷で通り過ぎることが出来る筈だった。

それを説明してやるが、彼女は一向に納得をする気配は無く、目にはより力が入る一方だった。

「無かったことになりませんか？」

「なら無いです。それに、私が一方的に感謝の念を抱いているのに、なぜ貴方の方が恩赦を強要させられている側のような反応なのですか？」

飽くまで静かな口調で論ずる彼女に育ちの良さを覚えた。どんなものであれ一方的に頭ごなしに考え方を否定されれば力が入るものだが、彼女は根気良く頑固に自身の考えを貫きながらも、しっかりと自分を確立させているからだ。

「いやああのですね」言っても良いものだろうか。「貴方の明確な目的が分からないものですから」

「え？」

「いやまあ、感謝の印は頂きましたし、言葉も受けました。だからこれでお開きでもなんらおかしくはないわけですよ。そちらもそれで一応は満足なされたでしょうし。なのにそれでもまだ何か物足りないようなご様子ですから」

衛士にとって何よりも気がかりなのは、彼女の姿に”見覚えがある”という曖昧な記憶。それと直感的に関与していると感じる砂時計の存在。それらに関連が無ければそれで良い。見覚えがあるという点でも何かしら理由が立つ。だが、もしもという事があれば話はこじれるのだ。

——先ほど、ボーイミーツガールという言葉が頭の隅に浮かんで消えた。『オレは既にこんな奇異なボーイミーツガールは経験したぞ』と言葉に成らずともその思いが脳裏に過ぎったからである。そしてその経験した出会いとは、砂時計を与えたミシェルと名乗る女性とのモノだ。彼女は透き通るような金髪を持つ、長髪の美人だった。そして目の前の彼女のように腰は低く、言葉は丁寧。

だから見覚えがあると思ったのだ。衛士はそこに結論を至らしめるが、決して頷くことは許されない。

ミシェルとの出会いは運命を変えた。時を繰り返させる砂時計を与えた彼女の正体は未だに不明だが、少なくともこの世界の人間ではない程度の認識は終えている。だから、そんなミシェルと彼女とが同一人物であつたら——。

何が困るのだろうか。

そこまで考えて彼は気付く。

彼女Ⅱミシエルだとしても別に何の問題はなく、逆に簡単に頼れるようになって良いのではないか、と。

しかし、さらに衛士は気付いてしまったのだ。

目の前の少女と、ミシエルとの決定的な違い。目鼻顔立ちはそっくりで、髪の色も眼差しの強さも上品さその雰囲気さえも同一と思われるほど、まるで生き写しかと勘違いするほど似ている。が、明らかに違いが胸部にあった。その少女の胸は、孤高の寂しさだけを抱いていた。

分かりやすく言えばすつかすかで断崖絶壁、はさすがに言いすぎであろうが、少なくとも衛士があの日あの時あの場所で見たとような今にも破裂してしまいそうで、だというのに抱きつきたくなくなるようなふくよかさ、柔らかさは存在していなかった。

そこには悲しみだけが、満ちていた。

「命が、言葉と羊羹で片付けられますか……？」

言葉は不意に降り注ぐ。

声が震えていた。感情を抑え込む様な震え方は、顔を俯かせる少女の口から紡がれる。そこで衛士は漸く気付いた。どうやら自分が考えていたものより随分と大きな問題に発展していたその事実。

「いえ、貴方の命なら全人類にでも匹敵するでしょうね」

両手で強くテーブルを叩くと、膨張した風船が破裂するような音が響く。

どうやら本気で言ったその言葉を、茶化しふざけたものなのだと勘違いされたようだった。

「申し遅れました……。私は早乙女……早乙女さおとめみる美琉です」

「時衛士です。よろしく」はあまりしたくはないが。「お願いします」

「私は、ですね。この出会いを、大切にしたいのです。どうあれ、貴方と出会えたことは、私にとって、非常に掛け替えの無いものでしたから」

「大切に……。具体的に？」

「ひざま……うう……あの、お友達として」

嫌な予感がして聞いてみる。

「対等な？」

「はあ？」

「へ？」

「あっ……も、勿論……ですわ」

ですわ？

なにやら分厚い化粧が崩れてきたような気がする。大福を叩くとそれを包むように張り付く片栗粉が塊を成して落ちるように。

我慢の限界なのか、その口調にそもそもなれて居ないからボロが出てしまうのか。

跪けと言いかけてみたり、対等かと聞けばあたかも早乙女の方が上であることが世間の常識であるのにも関わらずそんな愚問を投げろのか？ というような発言を反射的にしてみたり。恐らく今目の前にしている少女の風貌とは正反対の性格が、腹の奥底に渦巻いている。

あの踵の高いブーツの時点で気付けたのかもしれない。否、そこで気付かなければならなかったのかもしれない。

衛士は今すぐに席を立て姉の下に駆け出したかった。シスコンと呼ばれても構わない。今が助かれば、彼女との関係を断ち切れればそれで今は満足だった。

「あの、よろしければ連絡先を交換してもよろしいでしょうか？」
渴いた喉を潤すために口にした紅茶は、早くも温くなっていた。

——携帯電話を取りに自室へと戻ると、寝台に横たわる姿は胡坐を掻いてこちらを向いていた。

並びの良い白い歯を見せてニヤニヤと笑みを零す理恵は衛士の携帯を顔の横で振りながら口を開く。衛士の背筋が絶対零度によって凍りついたのは、恐らく気のせいでは無いだろう。

「母さんから電話が掛かってきてね、うるさいから出たらアンタの

携帯だったって訳だけど……。話は”全て”聞かせてもらった。いえ、聞かせてもらっている、ってわけだけどねえ……」

「あなたは何やってんです！」

「盗み聞き」

大股で近寄りケータイを掠め取る。そんな衛士の顔に怒りは無く、蒼ざめ危機感だけを表現していた。一番知られてはいけない人間に知られてしまったと、恐らく理恵でも顔を見て理解で切るだろう。だが彼女は相変わらず嫌らしい笑みだけを浮かべているだけだった。こればかりは何をしでかされるか完全に未知の領域である。何せ、衛士にはお付き合いしてきた女性などは存在しないし、女の子を家に連れてきたときも友人に勝手について来た者だけなのだ。親しい女性は何人か居るには居るが、プライベートで遊ぶレベルに進展しているのは皆無である。

未知数——それがコレほどまで恐ろしいものだとは思わなかった。話は変わるが、弱い肉体しか持たない人間がこの食物連鎖で頂点を極められたのは、その知的生命体たる知性であり未知を既知にし得る探究心であったのだ。

それを考えれば、理恵は自身の欲望を満たすためではあるものの絶えぬ好奇心で知識を蓄えるという行動に学術的な意味は無いであろうが、人間の人間たる生き方を考えれば決して愚劣とは言いがたいはずである。

何が言いたいのかわれれば、彼女の行動は極めて本能的であるということである。

「見た感じお嬢様ってヤツだね」

——頭はそれでも醒め切っていないのか、舌足らずな印象は着替えに来たときと変わらない。一体何が彼女をそこまで動かすのか。衛士は頭を抱えながら息を吐いた。

「本性が見え隠れしてんだけど、どうすればいいと思う？」

「どんな？」

「跪けって言いかけてみたり、対等なお友達？　って聞いたら『は

あ?』だって」

今は彼女の頭は正常に作動してくれていることを祈るばかりである。だが衛士は気持ち半分で、取り敢えず言ってみただけであり、彼女の発案や思考を頼りにするわけではない。そもそも、彼女の考えがまともに役立った事自体が少ないのだから、その程度の信頼でも仕方が無いだろう。

じゃあ、と言葉の前に添える。それだけで、衛士は期待と仄かな不安に駆られてしまった。

「一、お姉ちゃんに全部任せる。二、可愛い娘ちゃんに全部任せる。どっちがいい?」

「……三、オレに任せろ」

「うんうん。自分の問題は自分で片付けなくちゃ。どっちかにしたら、ぶっ飛ばしてやろうかと思ったわよ」

笑顔で頷き、立ち上がるといふもとは違った優しさで背中を叩く。それからへそ出しルックのまま背を向け、

「ちゃんと起こしなさいよね」

とだけ残して、今度はしっかりと足取りで部屋を出て、三メートル離れた隣の自室へと戻っていった。

「関わるのが面倒なだけなんじゃ……」

残された衛士はその場で大きく深呼吸した後、意を決して早乙女の下へと戻っていった。

女神のような優しさを持つ目は閉じられていて、ほっそりとした指先は頬にあてたまま硬直する早乙女を見て、衛士はこんな絵画か彫像があったかもしれないと記憶に検索を掛けるが、一秒以内に目的の物がでない。そして別段それはどうでも良いので中止した。

無駄な行動だと自省した後短く息を吐くと、それに気付いたかのように彼女は眼を開け、にっこりと微笑んで首を傾げた。

「準備は出来ていますよ」

スライド式のケータイを振って見せる。席に着いてから簡単な操

作のうち、連絡先を赤外線で送信する昨日を作動させ、相手の受信部分に傾ける。ややあって相手も同じ操作をして――やがて送られてくる早乙女美琉のメールアドレスと電話番号を”友達”のグループに登録した。

短く、簡単な操作。それだけで、二人の関係はより深くなる。それが良いものなのか悪いものなのか、衛士には判断できなかった。「ちなみに、親御さんは先日の事を？」

口数は少ないという以前に無く、空間は静まり返る。その虚無感がどうにも耐え切れなくなって衛士が口を開くと、早乙女は眉をしかめて顎に手をやった。

「……結局のトコロ、私は無事なワケですから、わざわざそれを報告して心配をさせるのも、されるのもかえって迷惑になりますし、その所為で自由を拘束されるのも困りますから」

「つまり？」

「ふう……何も言っていないですよ。わざわざ結論を口にしなければ理解^{わか}りませんか？」

やれやれと肩をすくめて首を振る。

空気の流れが変わったのを感じて、衛士は腕を組んで頷いた。

「ここからは本題、というか聞きたい事があるんですが」

「……？ なんですの？」

「何故ここが、分かったんですか？」

「はあ、そんな事ですか」

呆れたとばかりに嘆息する彼女は腕を伸ばしてティーカップを手にすると、そのまま口元へ運び喉を潤す。生温いそれはその程度の温度が彼女に好ましいらしく、そのまま飲み干し、テーブルへ戻す。そこでようやく、言葉は続いた。

「貴方が案内してくださった……貴方好みに端的に言えば、尾行させて頂いたのです」

大体予想は付いていたが、これほどまで簡単に言い切られてしまえば立つ瀬が無い。尾行発言をネタにして思い切り、傷口にナイフ

を差し込むように挟り突っ込んでやろうと画策していたのに、まるで当たり前のように断言されては突っ込むに突っ込めないのだ。下手をすれば、それが正しいと確信を持って行っていると反論されてしまうかもしれない。そこまで行くと、衛士にはもう手がつけられなかった。

しかしそれは飽くまで最悪の想像だ。衛士は自分にそう言い聞かせて、腕組みを解く。

「もう一度聞きますが……何が、目的なんですか？」

結局明確な返答は貰っていない。誤魔化されたのだ。彼女の感情に。だから改めて衛士は口にする。この状況で聞けば、もう彼女に逃げ場は無いだろうと信じて。そしてそれが事実だと言わんばかりに、彼女は顔をしかめて俯いた。

——沈黙は続き、時計の針が時間を刻む音だけが居間に響く。テーブルの上に置いたケータイのサブディスプレイが瞬いて、一瞬になったと知らせてくれた。

あれから一時間。彼女がこの家に上がり込んでそれほどの時間が経過した。少なくとも衛士には二時間近くにも感じられていたから経過は思ったより短かった。

ディスプレイから光が失せた頃、そろそろ張り詰めた空気に圧され尽くし筋肉が痙攣し始めた頃、漸く、早乙女美琉はそのトマトのように赤く染まりあがった顔を上げて、口を開いた。

「知らない、世界が欲しかったのです。親も知らない、私しか知らない友達……その付き合い、本当の、私しか知らない私を知ってくれる友達が……」

「そこで偶然であつたオレを、その友達にしたい……と？」
というかもうなっているのだろうか。

決して口にしていいものではないソレを心に留めて問うと、彼女はその顔の色だけをべらぼうに取り乱して頷いた。その動作には何の飾り気も無く、ただ一人の少女らしいものだった。恥ずかしいことを恥ずかしいと思って、だけれどそれを素直に告白する。それだ

けでも大きな勇気が必要で、それをもって口にした。そんな彼女は
ただのお嬢様然としていても、やはり少女には違いなかったのだ。
それだけでも、知れて良かったと衛士は胸を撫で下ろす。それだ
けで全てが解決した気になっている彼は続けて問うた。

「ちなみに高校生？」

「はい。あの、たまなし霊成学園に通う二年です」

「あー、知ってると思うけどオレもだ。何組？」

「……しー、です」

「あー……奇遇、だな」

衛士は私立霊成学園に通う二年生。クラスはC組に属し、その中
で親しい友人は山田を中心とする数人の男子。そして他のクラスで
は、山田に好意を寄せる中村という女子と、一年次に同じクラスだ
った者達である。

そんな彼は、一ヶ月も同じ時を共にする学友を忘れるような人間
ではない。姿と名前が一致するという偉業は半年もしなければ達成
することは不可能だが、それでも姿くらいは認知している。だから
戸惑ってしまった。彼女の、C組に属しているという意味の、その
台詞に。

——なるほど、と。衛士は心の中でうな垂れる。どうやら見覚え
があったのはいつの日かあったミシェルに似ているからではなく、
実際にこの一ヶ月間同じクラスで過ごしていたからだったのだ。

だがそれを覚えていないのは余りにも自分と相手に可哀想な気が
して、苦し紛れに言葉を吐き散らす。

「はは、あの、引越してきた……とか？」

「十六年間、ずっとこの土地に住んでいます。それに、貴方と出会
ったのは確かに偶然でしたけど、あの時に出会ったのが貴方でなけ
れば、私は尾行しここまでしようとは思いませんでした」

「え……？」

「いつも上の空で、それでいて人望があるかどうか分からない人で、
授業中はいつも寝ていて、体育だと活躍できるスポーツが偏ってい

て、人には優しくないし、だけど我が強いとは言い切れない人……不安定で不明瞭、簡単に言えば、貴方は私の目にそう映っていました」

中々にシビアな評価だった。そこに良い部分を入れないことに何か意図的な画策を感じるが、衛士はあながち否定しきれないと苦い顔で頷き、彼女を促す。

言葉は滑るように、というか口から滑り落ちた。

「これは使いやすい。私の下僕に^{わたくし}為り得るのではないか、と考えたのですわ」

「素直だね」

「取り柄ですから」

「……じゃあ、もう取り繕う必要ないから。自由に喋って構わないから」

全力でこの一時間を後悔するために、彼女に発言の自由を与える。そもそもこの国ではそれが許されているから彼が与えたのはモラルの欠如だけなのだが——彼女はその言葉を素直に受け取り、いつのまにかその顔の色を透明感溢れる白さに戻して、頬に手をやった。

「しかしもう何も申すことは無いのですが……。そしてソレはまあ、追々お見せ致します。今日はこの私を貫かせていただきますので」

衛士はポケットから砂時計を取り出し、テーブルの上に叩き付けるように配置する。砂時計はさらさらと砂を落とし始め、既に五分間の計測に取り掛かる。彼女がその行為に、砂時計に呆気をとられている中で、衛士は構わず口にする。

「なら、オレからの質問タイムだ」

「はい、なんでしょう」

彼女は膝の上で手を重ね合わせ、笑顔で首を傾げる。

衛士は腹を決めて言葉を紡いだ。

「下僕ってのは、早乙女とどんな関係になるって事なんだ？ 響きからして決して対等なお友達で済むようには思えないんだが」

「うふ、まず辞書を使う事をお勧めいたしますよ？」

「オレあアンタの思うとおりには動かせなきゃならんのか？」

「理想としてはそうですね。しかし貴方のような下々の人間が直ぐに順応することは無理であることくらいは分かっています。ですから、その前に貴方が望むものを一つ与えて差し上げますよ」

「ああ？」

「好きなモノで良いですよ？　その代わり、決して後悔しない使い方——」

それが当然とばかりに彼女は言い切っていた。金品をくれてやるから代償として下僕となれと、彼女は何の躊躇いも後ろめたさも感じずに口にする。衛士には、それが到底理解できたものではなかった。

少なくともこれは人間関係だ。彼女はまだ高校二年生で、確かに下僕という意味は分かっているだろうが確実にそれを実行させる覚悟は持っていない筈だ。だから、飽くまで友人という位置関係は不動であり彼女にその自覚があるうとなかろうと、衛士はそれを貫かせてもらおうと考えていた。

彼女が口にする下僕という言葉を冗談半分に捉えて、普通に友達としてやっていこうと思っていたのだ。少々アクが強そうだが、それは姉で慣れているから……と。

「何が良いですか？　やはりお金ですか？」

試してみるか、と衛士は立ち上がり、身を乗り出すとそのまま腕を伸ばし、彼女のほっそりとした顎に手を掛け、顔を固定する。上向きになる顔に顔を近づけさせると、やがて息が掛かるほどの距離になる。

目を剥いて硬直する彼女の顔にはもう、その上品さも気高さも、存在などしていなかった。

「何でも……だろ？」

出来る限り悪い笑みを浮かべ舌なめずりをする。

が、次の瞬間世界が暗転し——気がつくど頬に強烈な痛みを覚えて、衛士はテーブルの上にへたり込んでいた。

顔を上げると、腕を振りぬいた形で立ち上がる早乙女がそこに居て、彼女は先ほどのように顔を朱に染め上げたままで立ち尽くす。だがそう間も無く、口は開き、震える唇は言葉を紡ぎ始めた。

「貴方も所詮、他と変わりませんか。幼稚で粗野で汚らしくて、考
えが偏っていて、思いやりも無く自分中心。その汚物よりも汚らわ
しい性欲が抑えきれずに滲み出て……」

「ああそうだよ……。だがな、言っておくが――アンタはオレだっ
たから選んだんじゃない。あの時に出会ったから選んだんだ。アン
タは、運命の出会いに惑わされただけだったんだよ」

「何も知らずに口を利く！　何も知らずに……何も、知らない癖に
っ！　貴方はっ！」

「だったら教えてくれ、なんでオレなんだ？　いや、違うな……ア
ンタが自分の意思でオレを選んだのなら、なぜ金品^{もの}でオレを釣ろう
とする？　思いつきで笑うかもしれないがな、信じたんじゃない
のかよ、”もしかしたらオレなら”ってよオッ！」

理解されたいのに、誰も相手を理解しようとしな。ヒステリー
な叫びによって空間に、二人の間に決定的なまでの亀裂が入ったと
ころで、その選択肢を選んだ世界は其処で終えた。

――時は繰り返す。

不毛だと心の中で呟く衛士は頭を抱え、テーブルに肘を着いた。
あんな事をして彼女はまだ、衛士にしがみ付こうとしていた。
普通なら、嫌になったら直ぐにでも関係を絶とうとするだろう。

だが彼女は自分の思いをぶつけようとさえしていた。あそこまで
して、少し手を加えれば碎けてしまいそうな関係にまで落ちきった
のにそれでも手を引かぬ彼女を見て、衛士はあの時間を幾度反芻し
ても溜息しか出るものは無かった。

せめて、せめて最後の問いかけの答えが欲しかった。だが流石に
アレを二度三度やるほど衛士は無神経では無いし、二度も三度も、
彼女の今にも泣きそうな顔を、壊れてしまいそうな叫び声を聞きた
くは無かった。

「あの……良いですか？」

一人だけ何よりも深い失望と思惟に耽っている衛士に、軽く手を上げ発言許可を貰う彼女は、だが衛士が反応するよりも早く次なる言葉を口にする。

「私は考えているんです。貴方のような下々の人間が私のような人間に直ぐに順応できるはずが無い。そして貴方は何よりも私と近い位置に居なければならぬ。だから、少しでも速い理解を求めるために――」

そこでふと衛士は疑問に思う。彼女は一体どの立場から物を申しているのだろうか、と。

――少なくとも人を下賤民だとか愚民だとか言っている時点で上流階級でなければ納得が出来ない。その上で今の台詞から家庭は少なくとも底無しに裕福で無ければならないはずだ。人を尾行し押しかけると行為を差っ引いても問題が無いと思われるほどの人間でなければならぬ。

早乙女美琉……聞いた事の無い名前であるが、この街に生まれてからずっと住んでいるらしいから外人で無いことは確かだ。ハーフである可能性は捨てきれないが、それは然程大きな問題ではない。

「どうです？ 貴方にとっては良い話でしょう？」

いや、そもそも大金持ち様だとして、なぜそんなご令嬢が何の変哲も無い私立高校に通っているらしいのだろうか。タダでさえ常人離れした美貌の所為で人からの注目もあるだろう。それに少し電車で揺られれば良家の娘さんが通う伝統のある小中高大一貫の女子校があるわけだし、いまの学園に合格できるくらいだから編入もそう難しい話ではなかったはずだ。

だがしかし、気になっているのは何故ここに居るのかではない。何者なのか、なのだ。

カマでも掛けてみようかと、衛士は少しばかり躊躇い、口を開いた。

「――あー、いやいいって！ 馬鹿には金と権力だけは与えちゃダ

メって良く言うでしょ？」

しかし言葉は紡がれず、背後から大声量で遮る声は、これまでこれから永劫に聞き間違えるはずも無いであろう、理恵のものだった。直後にバスケットボールを片手で掴んで持ち上げるNBA選手のような力強さで頭部を押さえつける理恵によって、頭は乱暴に前後左右の概念無くぐりんぐりと振り回され、人的にコレはいくら何でも首は曲がらないのではないかと思われるほど自由奔放にジョイスティックの如く弄くりまわされた。

結果として、後遺症でもあるのではないかと思われるほどの痛みを頸椎に覚え、抵抗の甲斐も無く理恵の乱入を許してしまった。

「いやー、早乙女さんてアレだよねえ。とある国の名だたる貴族の姪にあたるって聞いたけど……」

無遠慮に、彼女は恐らく盗み聞きから得た情報を駆使してインターネットを利用し調べたソレを口にする。流石に無神経極まりなく制止を目的として露出された太腿を力強く叩くと、仕返しとばかりに振り落とされた踵が足の甲を打ち砕いた。

それは酷く、鈍い音であったのだ。脆い何かが突き破られた崩壊音が体の中に走って、どうしようも無い痛みは理性を、とてもではないが維持できるような程度ではなかった。故に衛士は足を抱え、沈黙した。

早乙女にとってその場では唯一の救済者でなり得た衛士の喪失は非常に手痛いものであったらしく、悪意ないし下心に塗れた問いに對しては、眉をしかめて俯くことしか出来ずに居た。

——彼女にとって、その立場と言うものは非常に圧力的である。

貴族の娘だから美しく、財産を持て余し、聡明である。全てはその肩書きによって構成され、彼女はそれを受け止める器にしか成り得ない。背後に付くモノでしか価値を計られず、故に個性は早乙女美琉としてのものではなく、貴族の姪としての意味しか持たなかった。凡人はそれでも満足だろう。否、同じ立場にあるものでもそれで充足する日々を送る者は居るはずだ。

だが早乙女は耐え切れなかった。

それはなぜか？ それは直ぐ其処に、目の前に、手を伸ばせば触れられる位置に、彼女にとっての非日常が広がっているからだ。

人は未知に介入したがる。それは人類を知的生命体たる存在に押し上げた故の本能だ。衛士にとっての日常は早乙女にとっての非現実であり、また逆も然り。

誰もが想像する、もしかしたら超能力が使えたら、空から美少女が落ちてきたら、教室に何が目的かも知らないテロリストが乱入してきたら、世界の英雄になれば、ファンタジー世界に召喚されたら……多くの理想、想像、妄想があるものの、彼女にとってのそれは、世界の殆どの人間が寝、起き、働き、学び、遊び、食べ、笑い、泣き、喜び、怒る、そんな平凡な日常であったのだ。

捨てがたくも忘れやすい変わらぬかけがえの無い平和。彼女にとってのソレはかけ離れたものであり、故にその日常である非日常を渴望した。

そして彼女の全てを振り切る行動力が起こした結果が、この現状だった。

そもそも何故こんな積極的に動けたのか——彼女は思い返してみるのが、分らない。先日見た『ローマの休日』の内容と一緒に動機はどこかへ流れてしまっていた。

——しかし彼女がその身に纏う日常を捨てきれぬのもまた事実。

理恵の台詞と共に蘇る、金品贈与を中心とする前後の会話を思い出し、苦悩した。

答えるべきか、答えぬべきか。どちらにせよ理恵は確信している。ならこの選択には最早意味はなく、どういった返しを行うかが最重点。早乙女は脳細胞の一つ一つを制御して思考に没するが、無理恵はただ好奇心のままに尋ねただけであり、ただのひと言がそれほどまでに彼女を苦しませているなどと言う自覚はありすらしなかった。

早乙女は理恵の問いを反芻し、曲解するまでに考えを至らしめる

とやがて答えを見つけ、微笑んだ。そして再び、頭の中で曲がりくねらせ歪めた問いを蘇らせる。

——お前は凡人か？

答えは無論否であり、地に落ちた下賤民に天の民がその答えをくれてやることすら無粋。

されど早乙女は口を開いた。目標の血縁関係があるならば話は違うからだ。

「想像に、お任せしますわ」

——何かが垣間見えた気がした。

痛みに苦しむ中で窺う状況。一筋の光のようなものが、その中に差し込んだ気がした。衛士はそれを直感的に感じていた。

「あはっ、誠実ねえ」

「……何が、でしょうか？」

「いやいや、わざわざ口にするのは野暮でしょう？」

「……良くわかりませんが」

二人の間には明かに食い違いが存在していた。しかし構わず理恵は首を突っ込もうとするものだから、衛士は流石にと制止する。何か、同情に似た感情が膨れ上がったのが原因だろう。

「姉さん、困ってんだろ」

「……わかったわよー」

本気だぞと言わんばかりに彼女の横顔を睨むと、理恵は膨れっ面になって席を立った。

結局何をしに来たのか目的が不明瞭のまま居間を後にする彼女に頭を抱えつつも、衛士は、困ったように眉を下げる早乙女に愛想笑いだけを返した。しかし彼女は何かを考えているのか、衛士の最大にして最高の気遣いにも気付かずは無表情を極め、ただ一点だけを見つめていた。

それからややあって、彼女はふと思いついたように立ち上がる。驚いて衛士は彼女を見ると、我に返ったように衛士へと向き直り、携帯電話を手を取った。

「今日はここで失礼させていただきます。また明日、ご迷惑でなければお会いしたいのですが……」

「え？ あ、ああ、ごめん。明日はバイトが一日入ってて……」

「ご迷惑ではありませんか？」

「は？」

「その、バイト先へ行っても……」

「目的にもよるけど」

迷惑といえば迷惑になるだろう。明日は土曜日で人も多いし、恐らく彼女が来ても相手にしている暇は無い。そして彼女だからこそ人から目立つだろうし、色々と支障が出るに違いないのだ。

「……ならまた後日に」

「ああ、ごめんね」

顔の前で両手を合わせて、暫し思考する。

彼女はそれからそう口にした後、間もなく衛士宅を後にした。

彼は果てしない嫌な予感と言うものをひしひしと感じながらも、それに抗えないであろう事を理解し——だがあながちそれが悲しいことでも無く不幸で無いことを覚えていた。理屈無く、いつもどおりの直感だが、彼はそれを底無しに信賴している。それはその第一感に幾度とも無く、助けられたからだった。

やがてそう時間を置かずに母が帰宅した。それによって思い出したかのように胃腸は空腹を訴えるように鳴き出して——。

「うはは、この可愛いヤツめ！」

嫌がる頭を押さえつけるようにして胸に抱く。もごもごと暴れて彼女を叩くが、その細く長い艶やかな指に撫で回されるとその内、不思議と気分が抗う気力がごっそり失われた。やがて胸に顔を擦り付けるようにすると、理恵はくすぐったそうに笑っては優しく頭を撫でる。

酷く心地が良いのであろう猫は喉を鳴らして、他の猫たちもその

場に座り込む理恵の傍で寝転んだり、身体を突付いたりなど、彼女はやたらに人気者だった。

——満腹時に襲い掛かってくる睡魔に、これが淫魔だったらなあ
と思いを馳せながら身体を思いのままにさせるその最中に頬を二度叩かれ、目が覚めた。

その直後に手を引かれて駅前に来ると、最近出来たという猫カフェに訪れたのである。

大分前から買い物に付き合えと言われて居たのでどれほどの荷物を持つ羽目になるのか不安を抱えていたのだが、買い物以前にお茶をしながら猫と戯れる場所に来たのだから、衛士は俄かに安心した。
ここで一、二時間消費すればその分だけ買い物時間も、資金も少なくなる。そうすれば相対的に量も減り、負担は少なくなるのだ。
「チツチツチ」

舌を鳴らして指を振り、近くの白と黒のツートンカラーで決める猫の注意を引くが、一度こちらをチラリと窺ったきりで、そっぽを向いてどこかへと去ってしまった。

「エージはなんかもう、喰ってやろうって感じが丸出しなんだよね」
「猫なんか食うかつ！」

なにやら猫にすら構われず拗ね始める衛士は、メロンソーダの注がれるコップを手にとって喉を潤し、更に氷を噛み砕いて一休憩を入れてから、めげずに猫を誘う。

しかし猫畜生は依然として衛士の半径一メートル以内に近づくことは無く、理恵が目の前にまで連れてきた猫にさえ逃げられる始末だった。

——心が傷ついて一時間後。

時刻は一四時に差し掛かっていた。これから遊ぼうと買い物に行こうとしてもゆうに時間が有り余る昼下がりである。猫カフェを背にして、理恵は満ち足りたような、だがまだ次を楽しみにするよう

に、
「どこへ行こうかなあ」

などと呟いて実は無計画であることを露呈しながら、衛士を傍らにして歩みを進めた。

大体予想が付いていたことだから彼は特に文句を垂れることも無く、背を叩かれればソレを甘んじ、腕に抱き付かれればそれを拒まずに歩き、やがて前にするのはまた駅近辺の百貨店^{デパート}だった。

向かうは第三階層に埋め込まれるブティック。そもその目的はここなんだよねえと嘯く理恵に二度見をかましつつ、衛士は彼女に着いていった。結局拘束されることは変わりなく、暇でありながらも彼女に付かなければ怒られるからだ。そんな理不尽な怒りを被るのは勘弁してもらいたいと心底願う衛士は、最低限それを回避するために理恵の機嫌をとっていた。

だがそれ故に調子付く理恵は彼にカゴを持たせ傍若無人の限りを尽くすように、服やその装飾品である小物などをそこに突っ込み、抵抗せず口を挟まぬ衛士はそれ故に荷物を持たされ続ける。残るのは右腕に覚える筋肉疲労と、空白の時間がもたらす思考力の脆弱化であった。

特に女性客が多いブティックである。次に目立つのはカップルの姿だ。男性客単独で見るとは決してなく、あ、と思って男を二度見してみたりするがそれが店員であったことはさらにあった。

「どっちがいい？」

衛士に向き直る彼女の手には、二着の洋服が吊るされていた。片方は襟と裾に紺色の二本の線が入り、胸元のリボンが特徴的な長袖の白いワンピースで、もう片方は肩が丸出しになる、黒色のワンピース。対称的な印象になるそれらをそれぞれ身体にあわせて見せて、彼女は衛士に尋ねていた。

彼は頭の中でそれぞれを、着せ替え人形のように理恵に着せてみてから簡単な思惟をする。また下手な事を言うとは素直な答えだとしても文句を言われることは必至であるからと、額に冷や汗を浮かばせた。

「白いほうは姉さんにしては子供っぽい気がするし、黒いのは派手

じゃない？ まあ、どっちも似合うだろうケドさ」

無難な答えだと衛士は思った。実際にその二つは、ずばりこちらのほうが良く似合っているやると褒めちぎるほどのモノではないのだ。だからといって無下に流すことは出来ず、故の発言である。「んー、そうかー」

服を吊るし直し、口元を手で隠すようにして身を引いてから服の羅列を全体から眺める。その行動の後暫し硬直して、手が右から左、左からやや右へなど何を手に取りうるか迷い、列を移動した別の場所にきてはそれらを繰り返してようやく、一着を手にとった。

灰色が地の色になっていて、両肩の位置から大きな縦に長いひし形が連なって裾まで延びる柄を持つカーディガンであるそれを身体にあわせ、再び彼女は衛士に尋ねる。

下に着ているのがそもそもタンクトップにサイズの大きいシャツの重ね着であるから、カーディガンによってなにやらアンニュイな姿になってしまっているが、他のものを合わせてできれば中々に似合うのではないかと彼は考えた。

その旨を伝えると、彼女は、それじゃあ！ と笑顔でそれをカゴに突っ込み、彼の手を引きレジへと促した。どうやら返答は見事なものだったらしく、彼女の機嫌は最高潮に達しているらしい。衛士は携帯電話で時刻を確認してから、ほっと息を付いた。

アナログ腕時計は短針を三に、長針を六に伸ばす。体感時間と常識と店の開店時間を考え白昼夢の可能性を除けば現在の時刻は一五時三〇分なのであり、つまり恐らくこの買い物が終われば帰宅できる可能性がグンと高まる。少なくとも低下する可能性は確実に無い。それは寝起きに欠伸が出るくらいの確実さを持っていた。

仲睦まじい恋愛関係の男女であるならばもう少し百貨店を無目的でうろうろぶらぶらとまるで肥満体型のダイエッターの如くウィンドウショッピングへとしゃれ込むのであろう。そしてそれから少しばかり洒落た、ないし雰囲気のあるレストランで食事を済ませればデートは半ば成功と言えるだろう。

しかし衛士と理恵は喜ばしいか、悲しいか。無論そんな関係ではなく、互いに好きあっていると仮定してもそこに恋愛の意味を持つ愛は存在しない。

会計している理恵の後ろから端数である二八円を差し出して、お釣りを貰い、商品を受け取ってブティックを後にする。

そこから少し歩いたところでベンチが背中合わせで五つ並んでいるのを発見し、彼らは何の合図も意思疎通も無しに座ろうという共通意思を持って、ひと言も交わさない内に互いに並んでそこへと腰を落とした。

「あつはー、金欠！ それでいて喉が渴いたわねえ」

軽くなったサイフを肩に掛けるバッグにしまいながら彼女は口にする。衛士は座ったばかりの所で言われたものだから少しばかり疲労感を覚えるが、いつもの事だからこの程度で一々ストレスを抱えていられないと立ち上がり、尻のポケットから財布を取り出した。ポジティブでお気楽、頭空っぽにして言いなりにならなければならない。

衛士は少なくとも、短命はお望みではないからである。

「何がいい？」

「炭酸！ オレンジの」

それが当たり前のように彼女は答える。慣れたものだし、そもそも衛士自身がそれを当たり前だと認識しているから、そのまま返答を受け止め反芻して忘れないように記憶する。

「無かったら？」

「コーク！」

注文を受けて、そこから少し離れたエスカレーターまで歩みを進める。人通りはやはり土曜日であるから多く、華麗なステップで人を避けなければ誰かに肩をぶつけてしまいそうな勢いを孕んでいた。子連れにカップル、友人と、なんて姿が殆どであり、大変賑やかだ。

衛士はそんなお客達に辟易しながらも隙を縫っては進み、やがて

自動販売機の前に到着した。

サイフから五〇〇円硬化を取り出し、投入。途端に商品のサンプルの下にある選択ボタンが光りだし、衛士はオレンジの炭酸飲料を探し出した。次に続けてビタミン系の清涼飲料水を購入し、それらを小脇に抱えておつりを財布に仕舞い込み、来た道に戻る。

そのまま歩いていけると、そもそもベンチの周囲状況を良く覚えていなかったためか、このまま進んでいて良いものかと不安になった。人波に馴染みすぎて危うく見過ごしそうになるベンチであるそこは、だが確かに先ほど腰掛けていた場所らしい。慌てて歩みを緩めて進路を変更し、ベンチへ近づいた。

彼がその場所を通り過ぎかけたのには、他にも似た場所が多いことと、もう一つ重大な理由がある。

常識的に考えて待っているべきである其処に、理恵の姿が無かったからである。

もしかしたら本当に通り過ぎて一つ向こう側のベンチに来てしまったのかもしれない。もしかしたら手前のベンチで止まってしまったのかもしれない。衛士は出来る限りそうであって欲しい可能性を頭の中に走らせるも、すぐ近くに先ほど寄ったばかりのブティックを見つけて嘆息した。

「自分勝手な人だ！」

放浪癖があるわけじゃない。ただ少々、気紛れなだけなのだ。

衛士は肩を落としてからベンチに腰掛ける。もしかしたらトイレに行っているだけかもしれないからであり、少なくとも数分はここで待機しているという選択のほうが確かなはずであるからだ。

――五分が経過する。

理恵はまだ現れない。衛士は大きいほうなのだと理解した。

――それからさらに十分が過ぎていった。

理恵の姿はちらりとも見えない。腹痛が悪化しているのだろうと衛士は心配した。

――さらに十五分が経ち……。

彼の頭の中で二つの選択肢が新たに現れた。

探しに行くか？　ここで待つかの二つである。

「いいや、限界だッ！」

かくして彼は、理恵失踪から三〇分が過ぎたところで行動を開始したのである。

――まず向かうのは彼女が行きそうであり、そこからそう離れた位置にはない本屋である。読書家でも文学少女でもない彼女がこの場所を好む理由は、漫画が好きだからである。小説的な活字は苦手でも噴出しの長文は難なく読める。そんな彼女であった。

だから小難しい、蔓^{つる}だか蔦^{つた}だか分からない漢字を起用し店名にする本屋へ足を踏み入れ、まずは少年コミックスコーナーへ向かう。大股で距離を縮めて、やがてその本棚がある通路を覗いてみるものの、やはりそう簡単に都合よく見つかるはずも無く。

青年コミックスコーナーも同様で、ならば両手で遮るような中に“一八”と書かれたマークが特徴的に描かれる黒地カーテンの中へと入ってみようかと思ったが、そこに居たら居たで恐らく気まずいだろうと考え、雑誌類が陳列されている方向へと向かう。

服やアクセサリー、髪型などに関する種類のものではなく、週刊、月刊漫画雑誌の新刊が並ぶ場所。

果たして彼女は、そこに居た。

分厚い、彼女の手には主にであろう厚さの雑誌を両手で支え、その指先に買い物袋をつる提げる。顔は俯き本に集中しているらしいが、

「ねえ無視しないでよー」

「漫画より面白いことしない？」

なんて事を周りで囁く男が二人、随伴するようにしていたのが気がかりだった。

一人は頭が金と茶とが混じったような色の頭をし、不気味な画が印刷されるバンドTシャツのようなモノを着て、穴だらけのジーンズを穿く。今時の若者と言うような雰囲気醸し出す二人は、そん

な似たような格好をしていた。

——理恵は漫画に集中するも、ページは一向にめくられない。

いくら難解な特殊能力が出現したとしても、それを理解するためにはそのページだけを凝視するのではなく一つ前に戻ったりする筈である。

「ったく」

衛士はやがて彼女の心情を察すると大きな溜息だけをその場に残して、大股で胸を反らせ、彼に出来うる最大限の険しい表情を顔に携え男たちに肉薄——する前に、慎重派である彼は柵に砂時計を置き去りにした。

それから歩みを進めると、やがて男たちは彼に気付いたのかちらりと視線を流し、その足が確かにこちらへ向かっているのだと理解すると、顔を見合わせ様子を窺うようにしてから道を開けた。どうやら悪意は無いらしく、衛士は彼らのそんな行動を意外だと思いつつも、やがて彼女の斜め後ろに立ち止まってから、肩に手を乗せる。

「姉さ——」

男たちは喉を鳴らしてそれを見守った。

衛士は見事な自分の活躍に誇らしいという喜びを抱いていた。

理恵はその瞬間に何倍にも膨れ上がった恐怖によって肉体の制御が効かず、半ば無意識に、振り向き様に肘を振りぬき——。

鼻筋に鋭い衝撃が突き抜ける。激痛は脳に届かんとして、視界は明暗を逆にする。

「んがあっ！」

情けない叫びを響かせ、やがて衛士の足元はおろそかになって、なぜだか自分の足に足を引っ掛け後ろにすっ転ぶ。受身も取れぬ身体はそのまま背後の柵に首筋を叩き付けるような形になって——衛士の意識と視界は、朦朧としてきていた。

「あー、俺たちが悪いのかな」

「ごめんな少年。多分その大打撃は俺たちのせいだ」

通路を塞ぐように倒れる衛士に、屈みこんで言葉を掛ける男たち。やはり彼らは何か本質的には良い人間なのだと衛士は理解した。やがて理恵の声が聞こえるが、それはもう彼には届かない。

意識はそつと、その場を後にした。

——かくして時間は、砂時計を棚に置く手前にまで遡り……。

「——ヒドイ目にあつた……」

結局男たちと和解して理恵に声を掛けた衛士は、再び肩に手を置いた。その瞬間に懲りず飛来した肘鉄は迷わず鼻筋を打ち抜き、その五分前と全く同じ状況を作り出してしまったのだ。唯一違うといえば、衛士が倒れず踏みとどまり意識を必死に抱きかかえ逃がさぬようにしていたところだろう。

「だーかーらー、ごめんーって！」

彼らはフリーの美人をナンパする事によって自身の魅力を競っていたようだ。だから衛士の、弟の存在を認識し、その上彼女の余りにもな生娘ぶりを確認してようやく手を引くことを決めたらしかった。

そんな暇の潰し方にはやや同意できないものの、素直で悪意はあるようでない言動に衛士は既に心の中で彼らを許していた。

鼻にこよりにするティッシュを突っ込んで溢れる血液をせき止める。息苦しくなり、口の中に鉄の味を覚えるが、もう暫くすれば血が止まるだろうから今は我慢するしかないのだ。

「いやー、でも私も公式で美人に認められてるってワケだよな。もうエージがどうこう言ってもこの事実は覆らないわけだけど？」

彼女が席を離れた動機はちょっとした悪戯心。衛士が自身の姿を視界内から喪失させた後、一体どういう行動に出してくれるのか見てみたかったというものである。

最初は呆然とベンチを眺め、座り込んで魂が抜けたように制止していた姿を間抜けだと押し殺すようにえらく笑っていたそうだが、五分経過しても動く気配が無いのを見て飽きてしまったらしい。そして衛士が自身を見つけてくれるまでの暇つぶしに読書へと洒落込

んでいる最中に声を掛けられ、動けなくなっていたという事だった。
「外觀が”ミス”と呼ばれるくらいでも、中身が俗だと見透かされるって何かで言ってたよ」

「誉めてるつもり？」

「……好きな風に捉えればいいよ」

溜息をついて鼻からティッシュを引き抜くと、既に血が乾いていたのか鼻腔内に張り付き少しばかりの痛みが走る。衛士はもう一枚取り出し勢い良く鼻をかんだところで、大きく伸びでもするように立ち上がった。

痛みなどはとうの昔に引いている。動くのに問題は無いが、激しい運動は抑えておいた方が良くと身体だるの怠さから理解し、ゆっくりと胸の奥底から息を吐く。傍らに立ち並ぶ理恵は何が嬉しいのか彼の横顔を眺め口元を緩ませ、上気でもさせたような薄桃色を頬に広げていた。

「夕飯は何が食べたい？」

「何って……希望を述べても母さん次第だろ？」

「今日はめでたいから外で食べて来なさいってお金貰ってきた」

「めでたい？」

外食出来るのは確かにめでたいことだ。だが”めでたい”とはその”めでたい”ではなく、他に何か”めでたい”と思わせる要因があるから”めでたい”のであり、しかし今の衛士にはその要因に思いついたものが無く、だから頭の中は軽い混乱症状に陥っていた。

しかし貰った金を律儀に取っておくなんてのは、理恵にしては珍しいことである。いつもの彼女ならば使った後に、取って置かなければならなかったことを思い出すのだ。買い物を頼んだときも、いつも自分のものに金を使って帰ってくる彼女だから、それが衛士が混乱するその背を押したきっかけにもなっていた。

「何がめでたい？」

答えない彼女は、気がつくと奇妙に複雑な表情を作っていた。

衛士はこの状況について更にワケが分からなくなって、頭を抱え

た。

困ったり混乱したり気まづくなったり——つまりそれは、自分に対して不利になったり疑問を解消できなくなったりする際に抑えられずにする癖のような行動であり、自身の持つ情報のみでは処理しきれなくなった事を親しい仲の人間に知らせるものでありもした。

理恵はそんな彼を見て、全く困った弟クンだなあと、年上であり姉である事実を見せ付けるようにして背中を叩き、

「エージが家に女の子を連れてきたからだよ」

「勝手に来たんだよ」

——同級生であるものの感覚的には初対面の少女が、である。そして彼女の背景やら心情やらを考えると拒みきれない自分も自分で悪いのだが、周囲……というか両親はそれに過敏になりすぎている。確かに今まで女ッ気というものがさっぱり綺麗に無かったからかもしれないが、本人よりも浮かれているというのはそれで問題な気がする。

そもそもオレはただ流されただけののような気がする。ただ外見が似ているだけで彼女がミシェルに関係があると勘違いしてそのまま話を進め、そして引き返せなくなったところでそれが違うことに気がついた。泥沼だ、と思い返してうな垂れ肩を落としたくなった。

衛士が言い返すも、理恵は既に言葉を耳に入れておらず、自身の腹具合だけを心配していた。

「でもまだ四時過ぎなんだよねー」

「あー、二階にゲーセンがあつたし、其処に寄ってから適当な時間になったらご飯食べに行けば良いんじゃないかな」

「そういえば四階がご飯食べる所だったよね。外に出るところで食べる？」

「ノー。日差しがきつい」

「っさいわねー。私が食べるって言ったのよ。夕方で夕日が鋭く冷たい風が吹く外で一緒に食べるの！」

——都合がいいとは自分でも思うが、彼女の、先ほどの申し訳な

いという心が既に失せていることに気付いてオレは少し残念だった。姉さんに謝罪されるなんてのは一年に一度あるかないかの事である。知っている人間の中で特に謝るといいうのが嫌いな人だから、そんな思いがより強くなるのだろう。

何によって腹が立ったのか分からない彼女は声を抑えて怒鳴りつけると、そのまま衛士の手を引いて下りのエスカレーターへと誘った。文句を言いつつも何だかんだで衛士の提案を受け入れているように見えるのだが、ただ単に彼女の興味がそちらへ向いたただけだから彼は素直に喜べない。

——結局それから三時間以上を夢中になってゲームセンターで過ごし、店員が寄越した紙袋に大量のヌイグルミやらストラップを詰め込んで、百貨店内に埋め込まれるファミレスへと二人は足に向けたのだった。

三目

アルバイト。それは主に一定期間の定めのある契約に基づいて雇用される従業員の事を指すものであり、短期間であったり低賃金であったりする場合が多い。若者や学生が多いと言う見方が殆どだったが、最近では高齢者も少なくは無く、また社員程の仕事量をこなす事を命ぜられたりなど、アルバイトと言う立場を体よく利用されたりする場合も、決して多いとは言いがたいが、少なくともない。

衛士は一年近く同じホームセンターにアルバイトとして在席しているが、時給は八五〇円から上がって九〇〇円であり、人間関係も良好という高待遇にあった。

「エーちゃんは今日フルなの？」

社員が朝礼を執り行う中で問うのは、傍らに居る『内田』であった。短く刈り込まれた髪は彼に清潔感を見せ、顎に生える無精髭は大人っぽさを演出する。半袖の白いポロシャツに地味目のジーンズはこの店の征服のようなものであり、その上からは濃い緑色の店名が入るエプロンを装備する。

「まあ、いつも通りの日曜日ですよ」

大学三年、二一歳。教師になる為に毎日勉学に励む立派な男だと、衛士は失礼ながらと評価していた。

「マジかあ。俺はもう八時までで限界だよ」

「いや、でも結構九時過ぎると客とか殆ど来ませんよ？　その代わりこっちも人が居ないからすげえ暇ですけど」

開店時間は午前九時で、閉店時間は午後〇時。衛士は高校生という立場なので仕事は強制的に午後一〇時に切り上げられ返される。シフトによって時間は不確かだが、大体は午後五時、七時にそれぞれ三〇分の休憩が入り、午後一時から一時間の昼休憩。その計算をすれば、衛士が働く時間は十一時間なのだが、彼の体感するのは一日以上であった。

何故彼がそこまで働くのか、衛士にはもう分からない。気がついてたら仕事に慣れていて、別段それが苦でもないしお金が入るし暇な時間も潰れるしで、辞める理由も労働時間を減らす原因も、今のところは無いだけなのだ。

貯金は既におよそ高校生が持つに相応しくない金額まで上っているのは、発作的に起こる物欲の暴走の定期に感覚がありすぎるからであろう。また、趣味でなかったりつまらなかったりする漫画、ゲームなどは直ぐ売り払ってしまう彼の、少しばかり綺麗好きな性格にも原因がありそうだった。

「トキ君、悪いけど今日資材に行ってくれない？ 村田さんが風邪で休んじゃったから」

——朝礼が終わり、衛士は店に入って直ぐの所に八つ並んで存在する、一般に”中央”と呼ばれるレジへと移動を開始したところでふくよかな肢体を持つ中年女性が声を掛けた。パートのおばさんであり、長い事この職場に居るお陰で皆から慕われる人である。

「あ、はい。わかりました」

「今日はその担当の社員さんも病欠だから頑張ってね」

「うわ、マジですか？」

「困ったら内線の二〇番にかければいいから」

彼女の後に付きながら話を聞いて、やがてサービスカウンターまでやってくると、振り向き、手に黒い円形のスポンジと雑巾とを手渡された。

——店内は様々なジャンルの商品が陳列していて、その種類ごとにしっかりと分別されている。天井から吊るされる色つきの看板によってどこに何があるか説明され、基本的には迷うことはない。

また専門的な、例えば鉄板や多種類の釘、金槌や丸鋸などの工具はその数が多い為に”ツールコーナー”という場所が店内の一角に設けられレジが一つ据え置かれる。木材や板、トタンやU字工、レングやブロックなどを置く”資材館”や、日当たり等が理由で外に展開される、植木や季節に応じた植物、土などを置く”資材館”、

自転車関係を置く”サイクルコーナー”等が個別に分けられている。その中でも資材館は特に暇であるものの、お客による専門的知識を要する質問が多く、しばしば衛士は困らされていた。しかし日中は品出しに来ているシルバーさんが居るので、大変だというものでもなかった。

「内田君は品出しね。詳しくはバックの社員さんに聞いて」
「うっへえ、わかりましたー」

肩を下げて腕を垂らし、内田は背を向けてそそくさとバックヤードへ向かう。衛士も急ぎ足で屋外売場と壁に貼り付けてある下の自動ドアを通り抜け、資材館へと出て行った。

外へと抜けると、トタンで店と外とを隔てる高い壁が見えた。見上げると高い位置に天井があり、そこに吊るされる蛍光灯は停電と閉店にならないかぎり煌々と光を放ち続ける。

左手側には背の高い棚が並び、右手側にはセメントの袋や肥料などがパレットに乗ってドア側の壁からやや離れて陳列される。そしてその壁には棚が接着し、排水関連の品物、例えば塩化ビニル管などが並んでいる。

それらを眺めながら英詩はパレットの脇を通り、やがて正面の、許可内侵入を拒むケージが閉まっているのが目の前に迫る。まずはこの鍵を開け、解放するのが最初の仕事なのだが……。

「ん？」

ケージの正面の一部がいやに暗い。まるでそこに何かが置かれているような感じであって、どうせ誰かがパレットを其処に放置したのだろうと簡単に考えてみたのだが、同時に覚える奇妙な視線のよう……注目を受けて肌に覚える緊張に、理由が付かなかった。

考えすぎだろうと言えば済む話は嫌いである。だから衛士は、じっと網目の細かいケージを睨んでいると――目が合った。誰かの視線と交差したのだ。

「っ!？」

青藍色の目がジッと揺らがず反らさず衛士の瞳を捉えていた。

陰は揺らぐ、息を潜めているのか呼吸音がしない。ただひたすらに、存在感だけが膨張していくだけだった。

心臓が跳ね上がる。足に根が生えたように動けない。まるで金縛りにあっているようだった。

恐怖が湧き上がり、直ぐにでも逃げ出したかった。しかし実際は、悲鳴すら上げることすらままならない。衛士はその瞳の呪縛に飲み込まれていた。

「——ん」

囁くような声が聞こえる。

「ん……さん」

声は次第に大きくなり始め、

「ト……さん……トキ、さん」

聞き覚えのある声は、見覚えのある瞳は、彼の全身と精神を絶大な圧迫感で押し潰し捻じ切りながら何度も何度も彼の名前を口にしながら続ける。

「トキ・エイジさん」

はつきりと頭の中に響く声。衛士は恐怖し、気がつくとその場に腰を抜かしてへたり込んでいた。

「私です、ミルです、早乙女美琉」

言葉が響く。透き通るような澄んだ声音だった。上品な発音は、とても同じ日本語だとは思えないような美しさがあった。声に艶やかさがあって、到底同年代の少女とは思信じ難かった。

しかし頭は正常に作動せず、与えられる全ての情報を頭の中に取り込むもともに処理しきれずに、早乙女が誰であるかを理解できているものの何故この場所に居るのかという疑問が湧かず、何かを不思議に思わなければいけないという事ばかりが空転した。

「な、なんでここに!？」

彼がまともに口を利いたのは、それから十数秒後のことだった。

「来ちゃいました。分かりませんでした?」

分かったからこそ怖かった。それが知り合いであるならば尚更の

ことである。

衛士はその気になれば震度二弱は起こせるのではないかと言うほど全身を小刻みに震わせて、未だに尻をコンクリートの地面に押し付けたままだった。頭は冷静になればなるほど状況が奇妙だと納得し始めて、ただ早朝から衛士のアルバイト先に押しかけただけである早乙女に対して、異常性があるというレッテルを瞬間接着剤で貼り付けた。

彼女の昨日の行動を考えれば、あとをつけたからこそこの場所が判明し、衛士の背を追った故にこの時間帯であることは容易に想像が付く。だが唐突過ぎるその行動は、ケージ越しの悪戯っぽいその笑みは、崖の淵に立つ衛士の肩を無表情で突き飛ばすような、鋭利な刃物に似た恐怖を突きつけていた。

「私はお客さんですよ？　ここ開けてくださいよー。ねえ！」

両手でケージを掴み揺らす。金属の擦れる些細な音が徐々に大きくなって、やがてガチャガチャと鍵の掛かったドアを無理矢理に引っ張るような騒がしさになる。衛士は慌てて、互いを引っ掛けるだけの鍵を開けて、それらを左右に押し広げた。

——綺麗に巻いていた金髪は、いまや毛先にウェーブを作るだけのような髪形になっている。ロールを作らぬ髪は解放され、伸ばしたままである故にそれらは腰までの長さまでになっているのは素直に綺麗だなと衛士は受け取れたのだが、据わっている瞳が、恐怖を蘇らせた。

一度ネガティブな思考に陥ると、見るもの全てがネガティブに受け取れてしまう。今の衛士は半ばそんな状態であった。

「もう無理ですからね、私」

不意に彼女は口にする。笑顔のまま、小動物的に首を傾げたまま、衛士の反応を待たずに矢継ぎ早に唇は言葉を紡ぎ続ける。

「家、出てきましたから。あの家庭では自由だけが手に入らないから」

「は？　ちょ、待って、意味が分からない。そりゃ君は家を出なき

やここには来れないだろうさ。ここは君ん家じゃないからね」

「いつかは和解するでしょうね。私ですから。大人ですから。でも今はまだ子どもです。常識的に我がままに生きて良いんです。でしよう？」

「違うな。そりゃ可笑しいぜ、現実を見なきゃ。オレの所に来るって事が、間違ってる。出会って二日目、そうだろ？ 出会った日を入れなきゃな」

「私と貴方は友達でしょう？」

「下僕、じゃなかったか」

混乱する衛士と、既に取り乱しているのかそれが素なのか分からない美琉との会話は半ば支離滅裂で滅茶苦茶だった。成立しているのかすら分からないその応酬は、それでも回数を重ねることに落ちて着き始めている。

やがて、確かなゼロだった知性は、湧き上がるように現れ始めていた。

——衛士は彼女の顔を見て、言葉を聞いて、大きく一つ深呼吸をして。ようやくそこで心が落ち着いていた。頭は冷え切って、彼女の目のクマと乱れた髪に気がついた。

早乙女が狂っているのではない。情緒不安定なだけなのだ。そして彼女の心を乱すような何かが、ここに来る以前にあった。

いつかは和解しようとする大人の面を持っているが、今はまだ我がままが言える子どものままで居させて欲しい。彼女はそう言ったのだ。衛士は台詞を噛み砕き、徐々にそれらを再認識し始める。

「オレのところに、家出して来たって事？」

「はい」

「女友達は？」

「居ます」

「……じゃなくて。女友達の所になんで行かないのかったの」

レジ小屋の中は十畳ほどの広さである。前と後ろに入り口があり、後ろはお客様専用の入り口だ。中にはレンタル用の工具が並び、レ

ジの手前に受付の長机が置かれる。衛士は彼女をそこに座らせ話を聞くことにしたのだ。

背負っていたバッグを机に置いて、衛士から手渡されたティッシュで鼻をかんで、彼女はようやく落ち着いたようだった。ここで何か暖かいものでも出せば良いのだろうが、生憎近くには自販機も無く、この場を離れるわけにもいかなかった。

——なんでこんな事になってしまったのだろうか。

両者は心の中で呟いてから、尋問もどきを続行する。

「心配を掛けたくないのです」

暗に、衛士には心配して欲しいという意味の台詞であったのだが、彼はただ、迷惑なら良いのか、とだけ悪態を付いた。無論、心の声で。

「というか、どの道オレが君に宿泊許可を出したとしても、両親がどう思うかだな。他人の男と女が一つ屋根の下だなんてのは……」
許すだろう。

あの二人は殊彼女ばかに関しては酷く浮かれている。昨日帰宅した際に”結婚”という言葉が耳に飛び込んできたときは、余りの突飛加減に居間へと突撃した程であった。

「お、お金なら……」

「それは君が嫌になって飛び出した親の金だろ？ 使うのか？」

「私が所持している時点でこれは私のモノです」

「親が与えなければ存在しないはずだ」

「微生物が居なければ私達はここに居ませんよね？」

「つべこべつべこべと！」

膨れっ面でそっぽを向いて答える彼女に、我慢ならず衛士は怒鳴りつける。彼女は怯えたように肩を弾ませると、今度は萎縮して顔を俯かせた。

反省はしているようであるが、彼女はどうかやら世の中をチョロく見ているらしい。

彼は短い嘆息の後、まあこれも互いに勉強になるだろうと半ば諦

観気味に呟いて、分かったと、ただひと言を彼女に浴びせた。

すると途端に、満面の笑みで彼女は衛士へと顔を上げる。そんな嬉しそうな表情は、散歩に連れて行くためにリードに手を掛けた時の犬のようだった。

——確かに身長は衛士より少し低い程度であり、他と比べて幼さはまだ残るものの、だが子供っぽいと言うわけではない。中学生に見えるだけなのだ。だから純粹そうに見えるのだ。だから稀に吐き出される毒と本性に、呆気を取られ精神に毒きりを吐きつけられたような気分になってしまうのだ。

「はい！　とだけ言っていれば良いんです」

「あいよ」

「はい、と！」

「はいはい」

「もう！」

彼女は頬を膨らませてまたそっぽを向いた。彼女の様子を見るに、恐らくまともな食事をとっておらず、故に空腹で怒りっぽいのだろう。

素直な同情を胸に抱いて、昨日とは打って変わった彼女の安定しない反応に少しばかり心穏やかにされて微笑を携えた。

——皆がこうであれば、オレは幸せなのだ。

誰にとも無く衛士は理想を心中呟いてから、これからの彼女に説明する。

「悪いがケータイはロッカーなんだ。連絡を取るの是一三時だから……あと三時間後。自力で帰るのなら別にそれで良いけど、どうする？」

ここから歩いて衛士の家に向かえば大体一時間以内に到着するだろう。駅から自転車で十分のことであり、駅から徒歩十五分の自宅である。いくら疲弊する彼女の足でも、そう時間が掛かるはずも無かった。

しかし彼女は、もう歩くのは嫌ですと首を振る。結局帰りは親が

迎えに来ない限り歩きであることも知らずに、哀れなものだと衛士は衝動に駆られて頭を撫でた。

撫でてしまった。

「っ!？」

彼女は肩を弾ませる。激しく弾んだその全身は同時に背後へと引かれ、背もたれに全体重を乗せられた椅子は傾き、重心は移動して――大きな音を立てて彼女は盛大に後ろへと倒れ込んだ。

椅子が倒れる軽い音。その音が上に乗る物体によって歪むように籠って鈍い音に変わる。肘置きがあるせいで美琉はまともな動きも出来ずに身を任せ、

「いたい……」

涙目になって全身の痛みを訴える彼女は、股を広げてスカートの中を見せびらかしていた。

太腿は太っているというのではなく、程よく肉が乗っていた。細すぎず、だが太すぎはしないその足は黒いオーバーニーソックスによって包まれていて、艶やかに、それでいて素直に伸びていた。桃色のシルクのショーツは様々な部分に食い込み……。

「おい、大丈夫か？」

服は身体のラインを見せるように張り付いている。寂しさを持つ胸元は相変わらずであるが、その細い線によって目立つ下半身が、彼女に今まで無かった女性らしさというものを出現させていた。

机の脇を抜けて彼女の傍に立つと、体勢を整える術を持たぬのか、彼女は自身がどんな恥辱に晒されているのか知りつつもそれを防げぬどうしようもない羞恥によって顔を朱色に染めあげていた。両手は天井に向けて手探るように動くが、何かを捕らえる気配は一向に無い。目的の無い、無意味な行動だった。

「た、助けなさいよ! 早く! 早く!」

「早乙女さんのえっち人^{おとこ}」

「ち、ちが、違うから! 違うのよお! 貴方のせい!」

「ったく、ほらよ……っ」と

彼女の頭にまで回りこむと、衛士はそのまま屈み背もたれの上を両手で掴む。それを軽く引いて手のひらでしっかりと掴むと、腰に力を入れてソレを起こして見るが――思ったよりもすんなり起き上がるソレは、どうやら其処に座り込む早乙女が予想以上に軽いからしかった。

確かに、肉の付く場所は太腿や尻だけであり、他の部分はガリガリとは行かないが、少なくとも華奢ではあった。

胸はともかく、もう少し肉をつけなければ……と衛士は彼女に、健康的な面での心配を抱く。だが彼女はそんな事も素知らぬ風で、やがて椅子から立ち上がると顔をトマトのように真赤にしたまま衛士へと向き直った。

「変態！」

「ひどいな」

「変態！」

「助けたじゃないか」

「えっち人！」

「何を言ってるんだお前」

ハイネックセーターに、チェックのボックススカートという格好である彼女は、いつもとは違う、普通の人のような服装であるという事に衛士ははたと気がついた。

いや、そもそもこの地で今までの人生を過ごしてきたのだから、そうであってもなんらおかしくは無いはずだ。聞く限りでは箱入り、という可能性は捨てきれないが、同じ学園に通っているという時点で一般常識は無いはずが無い。彼女は典型的なお嬢様と言うわけではないのだ。

「ったく。私が男性だったらどれほど良かったことか」

「君にそんな妄想が出来たなんて驚きだな」

「男性なら今よりはもっとこう、違ったでしょうね。良い意味で。貴方とも、もっとまともに親しくなれたかもしれません」

「いや、オレじゃなくて異性と親しくなろうよ。性別逆転したんだ

から」

まともに親しくなりたかったという台詞に、衛士は思わず胸を高鳴らせる。ふと口をついたような言葉だったが、だからこそ本心と思わせるようなものに思えたのだ。

それから、彼女の儂げな姿が目に入って、それが背を押したのだろう。気がつくまで衛士の頬は上気したように桜色に染まっていた、顔が熱くなるのを覚えた。

美琉は衛士の赤面に気付くとその顔を滑稽だと口元を押さえてクスクス笑う。彼女らしい笑みの零し方であつたから、それがショックだとかムカつくだとかの感情の変異は無く――本性だのなんだの考へては見たが、彼女の本当の所がこの性格で、毒を吐いたり凄んだりの上から目線の時が、自分で作つた擬似人格^{キヤラ}なのではないかと思えてくる。

そう思わなければ、この素直な反応に理由が付けられないような気がした。

「おい兄ちゃん、会計頼む」

「あ、はい。すぐに！」

そんな事に思惟を耽らせていると不意に男の声が背から掛かった。振り向くとレジの台の上に幾つも重ねられた米袋が置かれていて、衛士は慌ててスキヤナを手にして客の下へと急いだ。気が付くとその背後に二人ほど客が並んでいて、衛士は心の中で苦澁を漏らしながらも造りモノの笑顔でそれらに対処をしていったのだった。

はむはむと人の弁当を貪りやがる早乙女美琉は器用に、とうとう当たり前前に箸を使って食事を進めていた。ナイフとフォークは無いのですか？ と聞かれたらどうしようかと要らぬ心配は杞憂に終わって、割り箸を渡した際に、後一本は？ などと問われなかったのは彼女に一般的常識と教養があるお陰だった。

彼女に自身の昼食を渡したが故に食べるものが無くなった衛士は、近くのコンビニにパンでも買いに行こうかと席を立つと、彼女は其

処で漸く衛士の弁当を譲り受けたのだと理解して、蓋を開けたところで涙目になってつき返してきた。

結果としては蓋にご飯と惣菜を半分に分けるといふ妥協案が展開されたのだが……。

「エーちゃん、ちよつと……」

バックヤードの休憩室の中には、さらに奥へと続く扉が三つある。一つは男子更衣室であり、一つは女子更衣室、もう一つは喫煙室だ。衛士はその場に入ってきて二分ほど呆然としていた内田に更衣室へと呼び込まれ、鍵も掛からぬ狭いそこへ侵入すると、内田は周到に扉を背にして衛士を睨んだ。

美琉はただわけも分からぬ顔でそれらを眺めた後、背後の長机を独占するパートのおばさん連中に、その外見と人当たりのよさ故に祝福を受けたのだった。

「どーゆーコト？」

「どういうことでしょう？」

正直な所衛士にも成り行きで、としか言い様が無かった。だが周囲には”妹”であると触れ回ったので特に突っ込んだことは聞かれず、彼女もそう言ったコトで説明している。なぜここに居るのかと言うと、調子に乗って付いてきたら迷子になってしまったという理由である。

「妹？ あの日本人離れした美貌すがたで？」

内田は頭を抱えて溜息をつくとき、まあ妹ならいいや、と首を振った。

「あと少ししたら親が迎えに来るんで……」

「ともかく、エーちゃんの彼女とかじゃないんだな？ 分かった」それから、頭の中で整理整頓されたのか、表情は明るく戻り、口元には薄っすらと笑みを浮かべていた。彼は呆然とする衛士をその場に置いたままで更衣室を後にすると、そのまま正面の、先ほどまで衛士が腰を落としていた衛士の席に座り込んだ。

早乙女は驚いたように食事の手を止め、硬直する。内田は朗らか

に口を開いた。

「結婚とか好きですか？」

彼女はその発言によって、何かを納得したように微笑み、首を傾げた。内田はそれによって勝利を確信する。

「はい、馬鹿とじゃなければ」

「ありがとうトキ妹！ 幸せにするよ！」

「……オニーチャン、この人何とかしてください」

不快感を催したとジッと視線で衛士に伝える彼女に、彼は嘆息して内田を引き剥がす。それに合わせて、パートのおばさんからの援軍も加わって——結果的に、内田は休憩室の隅っこでひっそりと食事をとることになったのだが、衛士はそれに心の底から申し訳ないと謝罪した。

「……先輩、この状況はなんスか？」

遅れてやってくるのはつい半月前に雇用された池田である。歳は衛士の一つ下で高校一年生。通う学校は違うものの、歳が近いと言う事で比較的中が良い。彼は近くのコンビニにお昼を買いに行っていたのか既にエプロンはつけておらず、上からシャツを羽織るようになって、手に買い物袋を持って衛士の隣に腰を落とした。

衛士は深い溜息を着きながら、事のあらましを説明してやることにした。

内田のいつものような残念さを中心に聞かせてやると、池田は深い溜息を付きながらペットボトルの蓋を捻って開ける。噴出すような音を鳴らしてから彼は感想を述べた。

「いや、妹なら尚更だめでしょうよ。可愛かったら尚更内田さんに任せられませんかよ」

「池田、聞こえるから」

「いや、聞こえるって言うか……僕がここに座ってからずっとコッチ見てますよ」

促されるように右側の、縦に並ぶ長机に対して横になって離れた位置に置かれる其処の端に座る内田へ顔を向けると、彼は諦めきれ

ないのか、衛士の正面の美琉を凝視していた。

彼女は怯えるようにして池田と衛士の脇に逃げ込むと、彼は短く息を吐いて、彼女と席を交換してやった。

少し長めの黒髪は軽く目に掛かる程度で、顔立ちはすっきりした歳相応のものである。どこにでも居るような男子高校生である彼は、それでも衛士と話が合うために直ぐに打ち解けたものだった。

趣味はロボットアニメの鑑賞。対して衛士は特に趣味といったものは無く、強いて言えばよく本を読む程度だった。

「でも独り身の内田さんが居るのを分かってて、こんな可愛い妹さんを、理由があれどこに連れて来るのは少し軽率だと思いますよ？ 胸の中に後悔の念を過ぎらせてください。内田さんが帰宅した後虚しさのせいで塩を掛けられた蛆虫みたいになっちゃいます」

「お前、内田さんに何の恨みがあるんだよ」

彼は品出しのアルバイトだ。だからレジアルバイトとは違って労働時間は比較的短く休憩も時間が合わない場合が多いが、シフトを決める副店長の計らいか、彼とは良く話す時間があつた。

彼は、だって、と前に置き、それを皮切りにして愚痴を吐き出した。

「内田さんちよつとでも可愛い女性客見つけるとすぐ話掛けるんですもん。その代わりに仕事が増えて、今尻拭い中です」

「お、俺だってちゃんと働いてたわ！」

「洗剤一パレットしか出してないじゃないですか。予定では午前の時点でトイレットペーパーとティッシュは終わってるんですよ」

「社員さんは？」

「忙しそうでした」

ならばもう彼を止められる人間は居ないだろう。しかしレジ打ちであれば元気良く声を出して来る客全てに好印象だけを残していく好青年の内田が、品出しになるとそれほどまでに府抜けるとは衛士にも意外であつた。

いつもは仕事が出来る印象で、やはり立派に見えたのだ。それで

いてとつつきやすく話しやすい。ステキな人だった。今や過去形で語られる時の人である。

「今日は人が少ないの？」

クスクスと押し殺すように笑っていた美琉は話の流れから察してそう聞いた。衛士は控えめに口を開く彼女を意外に思いながらも身体ごと向き直って頷いた。

「ああ。元々は必要な人数しかシフトに入れないから、病欠だとかでその日に突然休まれると応援が間に合わなくて、今居る分で調節しなくちゃならないからな」

だから休むのならば最低でも一週間前に報告するのが原則であり、マナーである。衛士はそれを伝えると、彼のシフトをいつ盗み見たのか彼女は衛士の労働時間を気にして、体調を気遣うように肩をさすった。

「今日だけでも十一時間働くのでしょうか？」

「ま、帰っても勉強するわけじゃないし、読む本もするゲームも無いから暇だしな」

「ふふ、明日のテスト結果が楽しみですわ」

たった三日のことであるが、衛士は彼女との仲を随分と縮めたような気がしていた。

初対面では完全に他人行儀であり、押しかけた際は衛士の方が警戒心を全開に広げていて、気がつけば時間が過ぎていた。そして今日、なにやら深い事情があってアルバイト先に押しかけてきた彼女は衛士を頼っているようで、彼はそれがきっかけで彼女を見直したのだ。割とまともそうだと。

少なくとも両者とも好意的であり、このまま良い友達になればいいなと考えていた。

そして同時に、二人の関係はこの時点では順調である。その認識は正しいのだが、兄妹（お兄さんお姉さん）として理解している周囲には、その距離の開いている会話は奇妙なモノに見えていたのだ。

一番最初に、池田が噴出するようにして笑った。

「ははっ、まるで兄妹じゃないみたいな会話ですね」

「え！？ あ、あ……まあ、な。オレとは違って育ちが良いんだ」

「エーちゃん焦ってんねー」

「焦ってないデスよ。理由がないっす」

じんわりと汗は額から滲み出る。乾いた笑いでソレを華麗に受け流していると、机の上に置いた携帯が振動して着信を知らせた。サブディスプレイには”母”の一文字が表示されていた。

「――んじゃエイジさん、お先に失礼します」

「エーちゃんおっつー」

「お疲れさまでーす」

午後の二度目の休憩が終わりかかる二〇時。私服に着替え直した池田と内田が、一人で炭酸飲料をあおる衛士に挨拶をしてから休憩室を後にする。彼が帰宅できるのは二時間後のことであり、最も客の数が減る時間帯であった。

いつもは八レジまでフル回転する中央レジも、この時間帯になると二レジまでしか解放されない。サービスカウンターにはパートのおばさんの姿は無く、居るのは夜勤の社員さんである。だから、アルバイトの数もこの大型ホームセンターだというのに十人に満たず、暇な時間を持て余すようにして、彼は誰も居ない休憩室の電気を消して、店内へと向かった。

「――おはようございます」

気怠そうに歩きながらレジへ向かうと、一レジだけが稼動していた。衛士はその後ろのレジを起動させながらテープやらを用意して、今日は初対面らしいバイトへと挨拶をする。全ては気持ちの良い挨拶から始まる、というのが衛士の持論である。

「あ、おはようございます！」

長めのボブカットは茶色に染まる。彼女は振り向きながら元氣の良い挨拶を返して微笑んだ。完全に衛士へと向くと、初めましてと頭を下げた。

「今日から入りました、矢継摩耶^{やつぎまや}です。よろしくお願いします!」

「今日から入って一人でレジですかあ、頑張ってください。時衛士です。分かんない事あったら遠慮なく聞いてください」

「あー、じゃ早速良いですか?」

彼女は控えめに手を上げると、ちょいちょいと手招きをして自身のレジへ誘った。衛士は笑顔で彼女の下へ赴くと、屈みこんで足元にあるレジロールが縦に詰められる黒い袋から一つを取り出した。

「コレ、どうつけるんですか?」

衛士は手渡されて、彼女は一步引く。彼は彼女の注目を受けてから、レジの脇にあるレシートが出てくる部分の蓋を開け、白い紙の両脇が赤いラインが塗られる、もう残り少ないといった意味を持つそれを引き出して、受け取ったレジロールを入れ替える。

「この紙の切り口が手前を向くように置くんです」

「はい!」

「それで紙を引っ張って……ちゃんと蓋を閉めます」

力いっぱい叩き付けると、蓋は引き出した紙を挟んで閉まる。衛士はそれから『レシート』と記されるボタンを押して、無用な部分の紙を切り取った。

「これで終わりです」

「なるほど。覚えました」

「はは、まあ徐々にね。今日はどうせもうお客さんも殆ど来ないだろうし、オレがサッカーに入りますよ」

「さ、サッカーするんですか?」

「はい。忙しいからね。お客さん来たら」

商品のバーコードをスキャナで読み取り金額を口にして、それでいて合計金額を伝えてからカゴを片付け、客がサイフから金を出している間に袋詰めをする。それは始めての作業にしては酷であり、急がなくても良くても心が焦り、心臓に悪いのだ。

衛士は彼女がスポーツの方のサッカーと袋詰め店員のサッカーとを勘違いしているのにも気付かず、一年前に思いを馳せていた。

矢継は困惑しつつも、多分クラブに一生懸命な人なのだ、と誤った認識をした。

「そういえば、トキさんはお幾つで？」

「オレは十六で、高一です」

「ええっ！？ て、てつきり大学生で年上かと……。私は十九歳で、大学一年なんですよ」

「ま、マジすか！？ オレはてつきり同年代かと」

くつきりとした大きな瞳が特徴的な女の子である。驚いたように眼を見開くとさらに大きくなって、吸い込まれそうな黒い瞳が衛士を其処に映していた。

元氣一筋といった雰囲気オーラにして噴出する彼女は、年上であるという特権を得たように微笑んだ。その表情には覚えがあり、衛士の脳裏に一瞬姉の顔が過ぎったのは少しばかりショックな出来事である。健気そうな少女とあの姉を比べてしまうのは、衛士の中では不敬罪に値するのだ。

「そういえば、矢継さんてこういったバイトは始めてなんですか？」

「あ、タメ口で大丈夫だ……すよ？」

「はは、それじゃそっちも」

「へへ、ありがとう。うん、バイト自体初めてで。お母さんに、もう大学生なんだからお小遣いぐらいは自分で稼げって。それで時給も八五〇円で丁度良いかなあって」

この近くでアルバイトを探すのならば、確かに時給はその程度がいいところだろう。それにレジアルバイトなら忙しいときは目も回るような程多忙を極めるが、慣れてさえしまえば、忙しい事には変わりはないが疲れ知らずと言っても過言ではない程度におさまる。

彼女の選択は比較的正しいだろう。衛士はそれと共に、暇な時間に良い話し相手を見つけたと微笑んで、客が来るまでの間、軽い談笑へとしゃれ込んだ。

——それ故にゴキゲンに帰宅した。家に着く時刻は二三時前である。夕食はいつも期待できないので帰り道にある定食屋で食事を済ませてからの帰宅であった。

鍵が掛かっているであろう玄関に鍵を差込み開錠。だが手ごたえは無く、扉を開けてみるとそれは音も無く素直に開いた。彼はそれを無用心だと吐き捨てながら鍵を引き抜き、ポケットにしまいこむ。いくらあの両親でも、一人の娘の事を考えて諭して自宅へ送ってくれたのだらうと期待しながら玄関に入り込むと、そこには見覚えのあるブーツと、見慣れぬ革靴が仲が良さそうに並んでいた。嫌な予感がする。胸焼けでもしたような不快さが過ぎった。

来客に勘付かれぬように音を立てず上がり、階段へと身を滑らそうとする。その最中で、居間と廊下とを隔てるドアが開き、様子を窺うように顔を出した理恵が彼の姿を捉えてしまった。衛士は身体を硬直させると、彼女はちよつとしてから身を引いた。

「お母さん、エージが帰ってきたよ」

「ここに呼びなさい」

「はい」

再び開く扉の隙間から、また彼女は顔を出した。なにやら面白そうだと言う様ににやける表情を隠すこともせずに見せ、衛士はそんな彼女に呆れて棒立ちする。だが心の中に広がる嫌な予感が払拭できぬわけではなかった。

「だってさ」

——予測で切るのは、早乙女美琉の父親が押しかけたと言う事である。理由は恐らく、娘が男の下へ逃げたという事であろう。父親としては我慢ならないはずだ。だが彼女の父親という事もあって、やはり積極であったのは否めなかった。

少しは冷静であって欲しいを願いながら、衛士は彼女が招く居間へと足を向けた。

——入って正面には壁がある。そこから左側に台所のカウンターに面したところにテーブルがあり、そこに男女が対面するように腰

を掛けていた。

手前側に、早乙女美琉。反対側には筋骨隆々と逞しい、着込むスーツにすらそのガタイの良さが浮き出る男はオールバックが良く似合っていた。

「君が、衛士君かね？」

渋く低い声が鈍く空間を震わせる。確かな威厳が其処にはあって、衛士は思わず身震いをした。

嫌な予感的中するというのは、いつになっても嫌なモノだ。

「は、はい」

殴られれば一撃で昇天する自信がある。衛士は砂時計を用意する余裕も無く立ち尽くしていた。

男は衛士を一瞥すると、座りたまえ、と美琉の傍らの席を勧める。衛士は恐る恐る歩み寄ってから、失礼、と腰を落とした。

彫りが深く鼻が高い男だった。瞳は青藍色で、どうやら美琉は父親似らしいことが判明するが、それゆえに、緊張が倍増してしまっただのを感じていた。自分に似ていれば普通以上に愛着が湧くだろう。さらに事情を知らずに衛士が娘をたぶらかしていたと言った風に勘違いされていれば、尚更恐怖をあおってしまう。

逃げ場は無く、砂時計も無駄であろう。だから衛士は覚悟した。大きく息を吸い込んで、ひたすらに彼の言葉を待っていた。

ソファアーに身を沈めて、付いても居ないテレビへと顔を向けつつ視線を三人に向ける親子は好奇心旺盛であり、怖いもの見たさというのがその場に居る理由の大半を占めていた。

男の喉仏が動く。衛士は腹を決めた。

「すまないが、時間を頂きたいのだが」

「は、はい」

凄んでいるわけではないのだろうが、その鋭い眼光と声音とが相まって衛士の心臓を鷲掴んでいた。

恐怖が五臓六腑に染み渡る。指先が冷えていくのが良く分かった。「命も頂いてよろしいか？」

「は、は……は？」

「冗談だ。気にしないでくれ」

「は、ははは」

引き攣った笑顔を見せる衛士に、男は微笑んだ。先ほどの嘘などは冗談ですら口に出来ぬような不器用さはどこへやら、瞬く間に男から受けるプレッシャーは消え去っていた。

「いや、君に一つ、直に質問をしたくわざわざ時間を売って貰ったのだからね」

「はあ……」

ちなみにお幾らなのですか？ とは口が裂けても聞けない。彼が帰った後で聞こうと衛士は考えた。

どうやら男は衛士を殺しに来たわけではなく、精神的に、社会的に追い詰めに来たというわけでもないらしい。少なくともそれが理解できて、衛士はほっと胸を撫で下ろした。

時計の秒針が刻む音だけが響くその空間は静寂が支配し始めるが、その前に彼は言葉を続ける。

「君は何色が好きかね？」

「色、ですか……」

——衛士はそのひと言で男の目的を確信する。

直接聞かなければならない事。それは恐らく、それほど大事という事ではなく、相手に直感で答えてもらいたいというだけなのだ。考える時間も、質問の意図を調べる暇も与えない。それが恐らく、一番重要なのだ。

そしてこれは心理学の一種だろう。色彩によって深層心理を判断するものである。それが絶対というわけではないが、少なくとも参考になる。その中で信頼性があって一般的であり、簡単なモノだった。

衛士は、その意図を理解するが故に、考える素振りも無く口にした。

「青です」

「ほう。理由は……あるかな？」

「いえ、特には」

「そうか……。なら次だ。君は喉が渴いて自販機に向かう。すると何のラベルも貼られていないサンプルばかりだった。君は構わずボタンを押し、缶ジュースを購入した。その内容物の色はなんだろう？」

「……無色、ですかね。理由は——何か、入ってたら嫌ですから。何も描いてない缶なら尚更だと思いますが……」

ふむと、男は顎を指先で搔くようにして考える。

衛士は答えを間違えたかと額から汗を一筋流すが、彼はやや俯き気味だった顔を引き起こして、口元に笑みを浮かべたままでそれを続行した。

次だ、と言う言葉が胸に突き刺さるようだった。

「君は地下への扉だけは決して開けてはいけないと言われて育ってきた。だがある日、鍵が開いている。君は好奇心のままに扉に手を掛け開けてみた……。その先は、何処に繋がっていた？ 近所？

国内外の遠い場所？ 宇宙？」

「地下帝国……。だから、国内外の遠い場所になりますかね」

「君はブランコを漕いで思い切り跳んだ。一体何処に落ちた？」

「バンカーに埋まりました」

「君は高層マンションに住んでいる。誰かの悲鳴が聞こえた気がしてベランダを覗いてみると、そこには血に塗れた男が居た。振り向く彼と目があった君は、その時彼が指をこちらに向けて口を動かしていたことに気付く。彼は一体何を言っていたと思う？」

「数えてたんじゃないですかね。オレの居る階数がどこか」

「軍人の肖像画が飾ってある。その画の軍人は怪我をしているようだった。それはどこか？」

「目、ですかね」

「ある大統領が施設を訪れたとき、ある少女を見て哀れに思い、プレゼントを贈ることにした。ある日はカスタネットを送った。だが

少女は喜ばなかった。ある日はサッカーボールを送った。少女は喜ばない。人形を贈った。だが少女は喜ばない。綺麗な絵画を送った。やはり少女は喜ばない。だがある日ある物を送ると、少女は大喜びして使ったそうだ。ソレは一体なんだと思う？」

「……………縄、ですか？」

「さあ、決まった答えはないがね」

——正直、初めて聞く心理テストばかりだった。だから彼が何を知りたいのか分からない。しかし少なくとも良い意味のものではない事は確かな気がした。

男は其処で一つ休憩を入れるように、テーブルの上の紅茶を飲み下す。衛士の隣で存在感を完全な無に変えてみせる美琉は同じように紅茶で喉を潤した。

しかし、衛士の喉には飲み物すら通らない。そもそも衛士のために用意されている飲料などは存在しない。それを気にする余裕もなく、何か図られている気がして、とてもよい気分だといえる状態ではなかった。

嘆息するように男は一つ置いてから、次が最後だと、前に置いた。「可愛い娘が突然知らない男の家に入り浸り始めた。君なら、どうする？」

「……………」

男は出来る限り低い声で凄み、衛士を睨む。眼光には怒りが孕まれ、全身から湧き出るような威圧感で周囲全てを押しつぶさんとしていた。

——今までの心理テストはただの余興に過ぎず、恐らく彼自体大きな参考にしていないだろう。前置きに過ぎないのだ。核心を突くためにワンクッションを置いただけに過ぎない。

衛士は蛇に睨まれたカエルのように動きを止めていた。

最早言葉は出ず、頭の中で警鐘だけが掻き鳴っていた。

何かを答えなければいけないという威圧から、無理矢理喉から言葉を搾り出す。

「どうする？ 君は、どうする？」

「その男を……見極めます」

「それだけかい？」

「その結果によりますが……」

「なら、私ならどうすると思う？ 衛士君」

はは、殴るだけじゃ済みそうに無いですね。

衛士はそう言ってみたかったが、流石に命知らず恥知らずではない。破廉恥ではない上に、意外に慎重派なのだ。だから、ゴクリと喉を鳴らしてから、高鳴る心臓を押さえながら、ぼーっとする頭を必死に動かして考えた。

——何がいい。何が正解だ？ そもそも正しい答えなどが存在するのだろうか。こういった問題には、様々な葛藤が存在して然るべきである筈だ。男を認めたい。だが可愛い娘を手放したくない。男を突き放したい。だが娘の悲しむ顔は見たくない。娘の幸せを望みたい。されど娘に想われていたい。

彼が父である限り、娘のためにここまで行動してしまう程に愛が深い限り、その問いにまともな、あるいは確かな答えがあるはずも無いのだ。

「まず心理テストで相手を計って、最後に嫌がらせみたいな質問をすると思います。こんな未熟者にはまだ、父の心情なんて察し切れませんよ。経験が違うんですから」

もうどうにでもなれと投げやりに答えて見せた。

これは先ほどの答えと同様に本心であり、少しばかり言葉を選んだだけである。

彼は反応を見るのが嫌になって顔を俯かせていると——短い嘆息が、耳に届いた。心臓が止まるかと思ったのはそれが原因であった。「ほう、興味深いな……君は。中々に自分を知っている。さらに慎重派で、やや犯罪者の素質があるためか、危機対応能力が高い。だがその素質と言うのは、万人にあって然るべきものだから気にする必要ないが……君は犯罪を犯すとしたら、どんなものだと思う？」

しかし、予想していた怒号は浴びせられず、飽くまで穏やかさを貫く男は、最後だ、という自身の言葉を裏切って質問を追加した。

だが、これが本当に最後なのだろう。男は真剣な眼差しを持って衛士を捉えていた。それは先ほどまでの邪な^{よこしま}気持ちが生んでいた視線ではなく、何か、衛士に確かなモノを垣間見たような、期待を持つようなものだった。

ここで嘘をついても見透かされてしまうようで、だから衛士は、問いと同時に脳裏に浮かぶそれを、恐る恐る口にした。

「……はは、人でも、殺しそうですね。オレ」

一時の感情に任せれば全てを力でねじ伏せようとする。衛士は実際にあったそれらを思い出してうな垂れた。しかし実際は実力が無いので返り討ちにされるばかりであり、そんな時に役立つのは砂時計だった。

時間があれば冷静になれる。冷静になれば、それ以外の解決法が浮かんで切り抜けてきたのだ。

だから、砂時計が無ければ今頃はいろいろな場所でケンカをし、ボロボロになっていたことだろうと衛士は考えた。

「いや、君には力が無いから無理だ。意気地も無い」

男はそれを捨て台詞にするように、テーブルを支えにして立ち上がる。衛士の両親はソファに座りながらも背筋をピンと伸ばして同様に立ち上がろうとするが、男はそれを制して、美琉のすぐ横に移動した。

「確かにお前の見る目とやらは確かなようだ。一見勤勉そうで貧弱であるような男だが、素直で芯が通るように見える。だが女……いや、色気には弱いようだがな」

「父様……」

「私も視野が狭すぎたようだしな。この少年ならば、友人であろうと恋人であろうと、許そうと思う。理由が聞きたいか？」

彼女は首を振る。

しかし男は語り始めた。

「私の妻、お前の母さんは、私の親友とも言える女性だった……そう思っていたのは、私だけだったのだがな。お前には、そういった人間を作って欲しいのだ。真っ直ぐな人間と、性差無く信頼できる関係を。お前が認めた人間なら、と。私は飽くまで正常でないか否かを見ただけに過ぎん」

——とんでもない上から目線であった。衛士は全てにおいて見下された気がしてこのままベッドに横になりたかった。今すぐに脱力したかったのだ。だがまだ許されない。傍らでは、涙ちよちよぎれる親子のトークが展開してしまっていた。

衛士は自分にだけ紅茶が出ていない事を気にしながら、壁にかけてある時計をちらりと確認した。

時刻は二三時三二分。然程時間経過はしていないようだったが、やがて男の笑う声が聞こえて、緊張の糸が解けたようにどっと押し寄せてくる疲れに衛士の瞳には世界が歪んで見えてしまい、眼球の裏側が圧迫されるような苦しさを覚える。同時に胸の中に広がる、圧力のようなものが息苦しくさせた。

その直後に、大きく制御しようがない意識の希薄化が彼を襲い——視界は暗転。衛士はテーブルに頭を叩き付けるようにして、意識を手放していた。

四日目

五月二三日、月曜日。

宵の口にはまだ鈍い蒼色に晴れ渡っていた空は、深夜帯になる頃には静かに雨が降らし始め、辺りの気温を著しく低下させる。津々と降り注ぐ雨は誰にとも無くやや早めの入梅を告げた、始めの降雨だった。

時衛士は冷え切る部屋の中、掛け布団の喪失した寝台の上で寒さを覚えて目を覚ました。身を抱くようにすると、露出される腹が冷たく手のひらに触れる。この寒さは睡眠の妨げになると理解した衛士は、蹴落とした布団を引っ張り上げるために身体を起こした。

冷風が窓から注ぎ込まれ、優しく頬を撫でる。静かな雨音は、辺りが静寂であるが故により目立っていた。

開け放つ窓の外は暗く、まだ夜は明ける様子を見せない。

衛士は気絶した直後からの記憶が失われていて、どうやって自分が自室に戻ったのか分からなかった。有力候補は父親が優しく抱き上げて部屋へつれてきてくれた、というものだが、彼は面倒くさがりやであり、さらにいつもならば既に二三時には就寝している筈なのだ。あれほど遅くまで付き合い、その上息子を部屋に送るなんて疲労しか残らない作業は明日に仕事を控える彼にとっては苦痛であるだろう。だから普通は、放置するかソファ―に寝かすだけで終える筈だ。

そして今、寝台の上で目を覚まし、さらに風呂上りのように髪も身体もサラサラと言うところを見れば、どうやら一度起きて風呂に入ったものの寝ぼけていたのか、記憶に残らなかったのだろうと衛士は理解した。

時刻を確認するために、枕元に放置されるケータイに手を伸ばす。見ると時刻は五時一八分を指していた。それと同時に衛士は、何気なく着信履歴を確認すると見覚えの無い番号からの着信があったと

表示されていた。しかしそれは着信だけにおさまらず通話した形跡すらり、さらに午前一時の着信という事もあって強い印象を覚えていた。酷く不気味だという印象を。

「っ……はぁ。目が覚めた……」

大きく伸びをして、窓を閉めてカーテンで外界とを遮り布団を掛けなおして横になる。そのまま大きく伸びをしてぽつりと呟くと、イライラというか、ムラムラが肉体の一部分に募るのを覚えた。最近は美人、美少女との出会いが多いもののそれに伴って目まぐるしい物事の移り変わりや忙しさが降りかかるので、自分を慰める暇と余力が無かったのだ。

だから今ふと頑張ってみるかと思ったが、良く考えるともう数時間が経過すれば学園に行かねばならない時間である。だとすると、せっかくだがいつもより長い睡眠時間で養った英気は疲弊し台無しになってしまうのではないかと考える——だろう。二ヶ月近く前の衛士ならば。

衛士は寝台に接するように鎮座するパソコンデスクの上に置かれる砂時計に手を伸ばした。

この砂時計は五分間測れるものであり、そして五分が経過した直後に砂時計を使用する直前まで自動的に時を戻すのだ。一見無駄だと思われるこの砂時計の強みは、一度未来を体感し、さらに砂時計を使用した時点で肉体的損傷、信頼関係の欠損を起こしても時間さえ経過してくれば無かったことになることである。

だからこの砂時計使用中に果てれば、時間が巻き戻った時には記憶だけが残って、疲労も消える。便利なモノだ。

衛士は砂時計を掴み持ち上げたところで、不意に鳴り響く、無機質な着信音に肩を激しく震わせた。

朝っぱらから、と愚痴を零しながらケータイを開くが、また知らない電話番号からの着信であった。だが先ほどの番号とは違うらしいのだが、衛士は何も考えずに通話ボタンを押して、耳に当てた。何か、そうしなければならぬ気がしたからである。

『おはようございます』

耳に優しい静かな挨拶が響く。衛士は答えないが、声は構わず次を続けた。

『本日午前一時三〇分にお邪魔させていただきます。〇時三〇分まで時刻を戻しますので、準備を整えてお待ちください』

澄んだ声だった。言葉の端々に丁寧さを覚え、だが事務的だと思うようなその台詞に、僅かな間恐怖を煽られた。衛士がその声の主が誰であるか気付くのに三分以上を要したのに、寝起きだという事は関係ないだろう。

「ミシエルかつ!？」

叫ぶと同時に、起こした身体は気がつくとうつ伏せになっていた。顔は固いテーブルに張り付き、椅子に座ったまま、清い唇は無機質との熱い接吻を交わしている姿勢であるからこそ負担が強かった。

肩に鈍い痛みが走り、硬直する。激痛が引いてから衛士は顔をテーブルからゆっくり引き剥がして目を開いた。

一瞬にして移動したのは衛士に特殊能力が発現したからではない。今まで無かった全身の凝りを覚えたのは、持続された負担があったことを知らせていた。

衛士が居間で眠りこけていたその瞬間まで時間が巻き戻ったのだ。

——しかし、時間が巻き戻っていても記憶だけが持ち越される、という説明だけを受けていた衛士は、僅かな疑問を覚えていた。

それは時間が巻き戻った瞬間に目を覚ましたことについてである。ケータイで時刻を確認すると、それは確かに〇時三〇分を表示させており、ミシエルの言葉どおりになっていることが分かる。そして彼女の説明通りなら、本当ならば衛士は未だ眠っていてもおかしくは無い筈なのだ。偶然この時間に目を覚ました、と言うのならはまだ分かる話であるが……。

「いや、そうだ」

衛士は口に出して頷いた。

——偶然なんだ。偶然起きた。目が覚めたんだ。この時間に。彼

女はそれを知っていて、だからこそこの時間に巻き戻したのだ。そうしなければ、覚えの無い番号からの着信に應對した記録も、風呂に入って自室に戻ったという事実も説明が付かない。

仮に、起きている時に眠っている時刻まで時間を巻き戻した時、意識を覚醒させるとする。それから行動を起こして電話に應對し、風呂に入り、彼女の訪問を経て自室に戻った――以前に一度その流れを経験しなければ、オレが部屋に居た理由が付かない。

そして、その仮定が正しければ衛士はその経験を記憶に残していないことになる。ただ忘れているだけならまだしも、思い出すきっかけ複数に触れているにも関わらず既視感デジャヴすら感じないのは、完全に記憶からその事実が抹消されていると言う事だろう。

だから、後者はありえない。

衛士は決めつけ、一先ず風呂場へと足を向けた。

――四月八日。それはこの砂時計と共にミシエルが現れた日であった。

簡単な説明と、目的も分からないノルマだけを与えて去っていった。ノルマを達成しなければならぬ期日は不明であり、砂時計を与えた意味も分からない。さらに彼女自体の正体が不明であるのにも関わらず、ミシエルと言う名の女性は時衛士の人生を大きく変えていた。それが悪い方向、良い方向、そのどちらに進むのかはまだわからないのだが。

そしてアレから衛士は日常生活に支障をきたさないレベルで良いことをしてきたつもりである。また、砂時計を悪用した事柄も、テストのカンニングにしか利用したことが無い。彼なりに努力はしないが、やるべき事は細々とこなしてのだ。

三日前に一度死んだ。横転してくる車に頭部を叩き潰され全身の肉を掻き乱された死体となったときも、結局はそれほど精神的乱れは起きず、何事も無い様に生活が出来る。夜中に死を考えては涙する日が続いているが、それでも何かに支障がでるわけでもなかった。何が起これども自己責任だと片付けて、ミシエルが再び現れるの

もノルマを達成した時までだと衛士は考えていた。

しかしついさっき電話がなった。ミシェルからであり、午前一時にまた会おうとの事だった。

——目的は分らない。だがそれは前と同じだ。また新たに説明する要因が加わったのだろうかと衛士は考えながら風呂を上がり、着替えを持ってきていないことに気付いて、全裸のまま自室へと向かった。

服を着て、寝台に倒れ込む。僅かな睡眠では取れなかった疲れが身体の動きを鈍くさせていた。

電気をつける部屋の中、壁に掛かっている時計に視線を移すと時刻は既に一時に達しようとしていた。

気紛れに付けたテレビには見たことも無いアニメが放送されていて、衛士はそれをなんと無しに聞きながら天井を見つめていた。

その最中に着信音が鳴る。衛士は相手を確認しもせずに電話に出た。

『む、起きていたのか。私は伝言に残すだけにしておこうと思ったのだがな』

どこかで聞いた事があるような、意味もなく渋く厳しさを思わせる声が、不躰に発された。衛士が相槌を打つと、相手の男は短い嘆息でノイズを散らしてから言葉を続ける。

『ただひと言を伝えたくてな……。娘に手を出したら合法的に殺すと……伝えてやりたくてな。それだけだ。二度と会えないことを望む。では』

男は一方的に口を開き一方的に通話を終わらせる。残された衛士は耳にこびり付くような鈍い声音を幾度か反芻しながら、

「娘の前では立派な事が言えるお父さんって素敵だな」とだけ呟き、ケータイを閉じて枕元に置いた。

——愛娘である早乙女美琉の前で『お前の思うように衛士と親しくなれ』と言った彼は、その後衛士に親しくなったら殺すと釘を刺した。

貴族だのなんだの言いながらも、結局父親である限り何かが変わるでもない。ある意味立派な男だったのだと衛士は彼を再認識なおして、これからは幾ら美少女で自身にある程度の好意を持っている美琉であろうとも、少しづつ距離を置いていこうと考えた。

見事な防衛術だとやるせなく息を吐いてから、衛士はそつと目を閉じる。

気がつくのと、窓の外から雨音が耳に届いていた。冷気が窓の外から流れているのを肌に感じて、身を抱くように、胎児のように横になって丸まった。

深夜の、誰もが寝静まった静かな時間。雨も降り始めて、虚無感に拍車が掛かっていた。

寂しいといった感情がその原因だと言う事はわかっていた。だからこそ、それがどうしようもないことは理解していた。

ただの男子高校生である少年には、自身が一度死んだという事実は少なくとも衝撃的なことだった。あの時の、瞬間的であるものの死に至らしめる絶大な痛みは今でも頬に覚えている。記憶が肉体に全てを反映しているようだった。

誰かにこの生を肯定してもらいたい。だからこそ、ここ数日の目まぐるしさはある意味で満たされていたのかもしれない。美琉は自身と仲良くなりたいと接してくれ、理恵はいつもどおり姉としてコキを使ってくれ、人と居ない時がなかった。ここ最近では理恵は常に衛士の部屋に入り浸り、彼が眠るまで自室へ戻らないからこそ、不意に気を失って気がついたら一人きり、という状況に弱いのだろう。

自身の貧弱さが嫌なるが、だが仕方が無いのではないかと肯定する自分も居た。

「遅いな……」

眼を瞑ったまま時刻も見ずに呟く。そうしているだけでも大分時間が流れたような気がしていた。

嫌な考えことをしていたから、それとも僅か一時間でありながら

も、疲労が拭われなくとも眠っていたからか、眠気は一切無い。だから衛士は付けっぱなしの照明を眩しく思いながらも、ケータイで時刻を確認した。

一時二八分。ミシェルが告げた時間までは後僅かだった。

衛士は身体を起こす。首を捻って骨を鳴らしてから、寝台に腰掛けるようにして座りなおした。

目的もなくつけていたテレビを眺めるも、内容は一切入ってこない。

緊張しているためか、下腹部に鋭い痛みを覚えた。全ておいて集中力は持続せず、虚空の一点を凝視する瞳には生気が宿らない。

その中で不意に目の前に現れた影に、衛士は顔を上げて、無表情で出迎えた。

「こんばんは」

電話よりもクリアに聞こえる声であるが、大きな違いはなく、耳にすっと入り込むものだった。

早乙女美琉に似ていると考えていた彼女の姿は、思っていたよりも似通った点は少ないことに気がつく。透き通るような黄金色の髪はセミロング程度の長さに収まっていて、目は笑みによって細められているが、開けばやや釣りあがる様なモノだった。また瞳は琥珀色で、眉は薄く鋭く延びる。

「このような夜更けに不眠であることは了解しているのですが、どうにも貴方は何があってもこちらに電話一本くださらないので……。まるで、私の事を忘れてしまったかのように」

下腹部辺りで重なる手を上げて胸の前に移動させる。ちょっとした動作で揺れそうなほど豊満な乳房は、ウェットスーツのような服によってあからさまなまでに強調されていた。

だが、衛士にはもう、彼女の胸を注視するような余裕は残っていない。彼女の、ミシエルの目的を探ることで頭が一杯になっていた。

「そんな、忘れられるわけも無いでしょう」

「ですよね」

彼女は落ち着いた女性のように穏やかに微笑むと、それからまた薄く目を開けて口元に笑みを残したまま衛士を見つめた。何か、選定でもするかのように彼の全身を舐めるように視線を往来させてから頷いた。

「大変お疲れのようですね」

「疲れ知らずってほど無邪気でもないんでね」

ここ最近は特に涙を流し、空が明るんだ頃に眠りについてたのだ。空元気を悟られぬようないつもの態度を保っていた為に、疲労はただ蓄積されるだけであった。

休まる余裕は余りなかった。休もうとも思わなかった。とにかく気分を紛らわせたかったのだ。疲れて眠くなればそれで良い。今はそうだった。

「なら今夜は良く眠れるようにしましょう」

彼女はゆったりとした動作で目の前まで近づいたかと思うと、なんの躊躇いも無しに衛士の横に座り込む。マットレスが沈むのに応じて衛士の身体が俄かに揺れる。甘い臭いが鼻を掠めて、彼女の吐息が耳に掛かった。

頭の芯がぼーっとするのを感じながら、それでも意識を必死に保って彼女の言葉に耳を傾ける。

しかしミシェルは彼の様子を構わずと、本題に入っていた。

「本来、人は一度しか死ぬことは許されていません。しかし貴方に与えた砂時計……アレを使用すれば、望むとも望まなくとも、死を経験できる。最も記憶を持ち越せるのは砂時計の効果を理解している人間だけです」

肩が接し、香りが強くなる。彼女の体温を覚え、頬が熱くなるのを感じた。

「ですから、貴方が生命を散らせるのも、あと三度だけと言う原則ルールを設けました。幾度でも死ぬというものは、自身の生命の軽薄化ベナルティに繋がりますから。無意味でもありますし……それについての罰則につきましては、砂時計の返還とそれに関する記憶の抹消とさせて

いただきます」

「記憶の、抹消……？」

——なんだそれは、聞いた事が無い。まるで当たり前のようになっているが、彼女はオレが、彼女の事を容易に記憶を操れる人間だと理解している、という風に認識しているのか？ いや、そもそも記憶の抹消なんて——。

狼狽する衛士であるが、彼は初めての説明の際、彼女の豊かな胸に熱を出して話を聞いていなかったことなどはすっかり忘れてしまっていた。

ミシエルはそれも気にせず頷いて、掻い摘むように解説した。

「ノルマ未達成の罰則同様です。砂時計についての記憶を消させていただくのです。勿論このような砂時計ですので、恐らくその記憶が失せても日常生活には支障は無いかと」

未来へ進むには砂時計を使用しなければいい。だが同じときを延々と繰り返したいのなら、その都度砂時計を使用しなければならぬ。だから彼女の言うとおり、砂時計は使用者の心情を大きく変えるものの、その周囲はこれといった変化をもたらさない。変化があるとすれば使用者の行動に伴うのだ。

しかし、記憶抹消失敗時の説明を彼女は省く。無論、前回の説明を聞いていなかった衛士はそれには気付けなかった。

「続いて……実はめでたく、貴方は善行の残り回数を九〇以下にまでしたので」

「ご褒美ってヤツですか？」

「ええ……まあ、ある意味そうですね。貴方は今までで、危険に対する意識が酷く強くなっています。危機対応能力が向上している、という事です。最も、貴方が誰かの危機を覚えて繰り返させた時間は計四時間を越えるのではや必然と言っても良いものでしょうが……」

衛士は彼女の言葉に眉をしかめる。

その実、危機対応能力というものが研ぎ澄まされ尖りに尖ったこ

の鋭い直感だというのなれば、衛士はこの直感を彼女から与えられたものだと考えていたからだ。そうでなければピンポイントで事故なんて予想できないし、友達が階段から突き飛ばされる瞬間だっ
て予想できない。できるはずがない。

常人であれば。

だからこれは、彼女の仕業だと信じ込んでいたのだ。

しかしミシエルは首を振る。これは飽くまで衛士が育てた一種の才能だ、と。

「私が与えたのは砂時計と、あの免許証の二つだけです。それと……」

言いよどむミシエルに衛士は続きを促すが、彼女はいえ、と首を振った。

表情からは笑みが失せていて、緊張を孕むように真顔に戻っていた。衛士はそれを不審に思いながらも、自身ではどうしようもないのを知って口を閉ざす。それからややあって、ミシエルは再び口を開いた。

「貴方には、これから五つの試練をこなしてもらいます」

「試練？　――やっぱりコレは、オレの何かを試すものなんですね。この砂時計をどう利用するか……善行数を全て消化するのが目的じゃない」

――だとすると。

「もしかして、今まで無かった奇妙な危険も……全部貴女が仕組んだんじゃないんですか？」

中村が会談から落ちそうになったのも、美琉が車に轢かれそうになったのも――いや、考えれば他にももっとあったはずだ。誰かが、下手をすれば命を手放していた程の危険が。余りにも不自然に身近にありすぎたのだ。

衛士は常々思っていた事を構わず口にする。最早、彼女に対してはある種の敵意しか抱かなくなっていたからだ。

しかし彼女は微笑んで――。

「いえ、”貴方の何か”ではなく、貴方……つまり時衛士と云う個人を試すものなのですよ。そしてこれまでで実際に、貴方が善悪どちらのタイプなのか。積極的なのか消極的なのか。いざと言うときにどういった行動が出来るのか……少なくともそれらの資質は計れました」

その上で、と彼女は立ち上がり、衛士に背を向ける。彼は既に彼女に対する愛着も恐怖も消えうせていて、憎しみのような、自身をこのような状態に貶めたと言っても過言ではない彼女の、その華奢だとわかるような背を睨んだ。

「そして貴方の言葉の通り、或る危機は確かにこちらで操作したものです。それは一体どれか、まではお教えできませんが。その試練も、今度は貴方に対する危機をどう処理するか……それを計るものです」

「正体も、目的も明かさないようなアンタのモルモットになれって言うんですか？」

「怨みたければ怨んでください」

——それが貴方の力になるのなら。

彼女はその言葉を飲み込んで、両手を顔にあて、そこから髪を掻き揚げるようにして目尻に溜まる涙を拭いた。

何故このような事をしなければならぬのか、彼女自身には分からない。だがそれを、彼女すらも目的が分からない……否、確信を持てないという事を衛士には伝えてはならない事くらいはミシエルには理解できていた。

そうしなければ衛士は誰を憎めばいいのか分からなくなる。一度も姿を見せない卑怯な奴等だと吐き捨てることは出来ても、結局怒りは、悲しみは燻って彼の精神を蝕んでしまう。

だからせめて、中継点である私に全てをぶつけてくれれば。彼女はそう目論んでいた。

背後には組織がある。幸い衛士はそれに気付いていないから……と。

「試練中は、一時的に善行数の確認が不可能になります。しかし良い事をすればしっかりと数は減っておりますのでご心配なく……。試練の内容は、免許証に表示されますのでご確認ください」

衛士はもう相槌も打たない。ただでさえ滅茶苦茶に掻き乱された感情の中では、まともな事が言えるわけでもなかったから。

ミシェルはそれと、と口にしながら振り返る。彼女の顔には先ほどのような艶やかな笑みが浮かんでいた。

「ゆっくり眠りたいのなら……添い寝は必要ですか？」

「話が終わったんなら、出てってくださいませんか？」

「あら、残念ですね。ならせめてこの状態で、〇時三〇分まで時間を戻しましょう……では、またお会い出来ることをお祈りしています」

「ああ、オレもですよ」

「ふふ。それではまた——今度は、頑張ってくださいね」

彼女が指を鳴らすと——瞬時にして、彼女の姿は消え去っていた。衛士は膝に肘を乗せる体勢で時計を確認してから、うな垂れる。

彼女が口にした通りの時刻にまで、時計の針は巻き戻っていた。

最後の台詞が妙に胸に引っかかったが、衛士は気にする余裕もなく立ち上がり、電気を消し、テレビの電源を落として寝台に横になる。

もう何かを考える力はない。色々と衝撃的なことがありすぎて、とても頭が付いていけていなかった。

静かに瞼を落として、心を無にする。せめて休息だけはゆっくりと満喫したかったから。

『二四時間以内に十の善行をこなすまで有効』。

朝起きて免許証を見ると、本来善行数の残りが刻まれていた部分の文章が書き換えられていた。そしてその下には既に十六時間五八分と表示され、その数字はただのプラスチックカードの筈であるの

にも関わらず、常時減っていった。気が付くと残りが五八分から五分になったいて、どうやらこれが時間制限タイムリミットなのだと理解する。

ついでに写真は衛士もので変わりが無いのだが、写真の中の彼はピースの要領で指を三本立てている。これが、残りの死ぬる回数を示しているらしい。

第一の試練だ。

衛士は理解し、舌を打つ。

——学園に通うための支度が終わると、家を出た。時刻は七時五〇分である。

「エージが早起きなんて、雨でも降るんじゃないの？」

傘を差して並んで歩く理恵は笑いながら肩を叩いた。揺れて、傘から落ちる水滴が腕を濡らす彼女が構わず、といった様子であった。

「降ってるよ。今朝、もう梅雨に入ったって言ってたし」

眠っている彼女を起こし、朝食の後片付けをし、風呂掃除をして洗濯物の手伝いをこなし、トイレを掃除した。免許証を見ると残りは既に五つにまで減っている。

しかし、奇妙なことにそれが嬉しいことであるとは思えなかった。自分が、少し早く起きれば出来る孝行がそこにあったのにしていなかった事がわかった事もあったが、何よりも、強いられなければやらない自分に嫌気が差したのだ。

何も、自分が超絶的に善人だと言う事ではない。少なくとも、出来る事はやってきたと思っていた矢先にこんなことであるからだ。

さらに昨夜の事もまだ頭の中で引きずっていて、心の中には深いモヤがかかっているような状態だった。

こんな心情が表に出なければ良いとは思うが、実際理恵との受け答えも比較的日常通りであり、彼女の反応もいつもと変わらぬので心配は不要だと領いた。

「でもなあ——」

彼女が何かを口にする中で、衛士は彼女に横目に背後から接近す

る車に気付き、傘を天から車道側へ向ける。と、間も無く通過した車が弾いた水溜りが彼の傘に飛びかかり、果たして彼らは理不尽な水災害から守られた。

衛士が何事も無かったように傘を差しなおして歩を進めるが、傍らに付いて離れなかった理恵の姿が失せている。振り向くと、口元を押さえ驚愕の表情を見せる彼女が数メートル後ろに居た。

それから転ばないようにゆっくりと駆け寄ると、嬉しそうに笑って肩を小突いた。どうやら、衛士の心遣いがこの上なく嬉しいようだった。

「何よ、どこで覚えたの？ そーゆーの！」

言いながら彼女は足元の小石に足をとられて前のめりに転ぶ――が、衛士は傘を捨てて彼女の腹を抱くように身体を支える。

ほのかな石鹸の良い香りだとか、女性特有の柔らかさだとかを覚える暇も無く、衛士は彼女を立ち直らせ、呆然とする視線をよそに傘を拾いなおした。

その行動がとてつもなく嬉しかったのか、彼女は傘を畳んで衛士の腕を抱きつくように飛びついた。

「ちょ、おい！ 狭いから自分で傘させよ！」

「いーじゃないのよ。姉弟きょうだいでしょ？」

「狭いからつつてんの！」

しかし、まだ高圧的な態度で見下されるよりは遥かにマシだった。衛士は、年上であるものなまだ無邪気な態度で接する彼女に僅かでありながらも精神的に癒され、疲れが吹き飛ぶような思いであった。

道を進み駅に出る。するとそこから学生の数が増殖したかのようが増えていた。

衛士はさすがに恥ずかしくなって彼女を引き剥がそうとするが、距離をとったら距離をとったで意固地になって傘を差さないものだから、仕方無しに相合傘の形態を維持することにしてやった。無論、腕に抱きつく事に許可した覚えはないのだが、否応なしのものだった。

たから仕方が無い。

周囲の注目と舌打ちとを一身に受けて学園に到着する。その頃になると、小雨程度だった雨は本降りのように、白い線となって視界を遮る強い降雨となっていた。

「それじゃまた帰りにね！」

階段を上り、二階部分で理恵と別れる。そこは三年生の教室がある階層であり、衛士が日常を過ごす空間はその上の階層にあった。

元気の良い背を見送ってから、衛士は大きく息を吐いて手すりに寄りかかる。

どうにも今朝から身体の様子がおかしかった。思考は正常かもしれないが、身体が酷く怠いのだ。

感覚が肉体に反映されない。指先の感触が鈍くなるような、全身が痺れてしまったような感じが全身を占めていた。

起きているのに夢の中に居るような感覚、というのが最適かもしれない。衛士が見る全てには現実感だけが削がれていた。

起床時はそれほどでもなかった倦怠感が、学園に到着する頃には全身を満たしていた。緩慢な動きでしっかりと階段を上る衛士の傍らを、一体何人の生徒が追い越していったのかわからない。少なくとも中学時代に左足を複雑捻挫してしまった際よりも、動きは鈍かった。

足を止めてしまえば階段を上ることにすら挫折してしまいそうである。その最中に、ポンと軽く肩を叩く影は、すぐ隣で足を止めた。

「よおエイジ……ってどうしたその面ア！？ 真っ青じゃねえか！」

「耳元で喚くな。今頭痛が痛いんだ」

「お前の頭は可哀想だな」

——畜生、こんな時に限って風邪を引くだなんて。

衛士は心中で毒づき、記憶を蘇らせる。この試練が失敗した時のペナルティは一体なんだったのか。

——しかし思い出せず、もしかすると伝えられていないのではな
いかと思えてきた。否、事実ペナルティは告げられていなかったの

だ。ならばペナルティは課せられないのだろうか。

答えは、否であろう。しかし、奇妙に胸に引っかかるものがある気がした。

「山田、風邪引くぞ」

濡れた髪は、だが短髪であるからこそあまり変化は見られず、より爽やかさが際立っていた。水も滴る……といった諺ことわざがあるが、彼ほどまで似合った人間は余り見た事が無い。

衛士はそう言いながらバッグから取り出したタオルを彼へ突き出す。衛士は幸い、理恵が小柄であったために濡れずに済んでいるから無用の長物であったのだ。

彼は無言でタオルを睨んでから、短く息を吐いて受け取った。

「人の心配も良いけどよお、たまには自分を心配してやれよ。ま、タオルは助かったけどな」

「イーだろ。善人に生まれ変わったんだよ。目指せ聖人君子、だ」

息も切れ切れ、衛士は数分かけてようやく階段を上りきる。隣の山田は心配するように背に手を添えるが、反射的に吐き気を伴う気がしてそれを払いのける。それから重い足取りで教室へと向かう、その最中。

衛士の隣のクラスから顔を覗かせた一人の少女がこちらに気付くと、笑顔で手を振って駆け寄ってくるのが見えた。

「トキイッ！」

遙か手前で踏み切って両足で綺麗に飛ぶと、同時に閃くスカートが中身を露出させる。純白のショーツには子どもらしい犬の柄が、犬だけにワンポイントとして描かれる可愛らしいものだったが、衛士はそれを視認する余裕は無かった。

幅跳びの要領で着地する彼女は、栗色の短い髪を乱舞して跪く体勢から立ち上がる。途端に大きな瞳が輝くように衛士を捉えていたが、彼は彼女の相手をする事が嫌だった。好意をもっているわけではないが、のろけられるのが精神的に負担となるからである。

「アンタも随分と幸せな——ってどうしたのよその顔ォ!? 真っ

青！ 息してない！」

「……山田、蹴散らしてくれ」

「だそうだ。中村さん、話は後で聞くから」

「やだ風邪？ トキ、風邪を伝染したら病原菌扱いするわよ」

「うっさい中村菌」

「ト菌の癖に」

「オレは角に為り得る逸材だ」

それを捨て台詞にして、かくして衛士は教室へと無事到着したのである。

肩で息をしながら財布を取り出し、免許証を確認する。と、善行ノルマは残り二つにまで減っていた。

「おい山田、タオル返せ」

ならば、後少し頑張るだけで第一の試練は終わりだろう。そうすれば、少しでも長く休めるはずだ。今夜ゆっくり休めばさすがに風邪も治るだろう。

衛士は額に手を当てながら俯く。幸いアルバイトは水曜日から日曜日までの連続であるために、本日と翌日は休めるのだ。こればかりは、不幸中の幸いというものであった。

流石に早退すべきだろうと言った考えも頭の隅に湧いてきたので、衛士はせめてこの試練というものを済ませてから帰宅しようと計画立てる。いくらなんでも、これでは授業に支障が出るどころか日常生活もまともにこなせないレベルであるからだ。

荷物を置いて近寄ってくる山田は衛士の頭にタオルをかけてから、その前の席に腰を落とす。するとそう間も無く他の親しい友人が一人、集合する。

「おはよ、二人とも」

「おう、葉山^{はやま}」

「おはよう」

散切り頭の彼はまだ顔立ちが幼く、身長も低いことも手伝ってか中学生程度の容姿を持っていた。それ故に、可愛いと女子生徒にも

てはやされて、衛士と山田はそんな彼を羨ましく思っていたのだ。

真似しようにも真似できない天性の容姿。さらに山田は好青年と来て、類は友を呼ぶとは言うが何故自分が呼ばれたのか、衛士は理解できなかった。

「どしたの？ エイジ君顔色凄いい悪いけど……風邪？」

「そうそう。休めばいいのによ」

「今日何かあったっけ？」

「日替わり定食が生姜焼き定食」

「風邪じゃ食べられないでしょ。エイジ君、ちゃんと考えて行動しないよ」

「っせーな。オレは脳を食欲に汚染されてねーって」

好き勝手に、冗談交じりに論してくる彼らにほのかな笑みで返してやると、二人は少しばかり安心したように表情を緩めた。

衛士は痛みを覚える関節を無理矢理駆使して頬杖を付くと、それから微笑だけを浮かべて葉山に視線を投げた。

「そうだ、葉山。お前何か今、困ってること無い？ 出来れば二つくらい」

「エイジ君が辛そうで見てるこっちも辛いことかな」

「違う。オレが解決できそうなことで」

「先月貸した漫画返してくれると嬉しいな」

——何か借りたっけ？

衛士は彼に言われて眉を潜める。やがて記憶に蘇るのは、先週返そうと思ってカバンへ突っ込んだまま放置していたことだった。短編集だったから重さが然程変わらなかった故に、忘れてしまったのだらう。

衛士は慌ててカバンを取り出すと、その中から一冊の漫画を手に取り、彼に差し出す。ついでに貸そうと思っていた、同著者の傑作を二冊、机の上に叩き出した。

「すまん、忘れてた。それと面白いのみつけたから、貸そうと思っ
たやつ」

「えっ、これって絶版のヤツじゃなかったの？」

「古本屋にあってさ……」

「うっわ、本当に！？　ありがとう、早速読むよ！」

本を抱きながら小躍りをし始める彼を確認して、衛士はほっと胸を撫で下ろした。まるで大仕事を終えた後の、緊張の弛緩した瞬間のようだった。

途端に脱力して、気が抜ける。コレで休めると、衛士は席を立った。

「悪い……やっぱ帰るわ。本降りだけど、帰るだけだし問題はないな」

「おいおい、倒れるなよ？　送っていこうか？」

「かえって気疲れするからいい」

正直喋るだけでも体力を要する。衛士はそれだけを口にしてカバンを肩にかけると、机にかけた傘を手にして彼らに背を向けた。

頭も痛くなってきた。足を前に進めているのに、殆ど自分で動かしているという感覚が無かった。

——教室を出ようとするところで、不意に現れた影は止まる事無く胸に飛び込んでくる。その衝撃によって体勢を崩して倒れそうになったが、衛士は必死に手を伸ばして壁に張り付き、何とか姿勢を保つ。と、胸板に鼻を強打したのか顔を押さえる少女は、上目遣いで衛士を睨み——はっとしたように、眼を見開いた。

綺麗に縦に巻かれた金色のロール。青藍色の宝石のような瞳。見覚えのあるようで一切無い、その制服姿はどうやら早乙女美琉であるらしかった。

「と、トキ……エイジ、さん……」

「はは、クラスメイトの名前も忘れたのか？　じゃあな」

他人の事は決して言えた義理ではない彼は自分を皮肉るような台詞を吐き捨てて彼女を片手でどかす。美琉がこのクラスにおいてどれほどの信頼を持ちどのような地位についているかはわからないが、今の衛士はともかくそれどころではなかったのだ。

だから、彼女が結局何も言わずに見送るのを背に感じながら、衛士は教室を後にした。

最早誰を気にする必要も無い。衛士は心許ない足取りで、まるで手探りのように廊下を歩く中で再び免許証を手にとった。

すると残りの善行数は見事に○になって――。

『二四時間以内に十の善行をこなすまで有効』という文章は間もなく薄くなって、完全に消え去った。時間を如実に減らしていたその時間制限もいまや綺麗さっぱり、といった現状だった。

しかし……。

「は、はあ……っ!？」

再び文章が浮き出て、再び、タイムリミット時間制限が刻まれ始めた。

『五分以内に頬を殴られるまで有効（砂時計の使用は無効）』と、そこには表示されていた。

これにばかりは、流石の衛士も心の底から疑問符を浮かべざるを得なかった。そもその目的が分からぬこともそうだが、何故こんな試練を課すのかが不明すぎたのだ。

さらに、この体調でそんな事をされれば本当に昇天しかねない。

その上彼を追い詰めるのはその短い時間だった。

今度は免許証にはコンマ秒までが表示され、如実に、堅実に時間を減らしていくのが見て分かる。どんな構造なのかが激しく気になるが――故に焦燥感は一層立ってられて、衛士は全力疾走で教室まで駆け戻っていった。

飛び込むように教室の中に入ると、いまだ先ほどの席で談笑する山田と葉山の姿が確認できる。衛士は助かったと、迷わず彼らの元へ肉薄した。

二人は驚いたように衛士を見つめるが、やがてその真剣味を帯びる表情に、何かを悟ったようだった。

「オレの頬を殴ってくれ!」

――息が苦しい。オレは一体何をやっているのだろうか、どこかへ呼び戻そうとする声が何処からとも無く聞こえてきた。

「な、何言ってるんだよエイジ」

「いいから、何も言わずに——」

言い切る前に、鳩尾に拳が鋭く突き刺さる。圧迫される肺が孕んでいた空気を全て吐き出させ、浅い呼吸だったこともあって間もなく酸欠になる。意識は打撃によって確実に削ぎ取られていた。

「ば、……ちがつ——」

力強い打撃はその箇所だけではなく、内臓を貫くような衝撃を与える。前に倒れ始める身体を全身で支えるように、もたれかかる衛士を抱くようにして彼は清々しい笑顔で山田に向いた。葉山はふう、と一息を吐いてから清々しい笑顔で頷いた。

「保健室に運ぼうか」

——意識を薄れていく衛士がそれでも手の中に握り続ける免許証の時間制限は、その中で刻々と減らしていく。

しかし、と衛士は不意に感じる悪寒を覚えて意識を集中させた。

——何か、途轍もなく嫌な予感がする。この感覚に覚えがある。この痛みが、苦しみが、以前一度味わったような……そう、既視感デジャヴと言うべき感覚だ。吐き気を催す以上の、嫌悪感。ダメだ、もっと考えろ。深く、意識を集中させろ。

何だこれは。この感覚——記憶が混迷している？ 覚えがある、と言う事は以前に経験したと言う事……しかし、風邪を引いたときはいつでも家で大人しくしていた。いや、そもそもこれはそんなに前の出来事では無い気がする。もっと近い、つい先日のような出来事——。

砂時計……いや、関係ない。今日は使用すらしていない。ならなんだ、この異常なまでの不愉快さは。

あと少しでたどり着けそうな気がする。そうだ、これは昨夜目が覚めたとき、自分が自室へ戻るまでの記憶が失せていたときのような不快感だ。自分のことなのに、まるで人事のような……。

もしかしたら、時が——そうだ、時間が。砂時計のように、その繰り返すことを理解しなければ記憶を持ち越せないんだ。

時間は繰り返している。恐らく、多分、確実に。

最低でも一度、この五月二三日は経験しているはずである。

まず起床時間から考えよう。記憶によると一度〇時三〇分に起きている筈だ。

それ以降は恐らく今日体験した全てと同じであると考えて間違いは無いだろう。違うのは、時間を巻き戻されずに済んでいるという点である。しかし、もしかすると今日五時に目を覚ました以降の展開と全く同じかもしれない。

だとすると、あまりにも情報が少なすぎる。考えるには全てが足りない。

何かが掴めそうなのに掠りもしない。目的のものが硝煙越しに見えているようだった。

時間が繰り返しているという裏づけが全く出来ていない。確証があるのに説明できない苛立ちが衛士の全身を強張らせた。

なんだ。何の情報が足りない。時が繰り返しているという前提で物事を考えて、それを説明するのにどの記憶について考えれば正しいのか。

知らないのは、丁度五時に目を覚ました際に記憶に無かった――〇時三〇分から五時までの情報。

そして五時に起床したとき、強制的に〇時三〇分に時を戻された。さらに戻されてから五時までを過ごしたオレの行動が、恐らく”前回”と同じようだったからこそ、然程気にも留めなかった。

時間の回帰を説明するならそこに突っ込めば良いのだろうか――。ダメだ。何かが引かかる。もう少し、あと少しであるはずなのに。

短く息を吐くと、ふっと意識が大きく揺らぐ。衛士は慌てて現実、思考に集中するが、一度弛緩した意識は容易には引き戻せない。衛士は徐々に考える力を低下させ、共に全身全筋肉を脱力させた。異常なまでに簡単に薄れた意識は消滅し――衛士がその次の試練を確認することは、その世界では決して無かった。

落下する夢から醒めないと永遠に目を覚ますことは無い、といった迷信がある。衛士はよくそんな夢を見て飛び起きた朝は、自身の生に歓喜していた。

しかし彼が目を覚ました早朝にはそんな喜びは存在せず、ひたすら嫌悪感だけが胸に渦巻いていた。

部屋の中はまだ暗く、宵闇の中から聞こえる雨音だけが耳に心地よい。されどそこから流れる冷気は衛士から体温を奪い、衛士は気怠げに身体を起こして、寝台から落ちている掛け布団へと手を伸ばした。

大きく欠伸をして、枕元の携帯電話に何気なく手を伸ばす。

その直後に携帯電話は着信音を掻き鳴らした。衛士はソレに驚きながらも、特に何を考えるわけでもなく開き、通話ボタンを押して耳に当てる。

『おはようございます』

――透き通るような女性の声が、頭の中に染み渡る。今起きたばかりと言う事もあってまともな返答も出来ず、あうあうと口をパクパクさせる事しか出来なかった。

しかし電話の相手はそれも構わず言葉を続ける。一方的に時刻を告げる時報を思わせる淡々とした口調であった。

『只今からお伺いいたしますので、心の準備を致して待っていてください』

それだけを告げる相手は、一方的に通話を終わらせる。

ぷつりと切れると、呆氣にとられる暇も無く、次の瞬間――照明が部屋の中を照らし、部屋の真ん中、衛士に向いて立ち尽くす一人の女性が現れた。

透き通るような金髪は肩より少し下程度の長さに止まっていて、薄く微笑まれる目は優しさと同時に厳しささえも携えているようだった。

——ズキリと、頭の芯が鈍く痛む気がした。

何かを言わなければならないような気がした。怒らなければ、悲しまなければならぬような気がした。

しかし全ての感情は通り過ぎて、心は不思議と落ち着いている。まるで全てを悟っているかのような気がした。

衛士はそれでも、これから何が起こるのか分からない。頭の中は冷め切っているはずなのに、心臓はまるで初めての事のように緊張して鼓動を早くした。否、その実初めてのことなのだから仕方もないだろうと、衛士は頷き、彼女の眼を見据える。

ミシエルは微笑んで、何も言わずにそっと衛士の寝台に腰掛けた。彼はその真ん中で横になっている身体を起こしているだけの状態である。彼女は身体を軽く捻るようにして彼へと顔を向けると、陰のある笑顔を見せた。

「早朝から申し訳御座いません」

彼女はそれから寝台の上によじ登ると、無表情で見つめる彼の額へそっと手を伸ばした。

柔らかな女性の手のひらが優しく触れる。ほのかな冷たさがほてる顔を冷ますようだった。

豊満な胸は重力によって下に引っ張られて強調される。四つんばいになるその身体は色気をかもし出していた。

「やはり、風邪を引かれていますようですね……。少し熱があります。こればかりは私の手には負えません」

「何の用なんです？ それだけを言いに？」

彼女は風邪だと言うが、衛士にはその自覚は無い。倦怠感も無いし吐き気も無い、視界は常に正常だし、熱といってもこれが平熱だと彼は言い合った。

ミシエルはそんな彼にクスリと口元に手をあて笑うと、衛士もつられるように表情を緩める。

平和な時間が流れ始めていた。

「貴方が頑張っているのに、私が泣き言を言える訳もありませんよ

ね……。実は、貴方はこれから五つの試練を――」

彼女の説明は、どこかで聞いた覚えがあった。初めて買った本なのに次が容易に想像できて、まるで読んだことがあるように予測できるようなほど鮮明に覚えていた。台詞は違うものの、大まかな内容は変わらず、衛士はただ素直に頷いた。

時間が過ぎるのと一緒に忘れていたものが蘇るようだった。

彼女の頬が上気するように朱に染まるのが分かる。

衛士は確実に、自身が居間で気絶してしまった頃よりも大きく自分に変化していることに気付いていた。

しかし具体的に何がどう変わっているのかは分からない。だが、つい先日まで、誰かが傷つくのを目の前で見て、さらに自身が死んだ要因となったといっても過言ではない彼女のことを、許しているのだ。

もう責められない気がする。否、もう彼女のせいには確実に出来なかった。

――なぜそう思うのかはわからない。だがそれによって考え直すと確かにそうなのだ。

彼女は確かにいくつかの危機を操作して現実に反映させる力を持っているのかもしれない。だが実際にそれをどうするか、乗り越えるか避けるかをするのは自分自身であるのだ。

言ってみれば、自分の無力を棚に上げて怒りしているようなものだった。どれも、砂時計をうまく使って未来を体感すれば、無傷のまま、心安らかなまま解決できたものばかりだったから。

「今日は、何回目なんです？」

深層下の意識が衛士の油断を縫って言葉を口にする。そんな台詞に彼女は驚いたように笑みを引かせてから、少し言いよんどんで身を引いた。

――早乙女美琉の父親との対面直後に気を失った衛士は、それから一時間経った頃に目を覚ました。テーブルに伏せる、といった体勢に無理があった故に長い時間睡眠にふけるというのは不可能だっ

たようであつた。

彼はその後入浴をし、美琉のふてぶてしい父親からの電話を経て眠りに付いた。

それまでの記憶は、衛士の中には確かに存在していた。しかしその後はない。つまり、薄々は理解していても、現在から先の、未来の記憶は掴めていない。見た夢を忘れてしまうような、脆い記憶は時間が経つごとじっかりと消滅していった。

——幾度とも無くあつた不毛なやり取りは、今回に限って行われない。

それに驚くミシエルは胸の奥底に複雑に広がる感情を押さえ込んで、目頭が熱くなるのを、鼻の奥にツンとした痛みが広がるのを覚えながら、そつと顔を上げた。

自分の顔は今情けなく感情を表していないだろうか。無意味に彼の心を揺さぶつてはいないだろうか。

彼女は考えながら、その場に正座になって衛士の、少年から青年へと移り変わる精悍な男の顔を見据えながら口を開いた。

「少なくとも、自力で時間^{タイムリープ}回帰を理解し、そこに自分の記憶を乗せる事が出来る程は繰り返ししました」

——ミシエルとの会話を重ねるたびに、一つ記憶が蘇る。と、幼い風貌には似つかわしい強靱な拳を放つ葉山に穿たれた腹部の痛みを思い出した。

焦燥に似た何かを急かす。何か言わなければならぬ気がしたのに、その言葉を頭の隅で思い浮かべたはずなのに——喉から言葉は出ず、不器用に口を開けたまま、眉をしかめたまま衛士は彼女を見つめることしか出来なかった。

「私は、予想以上に貴方に過酷を強いているのかもしれない」

「……いえ、もう分かりましたよ」

彼女はわざとこういった態度をとって衛士の気を引き、全ての負の感情を消している。そう考えれば話は早く簡単であろう。だがとても彼には、そう単純な見方は出来なかった。

砂時計一つで五分間もの時を戻せる代物を与え、さらに容易に幾度も時間を巻き戻せる。異常な事だ。言葉だけでは到底現実のものとは思えないほど。

だから衛士はそれを使ってからようやく理解したのだ。今回とて、砂時計のものとそう大きく違ったわけでもない。時間が巻き戻る要因としては免許証の時間制限タイムリミットが関係していることは確かであり、その数値が砂時計の砂の代わりになっていることは明らかだった。

そんな能力ないし技術を、個人だけが有していてさらに衛士だけに分け与える筈も無い。

故に、その背後関係を想像するのは殆ど自然な事だった。

もしかすると、そんな事を考える事さえも予想してそういった風に立ち回り、そう言った言動に出ているのかもしれない。しかし、そこまで考えてしまえばキリがないのだ。

だから衛士は自分が信じたいミシェルだけを信じた。自分がやるべきことだけを見据えるようになっていた。

「思い出しましたよ。オレは、三つ目の試練まではこなしました。十の善行。迅速に頬への打撃を受けること。砂時計を使用して他人の危機を五回救う……。どれも大変でしたね。試練、というには大袈裟かもしれませんが」

それでも全てを一日の内にこなしたのは、衛士自身誉めて然るべきであった。最後の最後で意識が朦朧とし、四つ目の試練を確認する事無く気を失って時間制限が来てしまったのは悔やむべきことであつたが。

徐々に記憶が鮮明になってくる。ソレに伴うように心が澄むようにして完全な冷静さを形成していくのが手に取るようにわかった。

「私には、試練の内容を決める権利はありません……」

「もう覚悟は出来ました。何よりも、今の時点で記憶を引き継げるのはとても大きいです。ははっ、ミシェルさんの胸よりも」

暗くなりつつある空間を、重くなりつつある雰囲気吹き払うように冗談交じりに笑ってみると、途端に彼女は顔全体を朱色に染め

上げた。それから身体を抱くようにして胸を隠してから、くすりと朗らかに笑う。

空間は平穏にもどりつつあった。

衛士は大きく伸びをしてから立ち上がり、ひよいと寝台から飛び降りる。風邪は未だ肉体を侵食せず、健康体のままだった。

「エイジさん……私は――」

「いや、いいですよ。何も言わなくて。だって、オレと一緒に知らないでしょ？　どんな試練が来るか。オレと違うのは記憶と肉体を時間回帰に飲み込まれないように出来ることだけで。あと時間操作かな」

「私は貴方という人を、甘く見すぎていたのかも……しれません。今私が見るトキ・エイジさんは、とても強くなっています」

「自分の危機に対して本気になっただけです。そう。だからコレからが本番だって事」

「私はただの傍観者で、貴方を支えることは出来ません。でも――」
「いえ、もう十分なほど支えてもらってますよ。ミシエルさんが居るっただけで、オレは凄く心強いですから」

そして、気のせいであれば衛士は酷く恥ずかしい思いをするのだ
が――ほのかな好意を感じていた。

本当に衛士の事をなんとも思わずに傍観者の立場を貫くのならば、明かにどうみても個人的な会話であるコレは慎むはずである。

さらに会話の中で確信を得た背後関係。何と繋がっているか分からないが、すくなくともそれが存在することは理解できた。そして彼女と衛士が接触していることは無論それらも承知のことで、衛士の行動一つで彼女の生命が左右されてもおかしくは無いはずだ。

幾らなんでも、時間进行操作する、出来るという情報が、その砂時計の存在が軽いわけが無いのだから。

何か、目的を持って衛士を計っている、ないし育成しているのだ。ミシエルはその駒に過ぎず、衛士も選ばれた駒でしかない。
だから――。

「今は甘んじる」
だけど。

「宇宙人だか神様だか、オレには分からないけどな……気に喰わないんだよな」

もう決めたのだ。

与えられたものは全て受け取る。だからソレに見合ったほど強くなるのだ。

強くなって、もうミシエルに心配を掛けぬほどに立派になる。周囲で困っている人間も、砂時計などを使わなくても済むようになるほど強くなる。

そして、その末に――。

衛士は心に刻む言葉を飲み込み、息を吐く。

これでもうやることは決めた。次は行動に移すのみである。

――今まで記憶を持ち越せなかったから何も出来ずに風邪が悪化した。だからせめて軽減させるために、衛士はせめて薬でも服用してから眠ろうと考える。

そう思考した直後に、薄手のシャツ越しに伝わる体温が、背に触れる悶えたくなるほどの柔らかさが押し付けられた。吐息が首筋に掛かり、両腕を封じるように回される手は胸の辺りで交差した。

甘い香りがする。

頭の芯が熱を帯びる。

心臓が高鳴るのと同時に、全身から力が抜けるのを感じた。残るのは、辛うじて立っていられる程度の力である。

「ミシエル、さん？」

「エイジさん……少し私に、時間をください。このまま、もう少しだけ……」

彼女なら衛士から時間を与えられなくても、また過ぎた分だけ巻き戻せば済む。だが彼女はそれを望まず、衛士の時間を欲した。ミシエルは、彼とこうしたという時間を無かったことにしたくなかったのだ。

暗に、次は失敗するなど言っている様でもあった。どちらにせよもう一度この時間を繰り返すのは、両者にとって酷なことだった。同じ時間を何度も繰り返した彼らだからこそ、次が無い事を望んでいた。

まだ見ぬ未来を、二人は欲したのだ。

――徐々に世界は光に満ち始める。

鈍い灰色の空が明るむ頃、衛士は寝台に残る温もりを抱きしめる。彼女が居なくなってからその残渣ざんざに抱きしめ返すのは酷く滑稽であったが、それでさえも衛士の精一杯であった。

何度も繰り返したあの朝が、試練が始まるこの朝が、幾度目かの始りを見せた。

試練 一日目〜四日目

「姉さん、朝だよ」

品性の欠片も無く口を開けて端から涎を流す彼女の布団を引き剥がす。理恵は抵抗するように目を瞑ったまま手を振り回して失われた布団を模索するが、ソレを抱いて距離を取る衛士には死角が無かった。

やがて寒さを覚え、仕方無しに起き上がる彼女を見て衛士は布団を掛け戻す。自然で華麗な仕草は使用人を思わせる見事さであった。「もう！ 起こしたいの！？ 寝かせたいの！？ 一緒に寝たいの！？」

「起きろってーの」

喚く彼女の部屋を後にして階段を降りる。カバンを片手に軽やかな足取りで居間へと向かうと、味噌の香りが鼻についた。食欲をそそる様な良い香りである。

誰かに伝染^{うつ}してしまったように消えた風邪は気配も肉体には残らない。衛士は食卓に並べられた朝食に腹を鳴らしながら席に着く。母に姉を起こしたと告げると、彼女は驚いてから、珍しい、と誉めてくれる。

やがて父親も正面の席に着き、視線をテレビのニュースに向けていた。

——理恵が不在のまま朝食が始まる。舌が火傷してしまう温度の味噌汁を飲むと身体が温まり、弱い胃腸が低温から守られる。目玉焼きは良く焼かれ半熟になっていないのは父親の嗜好である。衛士はそれを茶碗に乗せて、醤油をかけ井風にして食す。目の前の父はそれにマヨネーズをかけていた。

それからややあって、食事も既に半ばを過ぎる辺りで理恵が居間になだれ込む。その姿には、もう寝起きの間抜けさは存在していなかった。

――暫くして、食器を洗い、部屋の一室に洗濯物を干す手伝いをし、風呂を洗い、便器を綺麗に磨き終わる頃には時刻は登校しなければならぬ時間にまで迫っていた。

全てのやるべき事を終えた彼は、出かける前にトイレに寄る。其処で確認するのは免許証であり、やはりそこに刻まれるのは第一の試練であった。これまでの記憶が全て残っている衛士にとって今までと違うのは、これ程まで落ち着いている心と、ある種の諦観に満ちている事。それと記憶の継続と、風邪が完全に治ったことである。

未だ背に覚える温もりが元気をくれる。不可能であることが全て可能に書き換わったようだった。もう自分には出来ないことなど何も無い、そんな満ち溢れる自身を胸に抱くと、ふと昨夜の事を思い出して頬が上気したように赤くなる。

あの後の事を説明するならば――ほのかに期待していた事は何もしていない、というのが本当のところである。だが、だからこそ絆が強くなった気がした。信頼関係は果たして結ばれたのだ。

ミシエルと顔を合わせたのは今までで僅か二回。だが実際には両手の指では数え切れないほどの数を出会い、そして衛士はその半分以上を身勝手に自身の鬱憤を晴らして終えていた。

――だがそれも終わりだ。

彼女とは分かり合えた。もう迷う事など必要ない。今は突き進むだけだ。

誰のためでもない、自分の為に。

そして自分の為になったことは、自然に誰かのためになる。否、誰かのためにする。

衛士はトイレを後にして、理恵と共に家を出た。

時刻は八時少し前、七時五〇分の出来事である。時間制限まで、ゆうに十六時間十分残っていた。

「なーんか、今日のエージはムカつくくらい爽やかよね。雨でも降るんじゃないの？」

「もう降ってるっつーの。姉さんはギリギリまで寝ててテレビも見ないから、梅雨に入ったって事も知らないんだろ」

広げる傘にパラパラと小雨が弾かれる。風情が溢れるな、と穏やかに考えながら傘を車道側に倒す。既に音や気配から察知せずとも身体に、どのタイミングで動けばいいか理解できてしまっていた。

間も無く通り過ぎる車は、その過程で水溜りをタイヤで弾き、飛びかかる飛沫はしかし予測された行動である為に、衛士の傘によって防がれてしまう。少しばかりの衝撃が腕に伝わって、余韻がなくなったところで何事も無かったように傘を差し直した。

傍らで口元に抑え切れない笑みを浮かべたまま並ぶ理恵が、軽く肩を小突く。衛士はそれに抵抗しつつも、彼女の変わらぬ台詞を受け流した。

それから余所見をしているが為につまずく彼女の身体を支えて、足に不自由を持つ人の介護をするように丁寧に姿勢を直させる。将来は介護士にでもなろうかと考えたが、姉の世話ですらこれほど手一杯になるのだから不可能だろうと諦めた。

そもそも誰かの世話をすることは、然程好きでも得意でもない。高齢者からは愛嬌が無いといわれ、子供からは懐かれぬ。どうしようもないではないか、と心の中で嘆いては見るが、なにやら虚しくなってきた。

短い嘆息をすると、抑え切れぬ喜びや嬉しさを身体全体で表現する理恵が腕に抱きついてきた。傘を畳んで腕に掛けている彼女は、衛士との相合傘を所望しているようだった。彼は呆れるように首を振ってから、抵抗も拒否もせず、やがて通り過ぎる駅前では表面上は冷静を呈して歩みをすすめた。

制服姿が増える時間帯である。注目されるのは必至であり、こればかりは慣れないのだ。

実の姉弟だと言っても理恵は美人の類であるし、女性であることには変わらない。

その柔らかな感触が――理恵には失礼かもしれないが――ミシエ

ルを脳裏に蘇らせる。

優しさが、あの甘い香りが、頭の芯が溶かされるようなどうしようもない、麻酔のような感覚を思い出して反応してしまうのだ。

これが恋というもののなのか、絶大な母性に触れたが故に依存しかけてしまっているのか分からない。

昨夜の事を思い出して――首を大きく振って、気を紛らわせる。

頬が薄桃色に染まるのが抑え切れず、理恵は腕に抱きつきながら微笑んでいた。そんな理恵に複雑な後ろめたさを覚えながら、やがて二人は学園へ到着した。

――これからが大変だと言う事がわかっているのに、どうにも頭の中にはお花畑が咲き乱れる。恐らく第四の試練はそれ以前とは全く別物といっても良いほどのものだろう。場合によっては死さえも覚悟しなければならぬ。

この試練と言うものを考える者の思考は一切想像できず、予測できない。だからこそ恐怖を覚え、だからこそ気分は高まる。

予感がする。ミシェルが誉めた衛士の危機を読み取る直感が告げているのだ。

――未知に抗え、と。

未来は須らくして未知である。そして人は知らぬことに介入する性質を本質的に秘めている。知的生命体たる所以であった。だが同時に恐怖を覚えるのもまた仕方が無い事だろう。

怖いものは、怖いのだ。

「それじゃまた帰りにね！」

ホームルーム棟二階で理恵は元気に手を振りながら、階段の踊り場からは死角になる廊下の奥へと姿を消した。衛士は短く息を吐きながら、軽やかな足取りで三階を目指す。それは何度も繰り返し今日の中で初めての行動であり、それ故に未来が変移するのを肌を感じていた。

通り過ぎる生徒達も、注視すればその殆どが違うことに気がつける。達観している自分に少しばかり酔いつつも、残った三つの善行

を積むために教室へ向かった。

やがて、一分も要さずに階段を上りきる。衛士は短く息を吐きながら左右に広がる廊下の右側へ足を向けた。廊下の正面にはなにやら、クラスの壁面に何かが張り出されているらしく人だかりが出来ている。しかし彼は特にこれといった興味を持たずに素通りした。

廊下を歩いているとやがて自分のクラスに近づくが、その手前のクラスに入り込もうとしていた一人の少女が視界に衛士を収めたらしく、ぴたっと立ち止まったかと思うと、確認するように彼へと顔を向ける。途端にその顔には笑みが満ちて、身体は入りかけた教室から引き抜かれ、軍人さながらの綺麗な方向転換を行って駆け出した。

「トキイツ！」

衛士の数メートル手前で幅跳びよろしく飛び上がる彼女は、ひらめかせるスカートの中身も気にせず宙を滑る。彼はさすがに恐怖を覚えて大きく飛び退くと、その直後に彼女は衛士が先ほどまで立っていた場所に着地した。

間一髪、と言った風に彼女は額の汗を拭うように息を吐き、衛士は鼓動の高鳴りを覚えて胸に手をあて、壁に手を沿えて倒れ掛かる身体を支えながら呼吸を整えた。無表情を極める彼であるが正直な所、凄くびっくりしたのだ。

「お、お前なあ……」

「トキ、アンタも随分と幸せ者なんじゃあないのよっ！」

「やかましい。自分の行動を省みてから喋りだせ。胸に手を当てて考えろ」

活発な少女は嬉々として語り始める。衛士はそろそろ来るであろう山田を夢見ながら、仕方無しに彼女の相手をすることに決めた。恐らく放たれるであろうのろ気話を予想する彼にとっては、たったそれでも苦渋の選択である。

「胸？　　っていうかいつも通りの行動じゃない」

周りを見ないから人にぶつかり、注意されるとお前こそ周りを見

ていないからぶつかるんだと反論する。そんな彼女だからこそ、以前階段から落ちかかると言う事もありえたのだ。そしてそれが悪いとも思わないのは、最早彼女の良いところなのではないかとさえ思えてきた。

流石に衛士がそれを助けたと言う事を知られて居ないだろうと少しばかり危惧していたが、やはり彼女は知らぬようで杞憂に終わる。そんな事を俄かに心に馳せていると、彼女はそんなことより、と両手に拳を作って、胸の前で前後に力強く振って強引に話題を変えて見せた。

力技だなあといいながらも、しっかりと彼は耳を傾ける。

「アタシは見ちゃったのよ。報道部に入ろうと決意した瞬間だったわ」

彼女はそれを前置きにして語り始める。話は今から土曜日の午後まで遡った。

——この間、日曜日に山田と遊びに行く約束をこじつけた為に服を買いに出かけた中村は、丁度駅前の百貨店内にあるブティックに訪れていた。そこで彼女は見つけたのだ。衛士と理恵が一見仲良さそうに服を選んでいた場面を。

彼女は興奮し鼻息を荒くしながら、頬を高潮させながら続けた。

「それで、さらに今日！ 丁度さっき！ アンタが理恵さんと腕組んで相合傘で登校してるのを見たのよ。そりゃもう、アタシだけじゃない。みんなにすごい注目されてたわね」

確かに、衛士が理恵と登下校を共にし始めたのはここ最近のことである。具体的に言えば、丁度二年に上がって少し経ってからの事であろうか。

一年時は彼女の計らいで、友達付き合いや周りの目を気にして少しばかり距離を置いていたのだ。そしていつしか家庭内でもやや距離を置くようになっていた。

きっかけは分らないが、再び距離を縮めた彼らは一見仲良く、理恵は衛士を都合の良いお手伝いさん感覚で日常を過ごし始めたの

だ。

「理恵さん”って、知ってんの？」

「知ってるも何も……あの優しくて凄^{ひと}い美人な先輩に助けられた人間は既に両手で数え切れるものじゃないわ。私はその内の一人よ。知る人ぞ知るって奴」

「……何か、そういった部活動をしてんの？」

有料でないことを祈るばかりである。もしくは、さり気なく金が要り様である事をアピールして募金感覚で金銭を受け取っている可能性も否定しきれない。

そういった事が思い浮かぶと同時に、彼女に情けなさを覚えるのが悲しいところだった。

「アンタ……。ごめんね、今すごい心の中で馬鹿にしたわ」

少しばかり背の引くい彼女は顔を反らして精一杯に見下ろす風に吐き捨てる。どうやらテンションがとても衛士には手がつけられない程度に高まってしまったらしい。

「何かに入部してるってのは聞かないけど、そーゆー性格の先輩なの！ アンタ、理恵さんのカレシじゃないの？ 知らないの？」

「……お前さあ、その”理恵さん”の名字知ってる？」

「馬鹿にしないでくれる？ 知ってるわよそのくらい！」

彼女は自身の興奮を抑える様に大きな深呼吸を一つ。

「時、でしょ！？」

「オレは？」

「トキでしょ？」

衛士は口にはせずただただ頷く。中村は彼が何を言いたいのだろうかと少しばかり顔を凝視した後、はっと気付いたように大きく口を開ける。同時にそれを隠すように、両手で口を隠すように押さえた。

「ウソおっ！？」

同様に頷くと、彼女は大きく一步後ろに退く。大きく見開いた瞳がその大きさをより強調させ、小動物を思わせる。彼女だけの時が

停止し始める頃、ようやく衛士の肩を軽く小突く衝撃がやってきた。
「よ、エイジ。何してんだ？」

「オハヨ。濡れてんなあ、タオル貸してやるよ」

衛士はジッパを開けておいたカバンからタオルを引き出して山田に差し出す。彼は少しばかりの遠慮も無しに受け取ると、それで豪快に濡れた頭や制服の水分を拭い始めた。その一方で、中村はようやく自身の世界から舞い戻る。

衛士は短く息を吐いた。

中村はようやく一歩近づき、山田は通行の邪魔になら無い様に壁際に寄りながら、衛士の頭に湿ったタオルを被せた。

——日常が衛士の肌を撫でて過ぎて行く。それは酷く生温い風のようにだった。故に熱くは無く、故に冷たすぎない。心地よい温度であり、今まで絶えず感じ続けていたソレである。

日常があるからこそ、生きている実感が湧いた。誰かがいたからこそ自分が死んでも挫けることが出来なかった。その衝撃も、その打撃も、心を揺さぶりはしてもヒビ一つ入れることすら敵わなかった。

「——あ、三人とも。何してんの？」

衛士のクラスの隣の教室、その土手っ腹辺りに集まって談笑する彼らに声を掛けるのは、幼さを前面に出す葉山^{はやま}であった。

それぞれはそれぞれなりに適当な挨拶を交わし、談笑に加わる人数は四人に増える。衛士は彼の姿を確認してからカバンに手をつっ込み、借りていた漫画を先に出し、それから葉山曰く”絶版で入手できる確立が極めて低い”漫画を差し出した。

続け様に起こる棚から牡丹餅のような幸運に彼は喜び小躍りをし始める。

——順調に、場面は違えどコレで善行は前回と同様に順調に終えたはずである。

「みんなもう中間テストの結果見た？　僕はこれから行くところだけど」

「アタシは人だかりが少なくなったところで見に行こうと思ってた」
「右に同じ」

「中村に同じ」

かくして彼らはそのまま道を引き返し、階段の正面まで歩き出した。

衛士はその最後尾に付いて、財布から免許証を取り出し——思わず足を止めた。

以前ならば、その免許証には『五分以内に頬を殴られるまで有効（砂時計の使用は無効）』と、そう表示されていた。そして今もそうである筈であり、そうであるべきであった。

しかし違う。だからこそ衛士は足を止めた。止めざるを得なかった。目の前には、断崖絶壁が立ちはだかるように。

全ての計画が蹴飛ばされて崩壊を起こし、踏み躪られたような感覚を覚えていた。

衛士は眼を見開き、入試の結果を確認しに來た受験生さながらに免許証の文章を何度も見返すが、そこに書かれるものが”五分以内”から始まる事は無かった。

『一分以内に地上十メートル以上から飛び降りるまで有効』と書かれるそれを握り、衛士は胸を高鳴らせた。タイムリミット制限時間はコンマ以下を高速度で回転させ、残り時間は既に三〇秒を切っている。考える暇は無い。だが足は根が生えたように動かなかった。

——指定は無い。だが砂時計は有効か？ 仮に砂時計が無効だった場合どうなるのだろうか。

衛士は考える。

時間は早くも十五秒を過ぎる。だが思考せずには居られなかった。——まず一つに、砂時計を使用したこと自体が無駄になり、五分が経過しても巻き戻らない。

まず一つに、時間が巻き戻っても、試練が達成されたことにならない。しっかりとこの直線上に伸びる時間軸に、オレが飛び降りたという事実を結び付けなければならないと言う事だ。

残り時間が十秒を切る。

衛士は横を向くと正面に到る、グラウンドを全望できる窓へと駆け寄った。手のひらをガラスに吸着させ、押して引く。が、何かが引っかかっているように窓は開かない。焦りによって心臓がやかましく弾み、呼吸が乱れる。手を伸ばして鍵を開けると、素早く弾くように窓を開け、ポケットから取り出した砂時計をサッシに叩き付けた。

残り五秒。衛士は飛び上がりサッシに足を乗せる。身体が廊下よりも高い位置に上り、高さがより現実味を帯びた。それが恐怖となって全身を襲う。局部が縮み上がり、鈍い痛みが走る。

大きく息を吸い込んで――残り二秒。

「アイ、キャン、フライツ！」

残り一秒――全身が奇妙なまでの浮遊感に満たされた。直後に凄まじい重力が押し掛かる。大地に吸い寄せられるかのような絶対的な流れに抗える力を持たぬ衛士は、身体から体重と言うものが失われている異様な感覚を覚えながら悲鳴を押し殺す。

握ったままの免許証の文字列はその中で変化する。しかし衛士はそれを確認する余裕を持ち合わせては居なかった。

地面が目前に迫る。

しかしその直前には既に、恐怖に震えた衛士の意識は容易に失われてしまっていた――。

「――っ！」

意識は戻り、衛士は手の中の免許証を確認する。窓から入り込む風が頬を撫でて――彼は大きく息を吐いた。

そこに書かれる文章は再び変化がもたらされていて、飛び降りの飛の字も記されない。砂時計はポケットの中で眠り、衛士はもたれかかる様に窓から上半身を乗り出させた。

次の試練は『一時間異性に触れ（触れられ）続けるまで有効（チャンスは一度だけ）』と書かれている。そしてその下にはいつもの

通り制限時間が一時間にセツトされているが、その時間は動くことが無い。恐らく、触れてから開始するのだらうと衛士は考えた。

それ以外の制限時間が存在するのかどうか疑問であつたが、もし無ければ少しばかり休もうと息を付く。

直後に、誰かが肩を揺さぶつた。

「ちよつとトキ、大丈夫？　気分が悪いなら――」

窓から、胸から上を乗り出すように休憩を取る彼は、両手を窓の外に垂らす形で居る。故に素早い身動きは出来ないが、その代わりとばかりに見つめ続ける免許証は――無慈悲にも制限時間タイムリミットを減らし始めてしまった。

チャンスは一度だけ、という文字列が頭の中に刻み込まれる。

そんな衛士の心情も知らずに返事の無い彼が心配になつたのか、彼女はさらに強く肩を揺さぶつた。

油断が故に到つた現状のせいで思考が停止し始める彼は、もしかしたらずっとこうしていれば彼女も延々と肩に触れ続けてくれるかもしれないと思い始める。しかしそれが夢のまた夢であることには直ぐに気付いてしまった。

その上彼女は隣のクラスの住人である。ハプニングがあつて教室に入れなくならなければ、あと数分もすれば顔すらも合わせる事が無くなってしまう。物理的に不可能な状況に陥ってしまうのだ。

――なら、どうすれば彼女を引き止められる？

「トキイッ！　トキつてば！」

両手で両肩を激しく揺さぶる彼女の背後で、どうしたのかと集まる野次馬と山田らが注目し始める。それに気付き始める中村は、もう知らないからね、と冷めた声で衛士の肩から手が離れ始めて――咄嗟に振り向く彼は、その勢いに任せて手を伸ばした。

彼女は驚いて身を引くが、それよりも早く飛来した指先が力強く胸に平手打ちをした。見た目よりも割合に豊満な乳房はブレザーの上からでも分かる程度に軽く揺れて、だが衛士はそれを手放さぬように強く握る。

中村は驚いたように手を軽く握って肩ほどまで上げ、脇を締めるような格好で硬直する。衛士は額に汗を滲ませ、ひとまず免許証をポケットに突っ込んでから引き攣った笑顔を見せた。

「オレはこの手を離すことが出来ないんだ。理解してくれ。そしてあと一時間ほどじっとしててくれれば嬉しいんだが……」

――反応は無い。

一度、野次馬の誰かがヒューヒューとはやし立てたが、それ以降は誰もが無口になった。そして朝のホームルームが始まる予鈴がなった頃になると、彼らは綺麗さっぱり居なくなっていた。

残るのは山田と葉山と、そしていつの間にか来ていた早乙女がなぜか立ち止まっているだけである。

「ねえ、トキ」

静まり返る廊下の中で、彼女の澄んだ声だけが良く響いた。

或る意味命がけであるこの行動の最中では、衛士はどちらに転んでも状況は芳しくない。恐らく次、またやり直す事が出来たとしても、再び試練の内容は変わってしまうだろう。そしてさらに、次はこれほどまで生易しくは無いはずだ。

徐々に難易度が上がる。試練が一から二へ、またその次へと段階が上がると共にそうなるように。

記憶の持越しとはそれほどまでに大きいことであり――さらに、そんな事ができると言う事は、もしかすると次回も記憶が持ち越せるという可能性は低いかもしれない。

時の回帰、逆流を理解した衛士であるが、その理解したという事自体を無くす時点まで時間を戻すかもしれない。繰り返したその時間を、さらに戻すのだ。感覚的には、バームクーヘンの皮を一枚一枚取り除くように。

だからここで手を離すことは出来ない。彼女に未来永劫嫌われることになっても、この時点から俄かに幸福であった学園生活がブチ壊れることになったとしても。少なくとも、未来を迎えるには――
「あたしのおっぱいを揉まないのはナイスな判断かもしれないけど

ね、触れ続けるっていうのはとてもバッドな選択ね。悲しいわ」

「奇遇。オレもだ」

衛士が想像するよりも冷静な口調は少なくとも安堵を覚えさせる。衛士はそこから手を這わせるようにして彼女の肩にまで手を移動させると、俯かせる顔からギロリと衛士を睨みつける鋭い視線が突き刺さった。

「……言葉が難しかった？　触り続けるのがダメって言ったんだけど」

——オレも常識人としてそう思う。理解できないはずが無いじゃないか。

言えば恐らくきつい一撃を貰った上で今日と言う日をやり直させられそうな予感を覚えた彼は、そっと口をつぐんだ。その上で、何を言えば適切なのかを考える。

時間が巻き戻る事を伝えてみようかと考えるものの、この状況で説明するのはあまりにもリスクであるし言い訳も甚だしいと受け取られるだろう。

ならば何が正しいのか。

そもそも正解などあるのだろうか。

彼女が衛士の事を好いていればまだ話は早かったが、彼女には既に山田と言う想い人が存在してしまう。どちらにせよそんな事を考えてしまう自分に未来はなさそうだと、薄く笑って細まる目は先を見ていた。

体内時間では既に三時間が経過した。だが実際には五分である。

衛士は砂時計を配置しなかったことを最大限に悔やみながら、せめて彼女に爽やかな笑顔を見せることにした。

「一緒のお願いだ。オレに付き合ってくれ」

「……これ以上何をすればいいって言うの？　殺して欲しいの？　窓から落とせばいいの？　さっき死にたそうだったし」

彼女に言われて、先ほどの記憶が脳裏に蘇る。直後に落下する夢を見て目を覚ましたように衛士は身体をビクリと弾ませた。中村は

怪訝な視線を彼に送るが、衛士にはそれを受け流すことしか出来ない。

最大限に無理をして、やれやれと首を振る。

同時に彼女の足は振りあがって——鋭い一閃は弧を描く刃のように瞬く間に肉薄し衛士の股間を撃ち抜いた。

内臓が圧迫されたような苦悶が、鈍く、されど鋭く染みる激痛が衛士に襲い掛かる。無慈悲な鉄槌は、彼女の怒りを表すかのように人体の弱点を的確に攻撃せしめていた。

凄まじい衝撃によって意識が揺らぐ。どれほどの痛みでも、試練でも消して跪くことは無いだろうと、決して膝を地面に付けることなどしないと心に決めていた衛士は、早速その場にへたり込みそうになった。

歯を食いしばり、痛みに耐える。苦悶の表情を浮かべる彼の顔を見て、中村は少しばかり同情の念を送った。

——本鈴がホームルームの始まりを知らせるように校舎内に鳴り響く。山田たちは気がつくとその場から失せており、教員は急ぎ足でそれぞれ自身が受け持つクラスへと入っていった。

中村はそれを聞いて衛士の腕を引き剥がそうとする。先の行動で全てを許してやろうという魂胆が、衛士にはようやく見えたのだが、しかし、許す許される以前に、衛士にはこの手を離すことは出来ないのだ。

「ちよっと、離してよ。さっきのは許すから……もう、本気で怒るよ？」

「すまん。だが、あと五〇分……せめて、ずっと手を繋いで貰えないか」

「はあ……？　もしかして何かのバツゲーム？　いじめられてる？」

——流石に、もう無茶がある。

衛士はそれを理解し、嘆息した。

確かにこのまま三つ目の試練を消化^{クリア}できれば最善であるが、それは飽くまで自分勝手な事なのだ。衛士のわがままでしかない、と見

ても仕方が無い。

なにせ、時間が繰り返していることは衛士以外には、ミシエルと
その関係者くらいしか理解できていない。故に、無論記憶も引き継
がない。だから皆知らず知らずの内に一日を何度も繰り返していた。
ここまで彼女に迷惑を掛けて続けるべきことなのか？

――否。

苦悩するのはオレだけだ。いや、ミシエルかもしれないが……
だが、この状況ではもう仕方が無い。

衛士は首を振る。

オレはもう出来る限りは粘ったのだと、自分に言い聞かせるよう
にしてから、彼女の瞳を見据えた。

中村は衛士を心配するかのように眉の尾を下げて見ていた。

彼は腹を決めて、口を開く。

「すまん。オレのわがままだった。お前に到ってはオレの行動自体
わけわかんねーよな。悪い。教室に戻ってくれ……じゃあな」

女々しいような台詞を口にしてから、衛士は最後に歯を食いしば
って――手を、離れた。

その直後に間髪おらずに世界を包む光は、されど衛士の視界を、
彼が存在する世界その全てを遮らない。そもそも光は、広がってい
かなかった。

衛士は両手を垂らしているのに、世界はそれでも存続していた。

「えっ？」

彼は驚き、だが同時に足先に痛みを覚える。下を向くと、彼女が
衛士の足を踵で踏み躪っていた。

ジリジリとねじ切られるような痛みが走るが、彼はそれを耐えて
中村の顔を見る。と、その大きな瞳から放たれる視線と衛士の眼光
とが交差した。彼女は衛士の真似をするように肩をすくめて、やれ
やれと首を振った。

「友達でしょ？ 胸を触ったりしたのは流石に怒るけど、何か悩み
があるなら話してよ。山田君とかには話せなくて、私なら大丈夫っ

て話なんですよ？」

思えば彼女とは高校一年からの付き合いである。最も山田ともそうであるが、それぞれを引き合わせたのは衛士であった。それから仲良く三人、ないし葉山を合わせた四人で行動するようになったのだが――。

衛士は、奇妙なくらいに自身を信賴しているような彼女に内心驚いていた。

「授業だって、一時間くらいならサボっても大丈夫だしさ」

彼女は垂れる衛士の手を取って、指を絡めるようにして握る。そしてそれから踏み躪る足を離した。

ただ手を繋いで欲しいとは伝えたが、指を絡めるとまでは指示していない。そんな唐突な行動に、衛士は深くにも胸を高鳴らせた。それから直後に、自身の軽さ、優柔不断さを覚えて嫌になる。なにか、妙に後ろめたいものを肌に感じていた。

――笑顔には影があった。それは、衛士が今まで一度も見せたことが無いモノだった。

中村はそれを見て、ただセクハラをしただけではないことを知る。だからこそ、彼に何かとてつもない、自分には到底想像も付かないような大きな悩みを抱えているんだろうと思ひ込んだ。

故に衛士の、抱きしめている不安を取り除くように手を握り、せめてそれを払拭させてやろうと考えていた。

そうすると衛士は驚いたように中村へ向き直り、頬を高潮させる。そんな彼を見て彼女自身も恥ずかしくなってきた、俯いてしまった。

――それから衛士の提案もあって、彼らは屋上に出る扉のある踊り場へ向かうことにした。

「……誰にも見つからなかったな。だが安心してくれ。仮に誰かがオレたちを見たとしても、オレが全身全霊を込めてその記憶が消えるように祈っておいた」

「アンタって積極的な癖してちっちゃいよね。――ったく本当に、

この学校に来てから退屈しないわよ。逆に大変なくらい」

嚴重に施錠される扉は屋上と校舎内とを隔てるものだ。彼らはその手前の階段に隣り合って腰を落とし、仲が良さそうに、知らぬものが見ればそれこそ逢引と思うように手を繋いで腰を落としている。衛士は、彼女の事を思っけて口にした言葉をそんなあっさりと、大して気にしていないと言う風に返されて口ごもる。彼には、中村が一体どういった心情をはらんで居るのか分からなかった。

今にも絶好だといわれても仕方が無い。そうに腹を決めたのに、彼女はたまにはこういうのもいいかもね、と微笑んでいた。雨が降っているせいで肌寒い。だから、と彼女は肩を触れ合わせるようにしてくっついた。

「山田にはフォロー入れとくよ」

「それはありがたいけど……ホントに無粋っていうか、野暮っていうか……。まあ、アンタらしいわね」

「いやだってさ、理由^{わけ}は話せないけど……オレのせいでこんなことになってるし」

ごによごによと言いつつ訳がましくそれらを口にする、中村は少しむつとしたように握る手に爪を立てた。鋭い痛みが手の甲に走りそれを表情に出すも、彼女は力を緩める気配を見せなかった。

そういったことをしながら彼女はきりっと衛士の目を睨み、

「アンタにはもう少し、男らしさってのが必要なのよ。確かに適切な場面で謝るのは良いけどさ、もっとこう……血湧き肉滾るような『どう見られたっていいだろ、オレの勝手だ』みたいな勢いをつけたほうが良いと思うのよ」

「……つまり？」

「アタシが良いと言ってるのよ。だからトキもそれで納得するの、すべきなの。常々思ってたわ。優しさが中途半端だって。だからモテないのよ」

そんな彼女の台詞に、はっ、と一つ笑うように息を吐いた。何かが吹っ切れたような、あるいは知っていると言いたような

清々しい表情で彼女へ顔を向けた。

「知ってる。だけどそれがオレだ。モテなくたっていい。オレはオレが思うようにやってるだけさ」

だから謝りたいときに謝り、頑固になりたいときになる。誰かを助けたいと思ったら迷わず走り出し、自分の中の獣が咆えれば迷わず蹴落とす。そう考えれば、彼女の言う通り自分勝手な事になれるだろう。最も、度を越してはいいるだろうが。

誰かの迷惑になるだろうか。誰かのタメになるだろうか――衛士はそういった思考を初めに持たない。

彼が真っ先に考えるのは、この選択をして後悔をしないか否かであった。

他人は二の次、三の次。自分の行動の上で誰かを助けられるのならばそうする。しかし、誰かを助けることが目的である場合は別であった。全てに於いて、自身の目的を最優先。それが彼であるが、しかし悲しきかな、時衛士の人となりは善悪で判断するならば当然前者と誰かが即答するような人間であった。

されど自覚は無く、ただ彼女に言われた言葉だけを受け止める。手のひらに流れる汗を気にするも、だがしかしその場の温度が低い故に、ただ温もりを感じているだけであった。ソレに対して俄かな安心を覚え、それから彼女のさり気ない優しさか、およそ中村らしくない注意に感謝する。

そういったことが出来るほど自分に信頼、自分を認識していると、いう事実喜びを覚えた。

だからこそ彼女に最上の笑みを、だからこそ自身に最大の鬼面を向けた。ある種の戒めだと彼は考えたのだ。

「へえ、いつも流されるままに流されてるだけだと思ってた」

「はっ、舐めんな」

「でも――トキとこうして二人つきりつてのも、すごい久しぶりよね。一年の、一番初めにクラスで席が隣同士以来？」

「んー、だな。その後は夏過ぎて、色々あってさらに山田も加えた

し」

——しかし彼女とは同じクラスであった事から仲良くなったのは良く思い出せるが、なぜ山田と出会い仲が進展したのか思い出せない。オレは部活もやってないし、アイツは早速バスケット部に入っていた。共通点といえば体育で共同授業を受けていた程度のものであったし。

その出会いはほんの些細なモノだった。衛士はそれ故に記憶の大海原の底に沈めてしまっていたソレだった。

「理恵さんと姉弟きょうだいだったのは嬉しいような、残念きようだんようなけど……
実際彼女とか出来たの？」

「いくらオレでも、そんな浮いた話が出てきたらお前に相談してるよ。そんなの、初めてで不安だしよ」

「たつく……男の癖して情けない」

「つか、今はいいんだよ。要らん」

出来ないことに言い訳している様でもあるが、実際衛士には友達以上の人間を肉親以外に作るつもりは無かった。どちらにせよ、今はそんな暇と余裕を持ってないのだ。

実際にはそれらがあるかもしれない。だが衛士は、そんな状況でも僅かにそれらを楽しんでいる心を隅の隅に持っていた。

「好きな人は？」

「んなもの——」

問われて、脳裏に過ぎらせる誰かの姿によって、言葉が詰まる。

昨夜に、あれほど強く様々な念を抱いた彼女の姿を見て、建前でも否定し辛くなってしまった。だがソレは衛士以外だれも認識しない人間である。そもそも現時点では人間ですらか判明していないのだ。その上中村は無論彼女、ミシェルを知っているわけも無い。だからここでソレを口にするにはよりはばかれるのだが——。

「へえ、居るんだあ」

「……想像にお任せする」

食いしぼり、言葉を飲み込む。

なぜだか襲い掛かる背徳感に胸を貫かれた気がして、衛士は浮かべたままの笑みを引き攣らせた。

かくして時間は、彼が想像するよりも早急に、それで居て酷く平穏に流れて過ぎた。

――授業終了の鐘が鳴る。

衛士はポケットから免許証を取り出すと、制限時間は既にカウントダウンを開始していた。

「悪いな中村」

「だあかあら……馬鹿が、話聞いてなかった？」

彼女の、しょっぱなから受けた愚痴交じりの注意を思い出して、衛士は咳払いを一つしてから言葉を直す。

「ああ――オレと久しぶりに時間を一緒に過ごせて良かっただろ？」
彼女は舌を出して悪戯に微笑むと、もういい？ と握る手の力を緩めた。頭の中で数えていた数が○を過ぎていたから、衛士は短い礼を後に手を離す。

懐かしいほどの開放感と、少しばかりの喪失感が胸に広がる気がして、衛士はたった一時間で腑抜けた意識を、心の中で殴り抜けるようにして引き締めた。

彼女が駆け足で階段を降りていくのを見送りながら、彼はその場で立ち止まり、ポケットの中から免許証を取り出した。

――第四の試練。これからそれが始まるのだ。

善行十回。飛び降り。一時間異性に触れ続ける。異様であり一貫性が無いそれらを、朝目覚めてから三時間の内に全てを済ませた。それが凄いことなのか偉いことなのか、彼にはわからない。だが少なくとも自身の最善を尽くし、それでいて最速でたたき出した結果だと衛士は誇っていた。

文字が消え、浮かび上がる。

その文章の背景はまるで蛍光マーカーで引いたかのように鮮やかな青地へと変化していた。

『不審者を処理するまで有効』と浮かび上がる文字に、衛士はそ

れを理解することが出来なかった。

不審者は分かる。処理も分かる。処理するまで有効なのは分かる。制限時間はその文章の下には表示されて居らず、代わりにそれが浮き出ていた場所の空白には”○／五”とだけ、ただ示されていた。

何か、特殊な暗号か、用語なのだろうか。衛士は考えるが、既に出ている答えを無意識に否定することだけに集中していたようであった。

それからややあって、彼が半ば思考を空白に染めている中で、文章の答えも出ていない内に校内放送がピンポンパンと音階を鳴らせた直後に、慌てたような男の声と共に始まった。

『ぜ、全校生徒に連絡します。只今校舎内に……が、外部の者が侵入しました。生徒は全員教師の指示に従って校庭に……体育館！

体育館に避難してください！ その際ホームルーム棟からは降りず、そのまま向かい側の特別教室棟に渡り、移動を開始してください。

一階の昇降口には決して近づかないように――』

放送が終わると、途端にざわざわと騒がしく移動を開始する生徒たちの喧騒が耳に届いた。

衛士はそれを聞きながら、息を呑み、再び免許証へと視線を落とす。

そこには変わる事無く、『不審者を処理するまで有効』とだけ表示されていた。

「昇降口って、言ってたよな……」

肩で息をするように、膝に手をついて呼吸を整える。彼がそこに到着する頃には迅速なる行動のお陰で生徒はおろか教師すら居なかった。さらに人の気配はせずに、血の臭いもしない。最も、血の臭いなぞは、衛士自身嗅いだ事が無いから分らないのだが。

階段を居りきって、下駄箱が壁のようになって並ぶ昇降口へ歩みを進める。否、進めようとしたのだ。

ただ平凡に、自身の目的を、課せられた試練を終わらせるために。

だが果たしてそれはまっとうされず、不意に飛び出してきた影に驚き、衛士は飛び退くようにして階段の中腹辺りまで駆け上った。その影は手元に鋭く銀光りする、されど先から腹までを真赤に濡らす刃物を天に向け、鋭い視線で衛士を貫いていた。

——男は、彼の存在を認識すると同時に、牙を剥くように殺意を放つ笑みを浮かべていた。

「ほうほう、お前が時衛士でいいんだな？」

男が出てきた軌跡を辿るように視線を向けると、そこには男の、赤い足跡が歩みを進めていた。

——心が震える。

膝が笑っていた。

恐怖が、一瞬にして心を支配する。

思考は既に使い物にはならなかった。

どうするという自問に、どうしたいという自答が生まれる。

逃げたいという弱音を、決意という信条じみたものが叩き壊した。ならばオレはどうすれば良いのか。

衛士は大きく息を吸い込んだ。

立ち向かおう。やれるところまで。

——何が目的なのか、彼のたった一言が衛士に教えた。ソレは時衛士の殺害、ないし彼が所持している物品の剥奪であろう。どちらにせよ男がその刃物によって命を奪うことは最早確実であるし、既に誰かを手にかけていることは明らかだった。

「さっすが教師。分かりやすい説明だったわ……まあ、教師の癖に生徒を売るような不届き物には天誅を下したけどな」

自分の言葉がおかしいのか、噴出し、身体を反らすように高らかに笑う。静かな校舎内に盛大な笑い声だけが響き渡り、ただそれだけで、衛士は威圧されたような気がした。

「——クソツタレが」

しかし飽くまで気がただけであり、その心は鼓動よりも早く脈拍よりも確かに振動を刻み、滾る血液よりも熱く燃えた。

どこからそんな勇氣が湧いてくるのか分からない。今の台詞とて、本当に男に向けたものかも自分自身でさえ判断できなかった。

「はは、んとにクソツタレな教師だったな。ビビッて糞漏らしてたし」

男は心底楽しそうに笑みを浮かべたままだった。そんな彼を理解することも、そのつもりも無い衛士はただひたすらに平静を装い、乱れる呼吸を力任せに抑えて男を睨み返すことしか出来ない。

先ほど出た一言を、もう一度口にする勇氣は既に失せていた。

言葉ばかりの決意が薄れたのを感じて、自分はやはりただの人間なのだと言う事を再認識した。

だがそんな自分に失望する時間はない。嫌悪している暇は、すべて思考に費やされた。

「んで、お前はなんで俺がお前を狙うかとか、聞きたい？ 愉快だから話してやるよ」

衛士は頷く。すると顔は強張る様に小刻みに震え、男はソレを見て楽しそうに笑ってから口を開いた。

「お前の命、買った奴が居るのよ。まだ十六だか十七だかの高校^{がき}生のお前をよ。はは、漫画見てエだろ？ お前が何したか俺は知らないが、ともかく金を貰ったんだ。出来るだけ迅速ってんで場所も聞いてたし、来たわけだ。警察が来ない内に殺^やっちまいてえから素直に差し出せよ？」

——これほどまで日常からかけ離れると、発想、想像が追いつかずに衛士はつい”もしかして”と考えてしまう。敗者特有の、奇妙なまでに自分に対して優しすぎ、都合の良い展開が思考の八割を占めてしまうのだ。

実は男がとてつもなく弱く、ケンカなどあまりした事が無い衛士でも苦無く勝ててしまうのではないか。あるいは、そもそもそれ以前の問題で、相手はそういった輩が居るから気をつけろと忠告に來ただけではないかという妄想に近い希望。そして、やられそうになったところで誰かが助けに來てくれるのではないかと、空気中の酸

素濃度よりも希薄な希望を抱いてしまっていた。

しかしこの昇降口から体育館は、まず階段から見て左側に曲がり、廊下の壁とも思わしき重々しい鉄扉を通過し、曲がりくねった渡り廊下を駆け抜けた後、数段の隔たりを上ってまた鉄扉をあける。そこでようやく体育館に到着するのだ。

無論その間までには確実に誰かに見つかるし、こんな状況である以上教師が出歩きを許すはずも無い。また、逃げるにしても距離があり、鉄扉を開けている最中にその鋭い刃、包丁を背中に突き刺されてしまうだろう。

しかしそれでも生きてさえ居れば……。

衛士はそう考えたところで唇を噛み締めた。

試練は『不審者を処理』することである。即ち目の前の男をどうにかしなければならぬ。幸い制限時間等の取り決めは無いが、男をどうにかしなければ、この命が失われてしまった時点で時が繰り返す。また記憶を継続できるかも分からないあの時間に。そして、この、今回よりもさらに過酷、苛烈極めるものが襲い掛かるだろう。故に、この幾度も繰り返される時間からの脱出はより困難になる。

——階段のすぐ下で待ち構えていた男は痺れを切らしたのか、一歩大きく階段を上る。衛士は思わず心臓を一度大きく弾ませた。

「カカカ、ビビッてんのか。まあ、仕方無いわな」

呼吸の乱れはついに抑え切れなくなり、足は鉛の様に重くなって動かなくなる。

いまだ感覚は鋭く尖り、恐怖を鮮明に感じていた。

男は足を進め、確実に肉薄する。緩慢な動作はそれ故に恐怖感を煽る様だった。

ただそれだかでも命が削られたような気がして――。

「うおおおおおおッ！」

叫び、男の顔が足元に迫る瞬間、大腿筋に力が籠る。直後に振り上げた足は男に驚愕と共に激痛を与えることは必至であった。

運動靴のような履きはその先端部を鋭く男の喉元に突き刺さり、

彼は仰け反り、短い悲鳴を上げて階段を転げ落ちる。その最中で振り上げられた腕は、その手に握られていた包丁はその腹で衛士のふくらはぎを撫で、薙ぎ、切る。

浅い裂傷は流血を促し、同時に痛みを覚えた。患部は熱を帯び、衛士はその場に尻餅を着いて、階段を転げ落ち、下で横たわる男を眺めていた。

相手の気絶を願うも、彼は早速身を起こそうともがき、仰向けの身体を反転させてようやく四つんばいになってから激しく咳き込んだ。

その格好は酷く無防備であり――。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ」

思考する時間は許されない。

衛士の身体は間髪おかずに行動した。

短い呼吸を繰り返す衛士は立ち上がり、喉を鳴らしてその場を強く蹴り飛ばす。そうして身体は軽やかに宙を舞った。

全身の自由を奪われ、吸い込まれるような虚脱感を与えられる空中はされど体感する時間は極めて短く、衛士は瞬く間に近づく男の背に足裏を向ける。

男は無論それに気付くことも無く――妙な感触を覚えさせて、盛大なとび蹴りは果たして成功する。

男は海老反りになった直後、弾かれた弦のように床に伏せる。力強く腹部を硬い床に叩きつけ、その反動は四肢に伝わり頭部を含めて、それらを同時に激突させたのだ。

衛士はその行動の後、頭の中では彼の背の上に立ち尽くしているものだったが、安定感が無い上に激しく暴れた故に滑ったかのように男から離れた位置に着地する。太腿の裂傷に激痛が走るが、されど衝撃によってであるが為に、間も無く痛みは引いて、行動するのには大した差支えにはならなかった。

立ち直り、打ち付けた箇所痛みを覚えながら男へ向き直り、今度こそ意識を奪えただろう事を確信する。それからポケットの中の

免許証を確認すると――”一／五”と変化していることを認識し、嘆息した。

「……あと、四人か」

包丁でも奪おうかと考えた。だがすぐ警察が来るだろうかと思えて断念する。

衛士は昇降口へ足を向け、靴に履き替えてから校舎を辞した。

――ここに居ては、誰かが仕向けるせいで皆に迷惑を掛けてしまう。その上、酷くやりにくいのだ。

今回は状況的に幸運だったがために勝利することが出来たが……。しかし、”処理”という言葉が自分の思い描くものとは相違していたようで、彼は胸を撫で下ろすような、安堵の息を吐いた。自身に課されたものは困難なれど非道でない事だけでも知る事が出来て、僅かでも安心することが出来る。それがやがて力になった。

しかし、下手をすれば自分以外の誰かが犠牲になっていたかもしれない。否、既に教員の誰かがなったのだ。そしてこんな状況だからこそ、やり直すことは出来ない。衛士の死は時間回帰の絶対を意味するが、それ以外は試練の内の悲しい被害に過ぎない。それさえも、試練に含まれている可能性さえある。

事故なのか、思い通りなのか。衛士には知る術は無く、故に迅速な行動が求められた。

衛士は誰の目を気にすることも無く、結局登校してから一度も自身のクラスに寄る事も無く、誰も居ない静かなグラウンドを、体力の許す限りの速さで走り抜けた。

誰かの死を背負う覚悟は彼にはいまだ無く、故に無責任と攻め立てられても、お前のせいだと追い立てられても首を振ることしか出来ない。そもそも今は自分のことで頭が一杯であり、今回の事で重傷になった人間の存在などはすっかり忘れてしまっていた。

――雨は気にするほど強くなっていない。殆ど小雨同然であり、衛士はそこで傘の喪失に気付いたが、どこで置き忘れたのか覚えておらず、また持ちに戻るわけにもいかず故に諦める。

校門を抜けてすぐの丁字路を向かって左に走る。駅へは出た所を真っ直ぐであるために、衛士は人の少ない場所へと向かうのだが――。

「んなっ!？」

そこで待ち伏せていた三人が、彼の姿を確認すると間も置かずに投石を開始する。手のひら大のソレは予想を上回る速度で直線上に飛来し、衛士はそんなモノを見て避ける暇も無く顔面に迫る石を額で受け止めた。否、それを受け止めたというには余りにも衛士のダメージは大きすぎた。

彼は額を切り、そして直接脳を打撃されたかのような衝撃のせいで意識を朦朧とさせ、思わず跪いていた。

ぼやける視界の先から迫り来る三人を見て、なんとか大きく息を吸い込み全身に力を込めて立ち上がりとするも、身体が言う事をきかない。流れる血はとめどなく溢れ右目に入り込み、衛士の右側は死角となり得た。

「バックがな、アイツ。でもお陰で燻^{くも}り出せたし……よっ!」

誰かが悪どく、ヒヒヒと笑う。その直後に後頭部に凄まじい衝撃を受けて――。

「警察が来るかもな。車出せよ……さっさと運ぼうぜ」

衛士の意識は、間も無く失われることとなる。

目を覚ますと途端に全身に鈍い痛みが走った。瞼を開けると世界は暗く、全身は寒さを覚えるように小刻みに震えている。身体は椅子に座っている状態で、さらにそこから簀巻きにされるように固定されていた。額から流れた血は既に乾き、貧血による意識の希薄化を起こすが、それでも一度だけであり肉体に不自由があるという程でもない。

衛士は必死に抜け出すようにもがくものの、縄は緩むどころかブレザーを脱がされカッターシャツだけになった肉体に食い込み、息

苦しくなる。血の巡りが如実に悪くなり、頭痛を引き起こした。

――何が起こっている？

衛士は自問してから、状況確認に取り掛かった。

まず衛士は校門を出て直ぐの所で酷く原始的な攻撃方法を受けて気絶した。そして今、椅子に簀巻きにされて身動きが取れない状況だ。見上げると天井は高く、トタンで出来ているような表面の脆さが見えている。吊り下げられる蛍光灯は唯一の光源であり、それでもこの空間内を明るく照らすことを許しては居ない。

辺りを見渡すと、地面は打ちっぱなしのコンクリートが広がり、隅々にビニールシートが掛かった何かが置かれている。椅子の直ぐ横には点滴棒の様なモノが置かれており、頭上に何かが吊るされているらしく、一定間隔で水滴が頭頂部を濡らしていた。

毒物か強酸系の何かなのではないかと思われたが、特に肉体に変化は無いところを見ると、単なる水滴なのだろうと理解できた。

正面を向けば巨大な鉄扉。

そこで衛士は、どうやらここは何かの倉庫なのだと認識できた。

その規模はおよそ二階建ての民家程度。その程度の倉庫ならば衛士の街にもいくつかあり、また放置されているものも多々。故に然程離れた場所ではない事を予想する。

だが――。

「誰も、居ないのか……？」

人の気配は一切無かった。誰かの足音も無ければ、呼吸音すらない。時計が時を刻むソレも無く、外から漏れて聞こえる雨音が、気を失うよりも強くなっている程度としか音は窺えなかった。

時間経過が気になる。空腹具合から確認しようとしてみるが、緊張のせいでろくに空腹も覚えられず、故に時間も分からない。断念してうな垂れてから、あの三人の顔を思い出す。

――校舎内に侵入してきた刃物の男よりも醜く卑劣で、また用意周到な奴等だった。

三人で投石を行い、弱ったところにトドメを刺す。だがそこで命

を奪う予定は無く、拉致をした後にココに運び込み――。

何が目的なのだろうか。

包丁男の言葉が正しければ、恐らくあの三人組の目的も同様、衛士の殺害となる。そうであれば衛士の命は早急に奪うべきであるのだが、彼の生命は今確かにそこにあり、また命に別状が無い事を知らせるように、外傷、頭痛があること以外は到って健康体であった。

――そもそもオレを買った奴が居る、とは一体誰のことであろうか。恨みを買った覚えは無いし、だけど試練を下す奴等がそうしているとも考えられるが、わざわざこんな交渉をするようにも思えない。どこか遠いところで、必然的に強制で試練を受けているオレを見ているだけであるはずなのだ。

最も、それはただの幻想、理想に過ぎないかもしれないが――。

次点で、早乙女美琉の父親がランクインしてしまう事に僅かな悲しみを覚えた。

しかしいくら考えても見に覚えは無く、さらに誰も居ない孤独感からかこのまま放置され餓死を狙われているのではないかと心配になってきた。

だが、誰かを呼んであの三人組が出てきた場合私刑は最早確定事項であり、衛士はこれ以上痛い事は嫌であるために口をつぐむことしか出来ない。

だからこそ自力の脱走を図るため、椅子を倒す勢いで暴れてみるのだが――まず椅子自体が固定されているのかビクともしない。その上、木製の雑に作られた椅子であるがためにただ座っているだけでも身体が痛くなり、尻などは据わり続けているがために麻痺してしまっていた。

やがて暴れる体力すらなくなり、ただ呼吸をするだけでも、呼吸を乱してしまう始末。頭はボーッとし始めて、だが頭頂部に一定の間隔で落ちる水滴によってストレスが溜まり、暴れなくなる。そして耐え切れなくなって暴れだし、体力の限界を感じて落ち着く。呼吸を整える中で、やはり水滴によって精神を乱されて――。

——ここで意識を回復してからどれほどの時間が経過したのだろうか。既に覚えた空腹は限界に達し、垂れ流した排泄物は異臭を放ち腐敗を始めていた。

「やめろ、やめろ……やめろ、やめろやめろオ——ッ！」

首を左右に激しく、骨がへし折れてしまうと心配する程の勢いで振る。全身がムズ痒くなつて掻きまわりたい衝動に駆られるも、太い注連縄は肉体の自由を許可しない。

「あああああああああああッ——」

やがて正気を手放して——その様子を見ていたかのように、彼の正面にある扉は左右に開かれた。されど外からの光は差し込まれず、傘を差す三人だけが中へと入ってくる。しかし衛士には、それを確認し理解するだけの理性を残されては居なかった。

「へっへ、ったく丸二日も待たせやがって……エアガンで目ん玉ぶっ潰してやる」

男の一人が笑いながら、腰のベルトに差した自動拳銃エアガンを手に取り、スライドを引いて、慣れた手つきで衛士の右目に銃口を押し当てた。次いで、力強く引き金を絞る。

ブシュンとサイレンサーでも付けた小火器の発砲音じみたモノが響き、血液が飛び散る。鈍い衝撃が手元に残るだけで、眼球を潰すという感触は伝えられない。故に罪悪感は最大限に散漫されていた。男は口元に笑みを浮かべながらさらに続け様に引き金を引いてもう一発。プラスチック製の小さな球体の弾丸は先の一発を押し出し、やがて眼球は破裂する。さらに一発。もう一発。

「あああああああ——」

衛士の言葉にならない、掠れた悲鳴が悲痛に響く事によって発砲音は掻き消される。顔色一つ変えない彼らはやがてエアガンの弾切れを知って、潔く銃口を引き剥がす。と、そこからは赤い糸が引かれ、また銃身は血に塗れていた。右目は眼球を喪失し、眼窩から滴のような流血を見せる。男はエアガンを投げ捨てて衛士の死を確信した。

そして世界は――。

「ああああああああああああッ――」
時を巻き戻した。

――散々騒ぎ、やがて扉が開かれる。鈍い色だけに染まる外の景色は暗く、衛士は気でも触れたかのようにブツブツと支離滅裂な呟きを漏らしながら内心、嘆息する。

弾丸は眼球を貫いて、それで終わるはずだった。だが押され続けてやがて弾が脳の下付近にまでもぐりこんだ辺りで彼は命を手放したのだ。

だが今は生きている。とりあえず砂時計が何よりも優先されるらしいことを知れて、まず一つ得した気分であつたが――ゆったりと余裕を持って歩いてくる男たちに我慢が仕切れなくなって、緩まっている注連縄を解いて立ち上がった。

「毎度毎度、遅えんだよ」

――そもそも彼を縛っていたその縄は結ばれてなど居なかったのだ。強くグルグルと簀巻き状態にさせられていただけで、その先端部分は結ばれず、椅子の足に巻きつけられていただけだった。さらにそこを釘で打ち付けるといふなんともズサンな拘束状態。故に、暴れていく内に拘束は緩くなり、ついには……という具合であつた。故に、もしかして何かの罠なのかな、と心配になつてはみたが、本当に心配すべきなのは彼らのおつむの方であることを認識した時には、吹っ切れたように可笑しくなつて腹がよじれてねじ切れそうになつたほどだった。

そもそも額に水滴を一定間隔で落とし続ける拷問は聞いた事があるけれど、頭髮という鉄壁の防御壁を持つ頭頂部に水滴を垂らし続けるものでは、頭が自由になっている時点で最早ザル。無意味というものだった。猿の浅知恵、否、これは既にそれ以下と成り下がっている。

どう頑張つても精神崩壊などは求めること自体無茶なもので、さ

れど試練故に彼らを処理しなければならなかった彼は叫び続けて、どう出るかを確認した後、再び舞い戻り決戦に挑んだのだ。

だが――あそこで死んだのは流石に勿体無かったな、と衛士は苦笑する。

アレほどまでやる馬鹿と覚悟はしていたものの、やられすぎていた。気が付いたところ、つまり一撃受けた頃には既に抵抗が不可能な状態であつたが――。

男たちは衛士より数メートル手前で、驚いたように立ち尽くしている。衛士は構わず点滴棒を掴み、キャスター部分から引き抜いて駆け出した。

細い鉄棒は持ちにくい。されど何よりも鋭く、

「なっ、てめ」

「――黙れ屑が」

男の喉へと穿つ棒は、しかし回避されて首の肉を抉るだけに終わる。引っかかるような感触を手元に残し、首筋に赤い筋が現れる。男は慌ててエアガンを取り出すが、武器はその男が持つソレだけであり、脅威は一切無い。ある訳が無い。そしてたった一人で立ち向かう衛士の勢いに、三人は飲まれていた。

学園では自身に向けていた鬼面を曝け出し、異様なまでの自信が衛士を包む。それを見て理解する男たちは、されどその瞳には単なる怒りや不快さという単純な感情しか宿さなかった。

これだけ用意周到だというのに、何ゆえにコレほどまで全てが中途半端なのかと、ソレに対する怒りすら湧いてきそうであつた。

男は左右、正面に分かれるが――煌めく一閃。男の行動を許さず、怒りのままにぶつける棒術は疾風が如く男の膝を撃ち抜いた。骨が軋む音がして、彼は短い悲鳴を上げる。

男は膝が関節たる役割を果たさぬ様になつたが故に前屈みに倒れ掛かるも、根気強く踏ん張った。

「はは、偉いな」

衛士は誉めながら、振り上げた足で男の顎を打ち上げる。打撃面

から衝撃が波状に広がり、男はされるがままにトタンの屋根へ顔を向ける。

さらに上方へ巻き上がるような勢いを利用して飛び上がり、もう片方の足で男の腹部を蹴り飛ばした。

男は吹き飛ばされるように千鳥足になって後退しようとするも、その足取りはあまりにもお粗末なモノで、やがてもつれ、そのまま背後に倒れる。

――三人で固まって来られたらどうしようかと思っていたが、やはりそんな事は無く、各個撃破はやはり出来そうである。

衛士は上手い着地が出来ずに転び、そんな無防備な場面を残った二人からの容赦ない蹴りを全身に貰う。が、咄嗟に突き出す棒は片方の鳩尾に突き刺さり、さらに捻り、押し、突き出し、挟む。棒先はやがて服だけではなく肉さえも巻き込む重量、感触を手元に伝え、そこで力任せに棒で穿つ。

「ぐえあっ！」

男は眼を見開いて、そのまま横を向き、やがて仰向けに倒れてゆく。棒は胸に浅く突き刺さったままだった。

衛士はそこで間髪置かずに力いっぱい蹴りを腹部に受け、思わず視界を曖昧にぼやかせてしまう。衝撃が内臓を圧迫し、脳が膨張して眼球を押しつぶそうとしているようだった。

継続的に受けた蹴りによって蓄積したダメージが、ついに飽和し始めた。

「クソがつ！ クソがつ！ クソがつ！ クソがあっ！」

残った最後の一人は懲りずに、仲間の仇でも取るように感情を隠すことも無くなりふり構わず衛士の腹へ蹴りを続ける。しかし衝撃はあれど痛みは麻痺してしまった衛士は、ただタイミングを計っていた。

鋭くは無い、鈍い一撃。足の甲で腹を叩くだけの、サッカーじみた足蹴であるおざなりさは否めず、隠せない。故にダメージの殆どは軽減され、また当てる部分さえも返れば痛みは皆無に成り代わる。

故にその、半ば一定間隔となる蹴りのタイミングは酷く分かりやすく――衛士は力いっぱい振り上げた鋭い拳、そのスネへと向けた拳骨を突き出した。そしてそれはまるで当たり前のように、肉薄するその足、スネ部分に直撃し――拳にピキリと、亀裂が入ったような音がする。

男はその痛みに思わず悲鳴を上げて距離を取るが、全力を込めた拳をいためた衛士のダメージもほぼ同等のものであった。手から腕へと衝撃が走り、拳から戻らなくなるほど痛みが継続する。強く固められた拳は痛いものの、それでも解けないのなら都合が良いと、衛士は全ての痛みを後回しにして、立ち上がった。

「クソはてめーだ。あほどもめ」

対峙する二人を見れば、圧倒的に拉致犯の方に分があった事だろう。しかし気持ちでは、その精神面では、その感情では、威圧感では、その全ては衛士が勝っていた。だからこそ、呑まれた男は何も出来ずに――飛来する拳を顔面で受け止めた。

鼻筋を打ち抜かれ、景色が歪む。次いで放たれる頬への一撃が、顔面を歪める。最後に決定的なアップパーカットが、彼の意識を確実にそいでいった。続く、執拗な顎、鼻への打撃が男の顔面を赤く染め……。

男はそれから間も無く倒れ、衛士は拳に残る痛みを、全身に解放される激痛を抱いて、だが跪くことは許されず、その場で大きく息を吐いた。

衛士は疲れた顔で振り向くと、胸に棒を突き刺した男は再び立ち上がっている。されど彼は然程驚いた様子も無く、強く床を弾くように、身を軽い前屈姿勢のまま走りだし、加速する。瞬間的に肉薄する衛士に反応する間も無い男は、そのまま衛士の拳を腹で受け止め、肉体をくの字に折り曲げた。

「があっ！」

吐き出すような声の後、もがこうと衛士の肩を掴む男だが、素早く払われた足は地面から離れ、軽い浮遊感の直後に硬い地面に叩き

つけられる。その際に間抜けなまでに後頭部を叩き付けた男は、そのまま意識を手放した。

——終わった、という開放感が衛士の精神的緊張を緩めてしまう。糸を張って吊るされていた人形のようなだった彼は、その緊張の糸が切れた事によって目の奥が重くなり、意識が揺らぐ。思わずその場で跪いてから、免許証が仕舞いこんであるポケットへと手を伸ばした。

そこにはやはり確かな硬いカードがあって、取り出し、眺める。数はようやく四／五へと増えていた。さらに、笑顔で映る衛士の指は未だ三本を継続している。その事実は少なくとも、衛士の余裕を僅かながらも生んでいた。

もう片方のポケットに手を伸ばしてケータイを取り出すも、開いてみるが画面は暗いままである。電源は落ち、おそらく電池が切れているらしい。さらに後ろの尻ポケットからサイフを取り出し、中身を確認すると——札だけが綺麗に抜かれていた。しかし幸いにキヤッシュカードは健在で、男達から金銭の回収を行おうとも思ったが、然程大きな額でも無いし体力がもたないから、と首を振る。ご丁寧に椅子の脇に置かれたブレザーを着直し、カバンを肩に掛ける。濡らした服は既に乾き、鼻が麻痺しているからか、異臭はしない。衛士は念のためにズボンを脱いで、ポケットティッシュでズボンと尻とを執拗に吹いてから、大きく息を吐いた。

もう何かを考える体力は無い。

男たちの言葉が正しければ既に試練が開始してから二日が経過していて、その二日間、衛士は失踪していることになる。一先ず自宅に連絡を入れたいところであるが、ケータイは使い物にならない。順調に行っていたものが、コレほどまで簡単に掻き乱されてしまう。衛士にはもう怒りする気力も失せていた。

頭は働かない。全身は持続する痛みに襲われている。吐き気も頭痛も激しいのに、腹の音だけが元氣そうに喚いていた。

誰が裏でこうしているのか、本当にミシエルの背後の組織が直接

手を下しているのか、分らない。

今は少しでも休みたいのだが、そうする暇は無い。少なくとも、こんな所で意識を手放すわけには行かなかった。

衛士は足取り重く、出口に向かう。

空は暗く、津々と雨が降り注ぐ。まるで自身の心情を映す鏡のように見えて、気分は更に落ち込んだ。

もう逃げられない、引き返せないと分かっているのに――何故オレが、と嘆く自分に苛立った。

行き場の無い怒りが精神を蝕む。徐々に変異する自身に気付きながらも、彼にはどうしようもなく――見たことも無いゴミ山を前にして、その脇に通ずる。舗装もされていない故に雨によって泥濘ぬかるむ道が伸びるのを見て、ただ立ち尽くした。

どうする、どうしよう以前に、自身がこの広い日本と言う島国において、どこに存在しているのか分からなかった。

行動のしようが無かった。残る一人を探し出すのに、後何年を掛ければ良いのかと言う漫然とした、漠然とした将来への絶望に、彼はそっと膝を崩し、四つんばいになって、なす術もなく雨に打たれる。

彼が行動し始めたのは、その暗い空が明るみを覚え始めた頃だった。

試練 四日目〜九日目

倉庫があつたのはゴミ処理場の端っこで、既に使用されず放置された場所だった。

偶然作業している作業員に出くわし、衛士は仕方無しに私刑を受けたことを説明すると男は驚いたように事務室まで引き寄せ、警察に連絡をしてくれることとなった。それからその作業服と簡易シヤワー室を借り、その上暖かいお茶と軽食まで用意された衛士は申し訳なく思いながら、流れぬ涙を流した体で泣き顔をしてみせる。

だが男が目を離れた隙に、衛士は何本も置かれているビニール傘の一本と、壁に貼り付けられていた近辺の地図を拝借し、プレハブ小屋を後にした。

——道なりに三〇分も歩き続けると、やがて交通量が多い道に出た。

近辺に携帯ショップでもあればと、ざっと見渡し探してみるも、そもそもあるのは小さな定食屋程度であり、コンビニすら無い有様だった。衛士は仕方なく、そこからさらに大きな道を目指して歩き続ける。

ゴミ処理場で見た時計は午前四時を指していたから、現在は五時近いのだろう。衛士は簡単に考えて、ただ歩くことだけを考えて。もしかしたら家とは逆方向へ進んでいるかもしれないという不安を覚えるが、それでもともかく、人が多い場所へ出ることが一番の目的であった。

そこで——衛士は向かい側から走ってくる、空車の文字が目立つタクシーを見ると、殆ど無意識、反射的に手を挙げ、タクシーの注目を得る。車は徐々に速度を落とし、やがてウインカーで路肩に寄ると衛士を乗せるために、後部座席をがちやりと開けた。

衛士は傘の水滴を払い、閉じて車に乗り込む。運転手は怪訝そうな顔で衛士を鏡越しに見ながら、そっと口を開いた。

「行き先はどこです？」

「あー、近くにコンビニってあります？」

「お客さんが歩いてた逆方向にヘヴンイレブンがありますよ」

「とりあえずそこをお願いします」

タクシー独特の奇妙な臭いが鼻をつく。妙にふかふかと身体に優しい座席に身を沈めると、すぐに眠気が襲い掛かった。しかしそれを耐えるように、外の景色を楽しむ暇も無く瞼をつねり、引っ張り上げる。

すると、数分もせずにタクシーは停車した。

「着きましたよ」

「あ、すいません。お金下ろして来るんで、ちょっと待っててもらえますか？」

「お客さん……いいよ、わかったよ」

「すいません」

運転手の疲れたような嘆息が心に痛む。だが、とられてしまったものは仕方が無いし、されどそれを彼に話しても仕方が無いのだ。ただでさえ、容姿と時間帶故に若干の不気味さを覚えられてしまっている。最も、作業服のお陰で何とか納得はして貰えているようだったが。

——二万程でサイフを潤し、それから少しばかりの食料と、簡易充電器を購入。早速それでケータイに電力を補給しながら、衛士は再びタクシーに乗り込んだ。

「——って所まで、お願いできますか？」

そこで早速、衛士は料金を催促されるよりも早く自宅の住所を口にする、運転手は意表を衝かれた様に眉をしかめて口ごもる。

「今まで残業ですか？」

再び、わざとらしい溜息を漏らして、車は発進する。進行方向は先ほどまで衛士が歩いていた方向と同様であった。

しかし——本当に助かった。衛士は心の底からこのタクシーの存在に感謝する。あのまま歩き続けていれば疲労で倒れていたことだ

ろう。これも、日ごろの行いと言う奴か？　と冗談めかしく考えながらケータイを操作する。――と、電源が入ると間も無くメールが着信する画面に移行し、すぐさま大量の件数が表示された。

「まあ、そんな所ですかね」

その殆どは理恵からのものであり、中村と山田、葉山からそれぞれ一件。着信は母からのものが多かった。バイト先から連絡が来ないのは、恐らく身内が事情を説明してくれたお陰なのだろう。

全部で八〇件のメールは五〇件を理恵のもの、そして驚くことに、残りの二〇件以上が早乙女美琉から届いていた。内容は『大丈夫？』『どうしたの？』やら、それから失踪が発覚したのか『何処に居るの？』『何か悩みでも』といった、まるで普通の友人のような心配しているようなものだった。そんな事に素直に感心しながら、だが優先すべきは彼女ではないと、返信しそうになる指を止めて、一旦待ち受け画面に戻った。

せめて自宅には先に連絡を入れておこうと電話帳を引っ張り出して自宅の番号を表示させ、発信する。恐らく父親に怒鳴られるだろうなと焦燥じみた緊張で顔を強張らせるが、妙に日常に戻ったような気がして、それがまた嬉しい気持ちにもなった。

ケータイを耳に当てる。それから間も無く、プルルルと呼び出し音が鳴る。運転手はその中で何かを言いかけたが、彼が電話をしているらしいと見て口をつぐんだ。

車は十分も走ると、やがて見覚えのある景色を流す。駅から遠く離れたスーパーやコンビニ、覚えのある街路樹や景色が、妙に安心させてくれる。されど電話は出る気配を見せなかった。

衛士は眉をしかめて電話を切り、次いで理恵に繋ぐ。――が、やはりその電話も呼び出し音が鳴るだけだった。聞きたい声は聞こえず、無機質なそれだけが彼を迎える。

否、まるで誘われているようだった。

衛士は焦燥を覚える。理由の無い焦り、もしかして今、とんでもない事に巻き込まれているのではないかという不安。緊張が腹痛を

起こし、額から滲む汗は流れるままに頬を濡らす。

「……なんだか、二日か三日前から精神がどうにかしちやった人が病院から逃げ出したみたいだね。近くの高校でも殺人事件が起こったらしいし、気をつけてくださいよ？　お客さん家の住所、案外そこに近いから」

ケータイを閉じると、不意に運転手はそう口にした。衛士はそこでようやく、彼の怪訝な表情の理由を察することができ――同時に、脳裏に真赤な妄想を過ぎらせた。酷く凄惨で、むごく生臭い……記憶。そんなものは無論持ち合わせては居ない。そんな状況などに居合わせた覚えは無い。

だというのに、まるで”思い出した”かのように、頭の中に蘇ったのだ。

そんな事知らない。知るわけが無い。だから当然そんな事が現実なわけが無い。しかし否定すればするほど、強く思えば思うほど、それは現実味を帯び始めた。

今日に、今回に限っては今の衛士は貧乏神など度を越した凶悪さを招いている。だからこそ――。

無機質な着信音がケータイを俄かに振動させる。衛士は全身を大きく弾ませてから、ケータイを開いて確認した。発信相手は、果たして早乙女美琉であった。

震える指で着信ボタン押す。高鳴る胸を押さえながら電話を耳にあて、心を落ち着かせようと目を閉じると途端に広がる悪夢に顔をしかめて、大きく眼を見開いた。

全てが嫌になる。

何でオレが、と嘆きたくなった。

もう嫌だと逃げ出したくなった。

こんな人間的知性があるからこそ、こんなに、これほど、どうしようもないくらい悩んでしまうのだと、気が狂ったほうが楽だと心の底から苦悩した。

嘘だと否定する自分が居る。だがそれよりも大きな声で”覚悟し

ろ”と言い聞かせる自分も居た。

何が正しいのか分からない。そもそもまだ知らぬ現実に対してこれほどまで心配する必要など、ないのかもしれない。

こんなことは単なる心配性のサガでしかない。嫌な事があったから、つい考えがそういった負の感情に惑わされているだけなのだ。

――まるで、死体を背にして現実も見ずにヘラヘラと笑っているような自分の横っ面を殴り抜けるような声が、鼓膜を破らんとする大声音で響き渡った。

『――もし！　もしもし！　ちよつと！　聞いてます！？』

「あ、ああ……早乙女さん、朝早いね」

『はあ……思ったより元気そうですね。エイジさんが突然居なくなつて、大変だったんですよ――』

学校中探しても見つからなかったこと。中村が思い立って屋上に駆け上がってみるも、残されたのが傘一本だけであつたこと。下駄箱を見てみると既に靴を履き替えた後だったこと。そして被害にあつた男性教員が重体で病院に搬送されたこと。それから学校が今週は全て休みになったこと。

次いで話題に上がるのは、他の皆も心配していたという事である。精神異常者が逃げたという話も上がって、衛士は恐る恐る自宅の事を聞いてみるが、彼女は知らないと言ふ振るようだった。

やがて早乙女は報告することも無くなったのか、私的に心配するような声で聞いてくる。

『声に元気が無いけれど、大丈夫ですか？』

「はは、何言つてんだ。オレから元気を取ったら何が残るんだ？」

『ふふ、色々ありますよ。そうじゃなかったら、そんな単純バカみたいな人と仲良くなろうと思いませんから』

「……多分、何があつても明日は平和になる。全てが終わる。短い間、かもしれないけどな。もしかすると、またこんな事になつちまうかもしれないが……」

『ちよつと、何を言っているんです？　要領を得ませんが……』

「いや……。悪いがケータイの電池が切れそうなんだ。また明日」
『え？ ……はい。それでは』

明日は学園は休みになっている。それを聞いたばかりなのにそんな事を口にする衛士に何かを感じた彼女は、ただ素直に頷いた。

やがて通話が切れ、衛士は簡易充電器が刺さったままのケータイをバッグに放り込んだ。中には、水洗いをし乾いても居ない制服がビニールに入って突っ込んである。着込むのはつなぎ一着だが、少なくとも制服よりは丈夫そうな素材で出来ている。

左胸に刺繍される会社名が少し目立つ、薄水色のつなぎであった。しかしこれからはどちらにせよ縁がなさそうな会社である。あの従業員は不気味な衛士の事を当分忘れないであろうが、それでも平凡な日常を過ごせることだろう。

——オレは……。どうだろうか。

衛士は思い出したように落ち込んで、それから決まったように都合の良い妄想の中に逃げ込んだ。

彼の情緒は酷く不安定で、それが極端になれば泣き笑いを同時進行できる程であった。

「お客さん、着きましたよ」

眠れる筈も無いのに座席に横になると、やがて車が止まり声が掛かる。衛士は気怠そうに身体を起こして首を鳴らし、大きく伸びをしてから息を吐いた。妙に鼻がすつと通って、泣いた後のようだった。

サイフから一万を差し出し、おつりを貰う。運転手はそれから、心配そうに声を掛けた。

「……お気をつけて」

「あ、すいません。あと一つ、良いですか？」

衛士はカバンを肩に掛けて、全重力が肉体を襲い体が酷く重い。開く扉で身体を支えながら、車内を覗き込むようにして言葉を投げる。運転手の疑問符が浮かぶよりも早く、衛士は言葉を続けた。

「今のオレじゃ到底状況が説明できないんで、警察を呼んでくださ

い」

「……お客さん」

「オレにも分からないんですよ。もう遅すぎるのは分かってんのに、だけど急がなきゃって。でも、何が遅いのかってのは……」

知りたくない。認めたくも無い。こんなこと、こんな状況に、こんな気持ちになるのなら砂時計なんて要らなかった。カンニングだって、勉強さえすれば必要ないのだ。

しかしもう後戻りなど――。

「分かりました。まだ若いんですから、どうかお氣をつけて……」

衛士が扉から離れると、男は物悲しげな表情で最後にそう残した。やがて車は走り出し、角を曲がって完全に姿を消した。

閑静な住宅街である。時刻はまだ六時にも満たない早朝。津々と降り注ぐ雨は既に豪雨と成り得ていたが、新品の少し大きめの作業服は水滴を弾いて身体を濡らさない。頭だけをビショビショに濡らした彼は、酷く緩慢な重い足取りで、玄関へと向かった。

指は無意識の内に呼び鈴を鳴らす。

これを最後に聞いたのはいつの事だろうかと考えるが、思い出せない。さらに中からの反応も無いので、衛士は恐る恐る玄関扉を引く。すると案の定、施錠などはされておらず――。

開く瞬間に鼻腔を刺激する生臭さは――なかった。されど安堵は出来ない。

実際には、何の臭いも無い。強いて言えばいつもどおりの自宅の香りであった。

扉を閉めて、靴を脱ぐ。左右に広がる廊下には血の跡など何もなく、だが心臓は激しく鼓動する。胸が痛くなるほどであった。

衛士は恐る恐る、居間へと足を向ける。と、共になにやら、アンモニア臭のような……自身が排泄物を垂れ流した際の臭いが漂ってくるのを覚えて、思わず足が止まった。居間と廊下を隔てる扉は僅か数歩分。さらに血の香りが鼻につくのを理解して、衛士の身体が完全に動かなくなってしまう。

扉の向こうに、確かな人の気配があった。すりガラスであるが故に向こう側を確かに確認できないが――黒い影が、向こう側で動くのを確認できた。その直後に肉体の主導権が解放されたような気がして、勢いに任せて扉を突き破るようにして居間へと飛び居る。

「――っ……」

衝撃が電撃のように脳天から貫いた。

言葉が出ない。瞳が、焦点が定まらない。

思考が真っ白に染まりあがる。同時に、目の前に黒い影が立ちはだかつて――天井から伸びる縄に吊るされる三人分の何かが、彼の視界から遮られた。全身には包丁か、刃物かが突き刺されたままで、足元には大きな血溜まり。ソレ故にその行為は事後に行われたものだど認識できた。が、衛士はそれを理解しようとはしなかった。

その場面に対する情報量は余りにも膨大なモノで、彼の頭では到底処理しきれるものではなく、また処理した結果に訪れる救いの無い結果を、彼は求めなかった。

「来た来た来たよおバカさんが」

――そういえば着信もメールも、ある一定の期間から突然として途切れたように来なくなっていた。記憶を呼び起こして思索してみると、それは恐らく、二五日……つまり昨日から連絡が失せたのだ。「昨日から待ってた。おっさんは邪魔だったから先にやった。次はババアだ。汚らしいし、女の子を庇ってたから殺した」

胸が高まる。

目の奥が熱くなるのを感じた。

思考が纏まらず、今自分が何をされているのか分からない。

だが男は、その雑に伸びた坊主頭を撫でるようにしながら嬉しそうに語り続けた。

「おっさんは立派だね。弱いくせに頑張った。締めて折ったらすぐ逝ったけど。弱音も吐かなかった。偉かったね」

だけど、と男は続ける。衛士はそんな事、と聞きたくないはずなのに、その言葉の全ては全身に染み入るようだった。不思議と、男

の言葉に嘘が無いと信じてしまう。彼が語る言葉一つ一つが、場面を鮮明に想像させた。

「ババアは五月蠅かった。ヒステリックって奴？　チョー耳に障る。だからおもつきし顔面蹴ったら泣いてんの。この子だけは！　って。カワイソウになってきたから、おっさんと同じように殺したった。泣いて喜んでたよ」

――この男の目的はなんなのだろうか。

否、目的は分かる。時衛士の殺害だ。

だが、コレほどまで気が触れたような人間であればそもそも金などには固執しないだろう。

だから、問う。頭の中で何度も繰り返した言葉を、何度も口にしたような気がして、実際には唇すら動いていなかった疑問を、ようやく投げた。やっと口に出来た。

「なんで、オレを狙うんだ……？」

言われて、男は驚いたように唇をすばめて眼を見開くと、なんだ喋れるじゃん、とおどけた様に衛士の肩を小突いて見せる。彼はそんな行動に全身を強張らせて弾ませると、それが可笑しかったのか男は軽く笑って答えてくれた。

「殺せて言われた気がしたから。つか、オメーにストーカーされてた気がすんだよね。命も狙われてたし。殺されかけたし。だから、復讐代わりつつーの？　この家で待ってたら、おっさんとかうるせーんだもん。今は静かだけだな」

「――っ！」

訳が分からない。これが、精神異常者という人間なのだろうか。

だがそれをどうかと判断する理性はなく、だが衛士は自身の頭が徐々に冷えていくのを感じた。

感情は落ち着きを得て、やがて何をすべきか、どうするかを考えられるようになる。

「ねーちゃんはかわいかった。ビデオ撮ったからよー、見るかー？」
ヘラヘラと浮かべる薄笑いは無邪気そのものであり、彼はテーブル

ルの端に、横にして立てられた箱ティッシュを手にして再び衛士の下へ戻ってくる。彼はそのままティッシュを一枚一枚引き抜いて、辺りをティッシュで埋め始めた。

「うつんねーよお！」

やがて中身が空になると、男は怒りし空になった箱を叩きつけて踏み潰す。その場で激しく地団駄を踏んで騒ぎ散らし、やがて怒りに任せて衛士の頬を殴り抜ける。衝撃が脳を颯り、衛士はされるがままに足元をふらつかせて近くの壁に叩き付けられた。

頬がじんじんと痛むが、それだけだ。

衛士はそこで、はたと気がつく。

精神が様々な抑圧から解き放たれたかと衛士は認識したが、それはただ単に全ての衝撃によって麻痺しただけであった。

故に何も感じず、故に何かを表すことは無い。心は虚無と化していた。

ただ念頭に置かれるのは、目の前の男を”どうにかしろ”という本能からの欲求に程近い命令。

瞳からは光が失せ、衛士が最後に感じたのは、得たのは冷静などではなく、ただ単に自分が消失していくその瞬間のものであった。今の彼の肉体には、つい先ほどまで恐怖していた衛士も、興奮していた衛士も、悲しんでいた彼も、逃避していた彼も存在しない。

見る世界には何の思い入れもなく、タンスは、吊るされる遺体はただの障害物として認識され、生気のない眼差しで男を眺めていた。

「いいや、つまんねーし。殺す」

「テーマをな」

滾るように感情が復活したかと思うと、それは単なる怒気であり、目の前は真赤になって殆ど反射的に突き出した拳が男の頬を殴り返した。

炎を灯す瞳はされどス黒く、どろりとした粘り気を持つ。彼の精神を占める感情は、原油に引火した爆炎と然程違うものではなかった。ただ少しのきっかけで巻き起こる事故であり、されど燃料が

燃料であるが為に処理が難しい。放って置けば炎は広がり、強くなる。

轟と唸るように衛士は肉薄。男の胸元に飛び込むように肩を衝突させる。

彼はおととつと、とワザとらしく身体を傾け、尻から転ぶ。衛士はそこから何の抵抗も無いのを良い事に馬乗りになって、力いっぱい顔面に拳を振り下ろす。

「お前のせいで」

「いってーよ！」

唇を切ったのか血を流して男は喚く。衛士は構わずもう片方の拳で同じように顔面を殴り飛ばした。

「オレのせいで」

「痛い痛い痛いッ！」

頬を殴り抜け男は衝撃により後頭部を叩き付ける。間髪おかずにもう片方の頬を殴り抜ける硬い拳骨故に、弾むように浮かび上がった頭部は必然的に床に激突した。

やがて男の悲鳴も聞こえなくなり、幾度も繰り返す行動にはしかし飽きは生じない。彼の拳は、一度動き出した水車のように、ただ燃え盛る怒りだけを携えて奮われ続けていた。

そうしていつしか拳は血に染まる。人差し指はおよそ曲がるはずも無い方向に曲がり、拳は拳たる形をとどめない。指がそれぞれ、丁寧に骨折しているらしかったが、痛みを感じる余裕は無かった。

また男の顔面は赤く染まり、鼻はひしゃげて、瞼は腫れ目を開けられていない。肉体はぐったりとその場に脱力して動かない。

しかし衛士はその拳を止めることはなかった。

心は無にして、肉体は既に限界を達そうとしているのにも関わらず停止する気配は無い。

——これほどあっさり、男はいさやられて良いのだろうか。

やがてそうする中で、衛士の精神は理性を——否、それを理性と呼ぶのは余りにもおざなりな知性が蘇り始めた。

両親を、姉を殺した仇であるはずだ。ならばより苦痛にまみえて、よりその幼稚な精神、脳ですら苦悩しなければならぬほど苦しめなければならぬはずだ。だというのに、こんな事で奴の命を奪って良いのだろうか。

否——断じて、否である。

そこでようやく衛士の動きは停止した。

気がつくのと、周囲には男のモノと思われる血が飛び散って床が汚れている。衛士の顔にも返り血がいくらか掛かっている、乱れる呼吸をそのままに、馬乗りのまま肉を露呈し歪む口の中から歯が喪失したことを見せ付ける男を見下しながら、そっと立ち上がった。

——暴力に暴力を返すことは、同類のすることであり、恨みを晴らすならば、抵抗するならば相手の上を行く行動に出なければならぬ。

それはいつからか心の中に決めていた、決まり事のようなものだった。しかし、今回で衛士は確信する。

そんな高等な事はオレには無理である、と。

力には力でしか歯向かえず、また残虐を前にして理性を保てる自分には居ない。

未熟であると攻め立てられようとも衛士はそれ以外の行動を取るつもりはなかった。

——虚ろな瞳で男を見下した後、次は何で苦しめてやろうかと周りを見渡し、目に入っただのは天井から吊るされた三人の姿であった。日常を、つい先ほどまで感じていたかのような姿は未だ綺麗であり、されど薄く開かれた目はただ一点だけを見つめ続ける。腹に、背に、胸に、腕に。刃物を付き立て刺された皮膚は青く染まり、そこから流れていたであろう血は既に乾いて肌に張り付いていた。

「あ、ああ、あああ——」

それを見た途端に、再び理性や知性、その精神はどこか遠くへ旅立った。

恐怖は既に無く、心に満ちていく悲しみだけが、口を衝いて悲鳴

として零れ落ちる。

その場に腰を抜かす様にしてそれらを見上げる衛士の意識は、なんの予兆も無く——不意にそこでぷつりと途切れた。

——されど試練は、無情に次の段階に移行する。

衛士が病院に運び込まれたのは、それから間も無くのことである。彼が目覚めたのは当日午後二時の事であり、目を覚ますと同時に警察官からの事情聴取が開始した。

両手はその指全てを骨折していたが為に包帯で封じ込められ、自由が無い。また全身の打撲や軽度の凍傷の為に肉体自体が、そもそも上半身を起すことすら困難であった。だというのに身内は見舞いにも来ず——と愚痴る中で、つい今朝の事を脳裏に蘇らせる。湧き上がる吐き気を抑えきれず俯くと、若い警察官は洗面器を差し出し、優しく背中を撫でて介抱する。

これでもかと苦い味を覚えたはずなのに、実際舌にそれを感じる と嫌悪感を覚え、それが更に嘔吐を促す。

それから少し落ち着いて、ようやく男は、年季の入ったような刑事に促されて質問を投げた。

「気分は大丈夫？」

「はは、そう見えるんなら大丈夫なんじゃないっすかね。オレには自分のことすら良くわかんないんで」

実際衛士の顔は酷くやつれていて、頬はこけて青白い。目の下に浮き出るクマは酷く濃く、男はこれが死相だと言われても、なるほどと頷く程の悲壮感がそこにはあった。

無用心な質問に、男は先輩と思わしき中年男性から軽く頭を小突かれる。彼は気まずそうな顔をしてから、再び問うた。

「まず報告すべき事なんだけど、祝英雄いわいひでおは今だ意識が戻らないけど、命に別状は無い。それからご家族は……君が発見した時からおよそ二〇時間前にはあぁなっていたらしい事がわかった」

「……あの、免許証って有りますか？ ポケットに入ってたはずな

んですが」

男は重々しい事を今更ながらに報告する。しかし衛士は既に理解した上で平静を装っているのだから無駄な話だと、まず自身の欲求を満たさせる。すると男はこれかな？　と寝台のすぐ横にある引き出しの上に置かれるソレを差し出した。

衛士は器用に包帯のまま、両手でそれを掴んで見る。

写真は未だ三本の指を突き立てていて――試練の内容が表記される部分は、未だ白く染まっていた。

身体を起こすと、全身に鋭い痛みが走る。息をするのもやっとな激痛を耐えて上半身を起こすと、男が手を伸ばした引き出しの上には、ケータイとサイフ、それから砂時計が並べられていた。カバンはそこには無く、男に聞くと、中の荷物を勝手に洗濯してしまったらしい。

別段困ることは無く、また逆に助かることだと衛士は短く、用は済んだと息を吐いた。

幾らなんでも、これから再び自宅へ戻るまで作業服で居るわけにも行かないのだ。さらに、着せられているチェックのパジャマは事情聴取する警官が買ってくれたものであるらしく、衛士は僅かながらの礼に頭を下げた。

「退院したら、過剰防衛って奴で逮捕つかまるんですかね？」

「いや、まだわかんないのが正直なところかな。どっちにしろ君の身体の怪我也衰弱もひどいし、相手を無力化するなら……」

口を出しすぎたのか、男は口ごもる。しかしこの怪我也衰弱も、全てはその前の拉致事件で引き継いだものである。されどそれを警察に伝えることははばかれた。無論、これ以上物事を面倒にすることが嫌であったし、思い出したくも無いことだったからだ。

起訴も逮捕も、勝手にやればいい。衛士はもうそれらに関わりたくは無かった。

――こんな、些細な会話でも人の温もりを感じる事が出来る。小さな事でもそれが嬉しく、心の底から安心出来るのに、流れても良

いはずの涙は流れる事無く、瞳は乾ききっていた。

しかし衛士はそれを気に留めることは無く、ただこの現状を、良かったな程度にしか捉えていなかった。

「それで、話せる範囲で良ければいいんだけど、今回のこと話してくれるかな」

――言われて、衛士は少しばかり眉をしかめる。

今回のことは、衛士が駆けつける二〇時間前に一旦事が済んでい
るのだ。であれば、即ちその間衛士はその場に居ないことになる。
さらにそれ以降、二〇時間自宅には居らず、なればそこから話さな
ければならないはずだ。

恐らく、丸一日以上家を離れていたという事もあって警察に搜索
願を出していた可能性もある。

なら下手に話を誤魔化すのは無駄なことだろう。

衛士は短く息を吐いてから、仕方なく学校で自身を狙ってきた不
審者の場面から話をすることにした。

――まず初めに、昇降口で不審者をのして逃げ出したこと。逃げ
出したところで待ち伏せていたような若者三人に石を投げつけられ、
当たり所が悪ければこんなものかと気絶する。気がつくとも知らぬ
ゴミ処理場の使用されなくなった倉庫の中に居て、椅子に縛り付け
られた状態だった。奇跡的に緩む縄を解いて、丁度現れた三人を命
がけて倒し、やがて拾ってくれたタクシーに送ってもらって自宅前
へ。

そこで殺害現場を目撃し、怒りで周りが見えなくなった衛士はそ
のまま男に殴りかかり――。

全てを話し終えた衛士は短く息を吐くと、男は持っていたのか、
買ってきたのか、缶ジュースを差し出した。

衛士は久しぶりに口にするそれで喉を潤すと、冷たさが身体の中
に染み込むのを感じた。

これが生きていることかと、背伸びしたように心中で呟いてから、
すぐさま空腹を覚えた。

壁に貼り付けてある時計を見ると、時刻は既に十五時が回るところであった。

「はは、ケンカ、強いんだね」

男は場を和ますように声を掛けた。

——誰一人として、否、結局自分の身すら守れないのに、強いも何も無い。

衛士はそれを口にせず、また言えずに、明るく笑ってやり過ごす。男は安堵したように胸を撫で下ろした。

「それじゃ、トキ君も疲れているだろうし、僕たちはコレで。また明日来ても大丈夫かな？」

「ええ、いつでも」

「お大事に」

彼らはそう言い残して、そそくさと衛士の個室を後にした。

「——なんだか、神様が徹底的に彼を陥れようとしてるみたいなの不幸ですよ」

「不審者に拉致、さらに家族を惨殺だから……。だがどうにも」

「引っこかります？」

「気にならないわけが無いだろう。偶然、避難しなかった彼が不審者をのして、偶然逃げ出した彼が拉致監禁され、偶然そんな悲劇にあった彼の家族があんな事に遇ったんだ」

皺が目立つ、白髪を短く刈り込んだ男は顎に手をやり思索する。

若い男はメモ帳を眺めながら、やがて病院を辞す。

それから駐車場に向かい、無言のままそれぞれが乗り込んで、ようやく言葉は交わされた。

「わかんないですね。現段階で、この五人の関係性は無いですし。共通点って言ったら、やっぱりトキ君を狙ったただけですけど……。あんな気のいい高校生が、なんで……」

「そうだな。肉親が殺されたってのに、あまり引きずった様子もないさっぱりとした高校生だった」

「……！ それって、もしかして……」

「いや、あくまで可能性の話だ。無論、動機だってまだわからんな」

若い男は目を剥いて驚き、雨粒によってすりガラスのようになる窓から病棟を眺める。無数に並ぶ窓の向こうに、トキが居るのだと考えると、哀れだと思うのと同時に、相棒から聞いた可能性が思考に過ぎって背筋が凍りつく。

もしこの可能性とやらが真実に結びつけば、男がこれまで関わってきた、見てきた事件の中で酷く最低なモノとなりそうだった。

不自然な程不運に巻き込まれ、そして五人の共通点といえば時衛士を狙っていると言う事。都合よく拉致された所で肉親が殺害されて――。

身震いして、首を振った。男はそんなわけがない、と強く否定する。

中年男性は軽く微笑み、

「だったらいいな」

とだけ口にし、車を発進させる。

雨は朝より、やや優しくなっていた。

一度寝込むと、身体を動かすのは難しかった。

全身の痛みに耐えるのもやっとで、そもそも何故耐えなければならぬのかと言う緩んだ心がそれを不可能にしてみせる。

今の彼は、数日前の衛士とはまるで別人のようであった。

人が居なくなれば無気力を極め、採血を行えばただそれに従い腕を出すだけ。看護師の問いかけにも無言を返し、対人用の笑顔は既に役割を果たさない。

空腹感を覚えるが、身体を動かすのが億劫であるために食さず放置。しっかり食べなければ、という看護師に上体起こしを手伝ってもらって、フォークを握らせてもらって、ようやく其処で食事が始まる。

女性の看護師は、まるで赤子の世話をするようだと冗談のように口にして軽く笑った。

されど、衛士の表情筋は一切動かない。感情を忘れたように無表情を極めていた。

思考は常に空白を保ち、何かを考える事を許さない。思索すれば、それがすぐさま記憶に繋がるからだ。何かを思い出せばすぐに家族の事を思い出す。涙も流せないのに、悲しみだけが襲い掛かってくる。

胸が酷く苦しいのだ。しかし、それを吐き出す術を、衛士は泣くこと以外に知らなかった。力任せに暴れることも出来るだろうが、今の怪我を見てそれは明らかに無理がある。故に衛士は、全てを放棄することだけを選択していた。

そんな頃になると彼の頭からは既に砂時計の存在は消えてなくなり、第五の試練が表示される事を待っていたことすらも忘れていた。一日が経ち、二日が経つ。衛士が口を開くのは聴取の時だけであったが、やがて刑事も聞き出すことは無くなり、見舞いに來ることも無くなった。

さらに一日が経つ。衛士が言葉を放つ日が失せ、彼が寝台から起き上がるのは排泄の時のみになる。

やがてまた一日が経過した――五月三〇日。

気がつくアレから、試練が始まったあの日から一週間が過ぎていた。こんなに試練が長引き、またそもそも試練どころではなくなる事など、あの日誰が想像できたであろうか。――確か一人、衛士には心当たりがある。今思えば、あの反応はコレを知らなければやや過剰であったような気もするが……やはり、今となってはどうでも良かった。

どちらにしろ、彼女にはどうにも出来ないことであつたろうから。衛士の顔色は入院初日と比べると仄かに赤く健康色を取り戻していたが、その代わりとばかりに顔はやせ細り、肉体の筋肉は衰弱しはじめていた。

本も読まず、テレビも見ず、ただ一日虚空を眺めるだけで時間が過ぎる。いつしか心に抱いた、”気が狂ったほうが楽だ”と言う気持ちを持ちを地で行きそうである彼は、そんな日に、築かれ始めた痛々しい日常を、悉く破壊の限りを尽くされた。

「時さーん！ お友達がお見舞いに来ましたよー！」

——その日の午後は、担当の看護師がいつもの調子で扉を開ける事から始まった。

しかし言葉は衛士の頭に入り込まない。聞いたら聞いたで思考せねばならず、それが家族の死に直結して心が傷つくからであった。

——もう、嫌だった。いつその事この場で死にたいほどであるのに、術は無い。飛び降りるならば身体が自由に動かなければならない。自分で息を止めては見たが、苦しくなって、生存本能がやけに勇ましく、空気を貪って生き延びた。

ならば餓死でもいいだろうと寝転がったままで居れば、看護師が無理矢理にでも口に詰め込んでくる。

なにやら生かそうとしてくれること自体が拷問なのでは無いかと思えてきた。

もう嫌だというのに——。

「エイジ……」

好青年そうな風貌を持つ少年は、半袖のカッターシャツにズボンという制服姿で出入り口に立ち尽くす。呟きは耳に届くが、衛士はそれに反応しない。瞳は動くことを忘れたように、彼は彫像のように、半身を起こし斜め上へ顔を向けたままの状態で硬直していた。

「ニュース、見たよ」

——山田の言うとおり、彼の身の上は少しかりテレビで取り上げられた。しかし犯人は既に確保済みであるという事から然程取り上げられず、話題になるのはこの街の中だけである。

無論、それを衛士が知らないのは外から情報を取り入れないが故であった。

山田の影から覗くのは、大きな瞳に一杯の涙を浮かべる中村の姿。

それらを心配そうに窺う葉山がそれぞれ並ぶ。

やがて勇気ある一步を踏み出した山田に続き、三人は衛士の寝台を取り囲むようにして両脇に並んだ。

「ごめんねトキ、あたしがあの時、手を離さずに一緒に教室に戻ってた……そんな事で、恥ずかしがったりしなれば……」

彼女はそこまで言っとうずくまる。両手で顔を押しえ涙を流して、嗚咽を漏らしていた。

泣きたいのはこちらだと心を動かし、口には出さず吐き捨てる。

既にこの時点で、衛士には彼らが共に悲しみに来たのか励ましに来たのか、よくわからなくなっていた。

かつてはあれほど、かけがえの無い友人だと思っていたのに、今では若干鬱陶しいとすら思えて来る。流石にコレほどまでの心情の変化は衛士自身衝撃的で、悲しいものであったが、それなら仕方が無いと納得してしまう。そうできてしまっていた。

やけに冷え切って、情が無い。ある意味で理性的であったが、やはりそれは誰にも理解されないのだろうと考えた。

そしてそこから、殺害犯を殴り続けた記憶が不意に蘇り、自然に肉親の死を思い出す。

衛士は顔をしかめて声にならぬ悲鳴を押し殺して俯いた。

——もう戻ってこない。

あの品も無くだらしが無い寝顔も、朝早くおきて作ってくれる朝食も、その全ては二度と戻ってこない。感じられるのはただでさえ記憶だけというのに、それさえも、思い出すことさえも悲しみによって封じ込められていた。

「——わるい、また、今度にしてくれ」

必死に搾り出した声は数日振りのものであった。それが確かに言葉になっていることを祈って口にすると、山田らはそれぞれ顔をあわせ、中村の肩を抱くようにして病室を後にする。

今度があればいいな、と他人事のように考えて、自身がこれから立ち直れるのはいつになるだろうかと漫然と考えた。しかし今を見

るに、それは当分、下手をすれば死ぬまで訪れないだろうと思いはじめ。

されど世界はそれでも回る。

だからこそ、衛士はこれもある種の試練達成なのではないかと考えて、その日はそこで、眠りについた。

傷は治るのに、その精神だけは日経つごとに、傷が深くなる。

衛士はその日から食事を断ち――次の日から、衛士はカウンセラー看護師との定期的な会話を強いられることとなった。

「貴方はこれまで大変だったわね」

まだ若そうな女性は縁の黄色い眼鏡ふちをかけているのが特徴的だった。黒く長い髪は後ろで束ねられ、羽織る白い白衣から伸びる黒いストッキングが淫靡に見える。が、衛士にはそれが単なる特徴として受け取れず、感情を揺るがすことが出来ない。

「はい」

「蒸し返すようだけど……」

彼女は松本と名乗り、カウンセリングを開始する。まず初めの質問は自分が元気だった頃を思い出すようにと促すようなものだった。しかし衛士は、そんな事で悩んでいるのではないと、彼女に告白する。彼なりの精一杯の行動だった。

「オレだって、悲しめばまだなんとかなるんですよ。涙さえながれれば。泣くことが出来れば。感情が、感情のままに爆発させることができれば」

――口にするごとに、あの日の事が脳裏に蘇る。衛士は潤みもしない瞳で彼女の釣りあがる目を見据え、乱れる呼吸に言葉を途切れ途切れにされながらも、必死に、縋りつくように台詞を繋げた。

彼女はただ頷き、たまに相槌を打つ。醒めた反応に見えても、彼にはそれが丁度良かった。

「でも、出来ないんです。涙が、出ないんですよ。嫌だつてのに、あの日の事が、思い出される。泣きたくても泣けなくて、胸が、苦

しいんですよ。どうしようもないのに、オレは、もう、どうしようもないのに……」

——自分では何でも出来る気になっていた。人よりちょっと違う、砂時計なんて力を手に入れて、無敵にでもなった気分になっていた。ちよっとした英雄にでもなれるのではないかと勘違いしていた。

選ばれたから自分が特別な人間だと思っていた。

しかし、こうなってしまえば何も変わらない。ただの平凡な高校生だ。

力が強いわけでもない。頭がいいわけでもない。砂時計を使って相手の行動を、一挙手一投足を把握したからこそケンカなんてものは成り立っていた。だというのに、自分では、決して何も出来ないのに調子に乗って、皆に迷惑を掛けてはいけないと、馬鹿みたいにはしゃいで学校を飛び出した。

その結果がコレだ。

なんてことは無い。ただオレが、馬鹿であることが露呈しただけだ。悲しいのに涙も出ない。乾いていると嘆いては見るが、結局残されたのは、そんな不幸な自分に酔うことしかない。

もう考えることも嫌になった。このまま衰弱死できるのならそれがいい。とにかく何も考えたくもなく、何も関わりたくも無い。

衛士はそこまで吐き出して、松本に背を向けて不貞寝する。一方的に、もう返ってくれと投げ捨てた。

「貴方はこれまで精一杯やってきたわ」

「オレなんて！ 結局、何も出来てないですよ……このザマだ。冗談じゃない……アンタが、オレの何を見て来たってんだよ……適当な事、言わんでください。オレを慰めるなんて、しないでください。いいんだ、コレで、もう、いい……」

起き上がり、振り返り様に怒鳴りつける。眉をしかめ、目を細め、精一杯涙を流そうとするのに、それは一筋として流れない。溢れさえしない。視界はあまりにも鮮明すぎた。

松本は、そんな少年の悲壮な顔を見つめて、思わず言葉に詰まる。

——最初はただのうつ病だと思っていたから、今日は軽くジャブ程度に話を聞こうと思っていた。しかしこれほどまでの拒否を見て、言葉すらも途中で支離滅裂になり、何かを思い出したように頭を抱えて俯く彼を見て、彼女は思わず口をつぐんだ。

自身に、ただ一介のカウンセラーとして課せられた仕事をするだけであろうと思って居た。いつものように親身に話を聞いて、親身に悩みを解いてあげようと思っていた。時間を掛けてでも、相手の心を解すように。

しかし彼は、そもそも初めの段階にすら到れない。話を聞く、話すことは出来ても、彼の心の内が見えることは無かった。あるいは、見えているのに、余りにも暗すぎるのかもしれない。

今見せている感情は確かに胸の奥底から吐き出しているように見えるが、だというのに衛士の今の表情は余りにも空っぽだった。

悲しんでいるのに、芯が無い。

その泣き顔は俳優がするソレよりも痛々しく、されど心がこもっていないような、ある種の滑稽さが見え隠れする。

だからこそ松本は戸惑った。

果たして他人である自分に出来ることなど存在するのか、と。

やるべきことはやる。もちろん、家族の悩みを聴くように親身にはなる。しかし松本では衛士が心を許さないのは明らかであった。

数多の男性を魅了したその肢体も、どこか母性のあるやさしい笑顔も、妖しい笑顔も、今は役にすら立たない。

——無力さが、自信の喪失が、彼から伝染するようだった。

しかし、ただ一つ気になるのはやはり彼の心の虚無さであった。泣き言の理由は分かる。そして彼自身心底悩んでいることは良く伝わった。だがその悲しみの根源、説得力のようなものが露呈しないのは、言ってしまうえば不自然であった。

人は泣くとき、少なくとも悲しむときはどんなものであれ感情を噴出させる。赤子の空腹が故に喚く泣き声も、肉親が亡くなり無念だと悲しむ大人の泣き顔も、それぞれ確かに感情が分かる。

しかし衛士にはそれがなかった。

怒っているのか悲しんでいるのか、それが混じっているのならばまだ分かるが、松本にはそれが感じられなかった。

衛士の強さ故に、耐え我慢しているからこそ伝わらないのかと考えるも、自身で泣きたいのに、とっているのだから我慢もする必要が無いだろう。

だから松本は、少しばかり感じる、否、そうなのではないかと考えた。衛士はもしかすると自分に一步距離を置いて、既に達観しているのではないか。もう悲しくともなんともなく——それ故に、肉親が惨殺されたというのに涙一つ流れない自分が嫌になったのではないか、と。

——仮にそれが真実であれば、彼はもうあと一步かもしれない。あと少しで立ち直れる。そしてそれ故に二度と挫けぬ強靱な精神を持つことが出来る。

だがもしそれが叶わずこんな状況が続いてしまえば、思い込みによって本当に精神は病んで衰弱、下手をすれば死に到るかもしれない。

衛士は今、恐ろしき諸刃の剣をその胸に抱いていた。

「……今日はゆっくり休んだ方がいいわ。何か用があったら、ナー スコールを押してくれればすぐに来るから……お休み」

しかしその事に確信を持てるわけでもない。そして別に急ぐことでもない。時間はある。

少しずつ彼を理解し、親心を持って成長と共に傷を癒せばいい。

彼女はそう考えた。

だから松本はそう言い残して彼の病室を後にする。

だが、彼女が次に衛士の姿を見ることは無かった。

——時間は過ぎて、やがて病室は宵闇に包まれる。夜の帳は果たして落ちに落ち、深夜帯。時計を見ると時刻は既に午前二時にまわっていた。

人と少しばかり接していても、自分でさえも良く分からない自分と接し続けた衛士は、この一週間で誰もが想像出来ないほど急速に腐敗し、枯れ果てる。だというのに理性は活発に思考を続け結果を生み出した。

誰にも理解されたくない腹の中はひた隠し、ただ気狂いしたと吹聴する。しかしそれも限界だった。

——オレの精神がさっぱりしたからか、それとも怪我が一定を超えて治癒しきったからか。それともただ時間が適当になったからか、免許証には試練が表示されるようになった。

『刺客を始末するまで有効』とだけ記載され、その下には前回と同様に○／とだけ表示される。衛士はあまりに落ち着きすぎる心を急かす様にして、片手にフォークを握り病室を辞す。

誰が相手か、衛士には分かっていた。あの男、名は確か若い刑事が教えてくれた『祝英雄』で間違いは無いだろう。そして病室も、その際に聞いておいた。

裸足で歩く廊下は冷え切っているために、距離が進むごとに足が痛くなってくる。衛士はそれでも構わず大股で進み続けた。

廊下は足元の非常灯だけが光源となる暗い道である。酷く静かで、ナースステーションからも離れるために人気はより希薄だった。一定間隔で存在する横開きの扉。その奥に誰かが寝静まっているのかと考えるとなんだか自分が酷く場違いな気がしてくる。最も、実際にこの場に存在してはいけないような人間なのだから、仕方無いだろうと考え、軽く笑うように息を吐いた。

やさぐれ気味に歩き続けると、やがて目の前に大きな壁が迫る。行き止まりを意味するソレを見て、衛士は緩慢な動作で右を向いた。扉の横に貼り付けてあるネームプレートには確かに『祝英雄』の文字が有り、衛士はやれやれと首を振ってから、迷わず扉を開けた。

音もなくスライド式扉は滑らかに開く。そもそも廊下が暗いため中に光が差し込むことはなく、暗闇は同調する。衛士は気配を押し殺して、自身の病室と同様であろう内装を頭の中で思い描きなが

ら、寝台へと足を向けた。

人の気配は感じない。気が立っているから探ることは出来なかった。

——初めは、こいつを殺してようやく仇が討てると思っていた。そしてこの祝自身も復讐ついでに殺してやると口にしていたから、この行動に間違ったものは無いだろう。最も祝のものは単なる妄想であるから説得力には欠けてしまうが。

しかし、時が経つにつれてそれも薄れる。ただ殺さなければならぬといった義務感だけが芽生え、強くなっていた。

縦に伸びる寝台の横に回り、膨らむ布団を見下す。この中に、あの精神異常者が居ると思うと、やはりどう考えが変わっても興奮が抑えられない。悲しむ事が出来ないのに、殺意だけは一人前に芽生える自分は他から見ると一体どういった風にその目には映ってしまふのだろうか。

されどそれを心配には思えず、自分に不安すら抱けない。なるようになれ、と衛士は呟いて、両手で握るフォークを大きく振りかぶった——瞬間。

「やっと来たか」

不意に強くなる気配は背後で出現し、衛士が振り返るよりも早く羽交い絞めする豪腕が肉体を拘束する。それを振りほどこうとする暇もなく言葉は続いた。

「遅いんだよ！　どれだけ待ったと思っているッ！？」

嬉しそうに、はしゃぐのが恥ずかしくてわざとらしく汚い言葉で怒りを演出するかのような言葉は衛士の耳元で叫ばれた。

「——んだと、テメエッ！」

上半身を激しく捻り、両腕をじたばたと振ってはみるが、その腕はまるで縄のように動けば動くほど締まる。脇下から潜り込む腕はそのまま上へ上り延髄辺りで硬く組まれる。故に顔は下を向いて、気管はその入り口を極端に狭めた。

「馬鹿が、踊らされるだけ踊らされて、何度目だア？　少なくとも

お前がシクシクしないつつウ事はよオ、覚えてんだろオ？ ああッ
！？」

「んの、話だ……っ！」

「お前さんの記憶だよ。あたま分かんたろ？ 俺アてめえサマの家族を何
回ブツ殺しゃいいんだって、覚えてんならこの意味わかんたろ？」

「わけ、わかんねえよ！」

全身を捻り飛び上がるように背後へ押すと、その甲斐もあってイ
ワイは足元を緩し背後へ後退、そのまま壁に叩き付けられる。しか
し羽交い絞めは解かれることは無く、また壁に張り付いたが故にこ
れ以降の行動はより制限されることとなった。

顔は赤く染まり、視界は暗いために朦朧としているのか定かでは
ないが、少なくともぼやけているのは分かる。眼球が圧迫されてい
るような感覚を覚えていたからだ。

衛士は小さく舌打ちをして、大きく右側へ体重をかける。イワイ
にとつてそれは不意な行動だったのか、身体が片方へよろけてしま
う。衛士はその隙についてポケットから砂時計を引き抜き、床へ落
とした。

しかしイワイはそれを利用するかのように衛士を拘束したまま側
転。腹ばいになって叩き付けられる衛士はそのまま背中_中に馬乗りにな
られ、首元を掴まされると両手でそのまま背筋の要領で力強く引ッ
張られてしまう。

「はっはー！ キヤメルクラアツチッ！」

「……っ！」

これで呼吸は完全に断たれる。また首筋は伸びてはちきれそうに
なり、首の骨はミシリと悲鳴を上げる。衛士は慌てて両手で床を叩
くと、イワイは悪趣味な笑い声を上げえた。

「おお？ ギブギブ？」

イワイは悪戯に言いながら力を緩める。辛うじて息が出来る程度
まで首を下げて衛士へ発言許可を与えたようにも見えた。

「何が言いたいんだよ、テメェ！」

呼吸を乱しながら怒鳴り散らす。されどイワイは永続的な余裕を孕んで見下した。

「お前は俺を殺さなきゃ終われない。俺だって殺されなきゃまたお前の家族を殺さなくちゃだよなァ!? 後はてめえサマで考えろ! その頭は飾りでついてんですかァ!?」

「テメエ、なんで、知ってんだよ……テメエがッ! なんでその事を知ってんだよ!」

「知ってる? 馬鹿言っちゃイケねえな。素直に答えろ、出なければ本^{マジ}当に殺すぞ……。お前、この世界を何度繰り返した? どこまで記憶している」

「なっ——!?」

「答えろォ! 覚えてんだろ? いつもみてーに、馬鹿みてーに泣いてネエってことはよォ!」

——このイワイという男は精神異常者だと聞いていた。そしてそれを裏付けるように、あんな気が狂ったような行動をしていたのだ。だからこそ家族は殺され、だからこそこんな心情になった。死にたくなって、でも死ねなくてどうしようもなくなった。

だというのに、この男は喋れば喋るほどまともな面が露呈する。そして、それ以前に——この男は、時間回帰の事を知っていた。

何度、と聞く辺りこの男は全てが開始した時点から全てを知っているのだろう。

そして——その言葉から導き出されるのは、衛士が既に何度もこの男と出会っていて、そして何度も家族が殺されていたという事実が存在すること。

今まで、初めて拉致されたと思っていたことは実は初めてではない——かもしれない。

事実今回は初めてなのだろう。だがそうでないのかもしれない。しかし結果的には家族惨殺は繰り返した事柄であり、そしてここまですで、幾度か訪れたのもまた事実。

全てを思い出し記憶を引き継いだと思っていた衛士は、その実都

合の悪いものだけはすっかり切り捨てていたという事を思い知らされた。

だが本能的というべきか、潜在的と言うべきか、やはり体験したという事は確かにこの身に刻まれているらしく、それ故に家族が死んだことに対する衝撃は薄れていたのだろう。

そう考えれば、イワイの台詞はなんとなく意味が通じてきた。衛士はおとなしく男の言葉に従って、繰り返した記憶を数え、口にする。

「ご……五回、今回で六回目だ」

「ごんねえくん！　せえかいはある、三六回でしたあ！」

はしゃぎ頭上で大きく拍手する彼は、直後にすぐさま静まり返り、耳元に顔を近づける。吐く息が耳に掛かり、不快なむず痒さが襲い掛かった。

「そしてお前はこの回数の中で一度も死にはしなかった。だがな、ここまでたどり着く事も一度も無かった。入院して、そしてこの時間に、怪我を考慮してんのか気紛れか知らねえが、試練が表示されるわけだ。が、お前は呑気に、馬鹿みてえにシクシクワーワー看護師困らせて泣き喚いて、時間切れ。ゲームオーバー。冗談じゃねえぜ。こっちだって楽じゃねえ。ココまで耐えたんなら踏ん張ってみろや！　てめえサマよオッ！」

「人の詮索ばかり……テメエは何者だ！？　なんで——」

疑問を怒り交じりに投げつける。その中で言葉は遮られて——砂時計の五分が経過したことを教えた。

直後に衛士の肉体は羽交い絞めされ拘束される。すぐさま酷い苦しみに襲われて、しかし背後から男の言葉は構わず続いた。

「同類つつウ言葉が一番近い。テメエの道具はどうやら幾らかの短い未来を体験するみてえだな。んで、その砂時計を設置した時点に時間は巻き戻る。無論その時点であつてめえサマは未来を識^しってるからヨユーって奴か」

——最早衛士は驚くことすら出来ずに居た。

イワイが記憶を引き継ぐことは大方の予想が出来ていたために、予想通りと言うものであったから然したる驚愕は無い。されど、ただ一度の砂時計の使用によってこれほどまで、というか砂時計の全てを知られる事までは想定して居なかったのだ。

つまり、この時間回帰に関する全てに於いては、イワイの方が知識にしても思考力にしても、圧倒的に上であると考えてまず間違いは無い。

だから衛士は、殺気だけは放ちいつでも殺せるよう隙を伺いつつも、出来る限り情報を聞き出そうと思うが、何故だかそれが出来ずに口ごもってしまう。

「ま、てめえサマだけ知られてるつつウのもフェアじゃねえ。教えてやるよ。俺の道具……つつか、服^{スーツ}だけどな」

羽交い絞めする腕は間も無く解け、前へ突き飛ばされたかと思うと更に尻を蹴飛ばされる。衛士は前屈みになって、されど転ばぬようスキップでもするように大股で幾度かブレーキをかけると――照明は、衛士が点いたと知覚する暇も無い速度で部屋全体を照らしていた。

衛士はようやく止まり、振り向く。すると壁を背にするイワイは奇妙な――黒色の戦闘服のようなモノを身に着けていた。

しかし、その外観は正確に表すならば耐Gスーツのようなモノであり、上下の区切りは無く前面に首筋から股間に向けてジッパーが伸びる。そして首元はタートルネックのようにたわむものの首から上との隙間を作らない。振り向くと、そこには脊髄がスーツにくつきりと浮かび上がっていた。

「触れた者、つまり対象者の時間がある程度停止させられるってモンだ。これも、”奴等”にとってみりやどーでもいい副産物^{ゴミ}なんだろうーけどよー」

「……ゴミ、だと?」

「そそ。ま、ゴミつつウのは言い過ぎかも知れネエが、少なくとも眼中には無えモンだろうな。なんせ、こんな馬鹿げた事が出来る――

「そうだ！ てめえよ、時間切れがどうのこうの言ってたよな。もしかしてテメエも免許証を持ってるのか？」

はっと思ひ出して衛士はイワイの言葉を遮る。彼はやれやれと肩をすくめて首を振るように、呆れて衛士を見下した。彼の身長は衛士より頭一つ分高いために、その動作がより際立っていて、衛士はむっとする。しかしイワイは、茶化すわけでもなく素直に答えた。

「ンなもん無えな。時間切れつつウのは多分、この世界の事だ」

「世界……？」

「ああ。この世界自体が長く保たないんだろうよ。俺の記憶が正しけりゃ今日は試練こいつが始まってから九日目だ。五月二三日からで、二四、二五はてめえサマが呑気に連れ去られて……二六日に俺と出会い、それからゆーいんせーかつだ。三〇日におトモダチが会いに来て、今日カウンセリングを受けた」

そして今日は五月三一日……否、日付は既に六月一日へと変わっている。時刻は既に二時三〇分を過ぎているのだから。

「この世界はてめえサマ基準で回ってる。試練に失敗すりゃなんども繰り返すし、成功すりゃ難なく続く。だが試練に制限時間があるように、この世界は六月一日の午前五時までしか存続できない。てめえサマが無様に泣いて明かした夜で世界は終わり、五月二三日に巻き戻るわけよ」

「並行……世界パラレルワールドって、奴か」

「ああ。てめえサマの分岐点は巻き戻って目を覚ました午前五時つつウ事になる。試練つつウのが成功したらこのまま続くのかどうなるのかまでは知らねえがな」

「なんで、お前がそんなに詳しいんだよ！ お前も、何か課せられてここに居るのか！？ 例えば……俺の、家族を殺すこととか……」

衛士が毒でも堪えるかのような言い苦しさを耐えて吐き出すと、イワイは心の底から理解できないように疑問の表情を浮かべる。そ

れから遅れてやってきた認識に、いつものようなへらへらの薄い笑みだけを浮かべた。

両手をスーツのポケットに突っ込み、壁に背を預ける形で彼は言葉返す。

「俺に課せられた試練はねえ。いや、正確には”あつた”だな。俺は失敗した。脱落した。もっとも自主的なものだがな。嫌になった……詳しく言えば、面倒になったんだな。だから逃げ出したんだが——暫くして、気がつくと俺はここに居た」

しかし世界に特別な変化は無く過ごしていたが、突然時間が五分だけ巻き戻ったり、巻き戻った分だけ自身の行動も無かったことにされたりなどの、世界の不具合に違和感を覚えた。しかしこれも、“奴等”の仕業だろうと特に何も考えずに過ごしていたところで——不意に、日時が約十日巻き戻った。

何度も、何度も。いつしか行動が目立つ、自身よりいくつか年下の少年が時を——五分間の時間を巻き戻すことに気がついた。そこでイワイは、“奴等”が自分以外の、自分の代わりを見つけたのだと理解する。そしてその少年も試練に突き出されたのだと認識した。やがてそうすると、何度も繰り返す内に使命感じみたものが頭の中から染み出した。それは時衛士と接触せよ、との事である。だから彼は行動し、衛士の自宅を見つけて——。

「人を殺すってのはよ、あんま体験できねえだろ？　んで、どーせてめえサマも何度も躓くわけだから、どうせだから殺^やっちゃまおうってな。初めて会ったときは、ようやく来たかと思ったんだが、どうやらてめえサマは繰り返してる事に自覚が無かった。悲しかったね。未熟すぎんだ。与えられた道具も使いこなせねえし」

「……その”奴等”ってのはこのオレを利用してお前を殺そうとしてんのは良く分かった……。だがな、テメエ！　珍しい体験だから殺しただあ！？　ふざけるのも大概にしやがれ気狂い野郎がッ！　お前なんざ同類でもなんでもない、ただの殺人鬼だ！　利用されてようが関係ねえ……オレは！　オレの意思で！　テメエを殺すッ！」

「ハハハッ！ いいねえその調子！ 俺だっていつまでもてめえサマの世話ばっかで飽きてんだ。泣き顔も胸糞悪イ！ その顔その顔！ かって来いよ、門限^{じかん}が来ちまわねえ内になアッ！」

——このイワイと言う男を、一瞬でも信用し、もしかしたら良い奴なのではなかと疑った自分に腹が立つ。

一瞬にして真赤に染まりあがる視界は、毛細血管が破裂したのかと思うほど朱色であった。イワイの姿はドス黒く瞳に映り、衛士は力強く床を蹴って彼に飛びかかる。

イワイは依然として頭の大事なネジが外れたかのような甲高い笑い声を上げて——瞬間、前屈のような姿勢で走り出す衛士の顔面へと目にも留まらぬ拳を肉薄させ、避ける間も無く、またそれを知覚する余裕も無いままに頬を抉る。

衛士は寝台の方へと身を投げる用にして吹き飛ぶが、その身体は丁度空中に浮かび上がったところで停止する。イワイはそれを見ながら思わず、殴り抜けた拳を垂らして眉をしかめる。黒い腕からは血が滴り、純白の床に真紅の華を散らせた。

拳骨はまるで鋭い何かで抉られたかのように、頬に触れた箇所から手の甲、手首にかけて肉が裂け、骨が露出している。漆黒のラバーグローブは容易に裂け、そして裂けるとすぐさま肉体に直接深い傷を作り出す。そういった”仕様”になっていた。

イワイは注意深く衛士を見ると、頬からは赤く濡れた鋭い三本の牙——否、衛士が病室へやってきた時に所持していたフォークが、その頬の肉を貫いて突き出ていた。

即ち衛士はイワイに気付かれぬように口の中にフォークを含み、そして男が頬を殴るのを待っていたのだ。

——これを考えて実行するのは恐らく、このスーツの説明をしてからだろうが……。

イワイは嘆息する。

停止出来る時間を経過させた衛士は、まるで動く事を思い出したように吹き飛び、やがて寝台の上に叩きつけられた。

「んな事を実行^{やる}なんて、とんでもねェ馬鹿か、気抜けか……気狂いだ」

「~~~~ッ！」

片方からは切先が、片方は内側で手に持つ部分が激しく肉を抉る。そこで血と唾液が染み渡り、衛士はフオークを口の中から吐き出し捨てながら、痛みに耐えた。寝台の上に唾を吐くと純白のシートは一部分だけを真赤に染めて、衛士はそこを踏み躪りながら立ち上がる。

息を吸い込むと呼吸さえ染み、頬に焼けるような痛みを覚えた。

「ヴう……、デメエ、そのスーツ、力^{ちから}が……」

「肉体強化って言えば格好良いよな」

「卑劣……」

「条件が良いだけだろ？　だったら、てめえサマの砂時計も使い方によれば十分卑怯だと思っただけどなア？」

——砂時計は個人だけが未来を知る事に強みがある。

砂時計の効果に気付いた者は大抵そういった思考に走る傾向がある。イワイに到っては既に道具を与えられて居た身だから、既に記憶継続を自主的に行える人間だから砂時計を一度使用しただけでその効果を知る事が出来たから、それは顕著であらう。

確かに道具の使い方であればイワイの方が何枚も上である。されど、砂時計には使用の癖がある。故に、使いこなせさえすれば対象の時を停止する、身体能力の向上を可能とするスーツなどは目でもない。

砂時計の強みは、必ずやり直せると言う事に或る。

様々な行動を実験として行い、そしてその中で改善点を視る。後悔しきれぬ事をしきれただけ体験し、そしてやり直した五分前に後悔をしない、出来ない行動に切り替える。また、記憶を引き継いでも肉体の位置関係は五分前に戻ってしまうこともその特性だろう。

しかし問題は、衛士がこの使い方に気付けるかどうかであった。だがどうあれ、既に右拳を封じられたも同然のイワイの戦力は殆

ど半減。故に衛士は、そこはかたなく感じていた敗北の気配の途絶に気がついた。

故に、痛みに苦しむ時間を切り捨てて、立ち直ると同時に先ほど同然に姿勢を低くして肉薄する。

「学べよクソ小僧ッ！」

蔑み捨てるような怒号は失望の念を孕んでいる。イワイは腰を落として、前回と全く同じに上向きの左拳を、外側から衛士の頬へ目掛け曲線の軌道を描いくように迫撃するが――直後、衛士の顔に浮かび上がる笑みを視て、イワイはもう止めることが不可能となった攻撃に後悔が過ぎった。

接近する拳は空を切り、イワイは脇を無防備に曝け出して身体を捻るように棒立ちする。衛士はその手前にて両足で床を掴むように停止したかと思うと、そのままポケットから砂時計を取り、落とす。そして間髪おかずに、貫き手を脇腹に突き刺した。

されど、両手の包帯の程度は幾分かマシなほど、フォーク程度なら持てるくらいには軽度になっているものの、そもそも骨折と言う怪我がそう容易に完治する筈が無い。故にヒビが入りひしゃげた骨は悲鳴を上げ、衛士は苦悶の声を押し殺しながら思わず跪いた。

痛みは無論、予想したものを大きく下回る程度。故にイワイは顔面の位置が大幅下がる衛士目掛けて膝を素早く振り上げる。

直後、膝蓋しっがいに鈍い衝撃が伝わり、衛士は直撃した鼻、口を切り血を振り撒きながら背後へ大きく仰け反った。イワイはそれでも攻撃の手を休めず、さらにステップを踏むように脇へ回り込むとすぐさま、衛士の後頭部を右手で支え、平手の指先だけを折り曲げた形を取り、喉元を突き刺す。

喉仏に触れ、それを押し潰す。嫌な感触が伝わるもそれに対して感慨に耽る暇も無く、衛士の噴出すような胃液が腕を濡らした。すえた臭いが鼻につき、やがて俯き咳き込む衛士の顔面を鋭く蹴り上げ、頭頂部を、その垂直に振りあがる踵で叩き落した。

衛士は発情期の猫のように尻を突き出すようにうつ伏せに寝転が

り、顎を床につけ、両手を身体に添わせるように垂らして意識を手放して――。

衛士は見る。大きく、この上ない隙を露出するその脇腹を。黒塗りの耐Gスーツのようなソレはあらゆる衝撃を殺しそうに見えるが、ソレ自体には然程防御力というものは存在しない。いわば、ただの服と同様。少しばかり強固な素材で繕うだけの、特殊な能力を持つ衣服だ。

だから彼は口元に笑みを浮かべた。

この、ただの人間として対峙するだけでも手強い男を相手するに、衣服によって一般人の攻撃力が通用しなとなれば最早打つ手が無い。しかし十二分に通用することが分かった今、ここで足を止める理由は無い。ここで動きを止められる勇氣は無い。走り、拳を作り、敵を打ちぬく。今出来るのはそれだけなのだが――。

衛士は飛び込むようにイワイへと肉薄すると、そのまま移動の最中に身体を捻り、右腕を折り曲げる。手を胸にあて、そこから作り出される肘の刃をより鋭く研ぎ澄ますが如く力強く脇を締め――突き刺す。脇腹は筋肉で鍛えられているも、無意識の箇所故に柔く、エルボー猿臂は容易に袂り衝撃で貫いた。

イワイは目を剥き口を開く。口腔から漏れ出す体液を床に撒き、さらなる追い討ちを受ける。

衛士は肘を突き刺したまま足を素早く振り払う。横から掬われた足元は簡単に床から離れて宙を踏み、イワイの身体は傾き、伸ばした手で衛士の腕を掴むも、簡単に振り払われて背中を床に打ち付けた。

「良くやった、と言いたいがな……」

しかしそれ以降、さらなる追撃は一切無く――衛士はイワイの足を払ったままの体勢で硬直していた。

イワイは嘆息しながら立ち上がる。しかし吐いた息を飲み込まざるを得ない状況を見て、首を振るように、ある意味で感心するよう

に微笑んだ。

衛士の足元に再び設置されている砂時計を見たイワイは、既に足払いからの行動を思考から肉体へ伝染^{うつ}して居ない様に重心を後ろに取る彼の顔面を殴る。顔は歪むが、しかし衛士は動かない。その痛みは彼が動き出したと共に襲い掛かるが故だった。

しかしイワイの目的はそれではなく、再び触れた事によって停止させる時間を数え直させる事にある。

「なるほどなァ。先を見る、未来を予測する……ただ体験^{シミュレート}するだけじゃ無エ。そいつが必要か」

イワイはそれから肩をすくめて再び衛士の全身を舐めるように見ると、ズボンのポケットに膨らみがあるのに気付く。迷いも無く、躊躇いも無くそこへ手を伸ばすと、指先に覚えるのは金属的硬質。ポケットへ手を突っ込んで引き出すと、掴み上げたのは、彼が自分の意思で捨てたはずのフォーク——否、隠し持っていた一本のソレだった。

「なるほどネエ」

イワイのスーツは持ち主の肉体と同化する。つまり使い主に依存すると言う訳だ。

しかし衛士が持つ砂時計はただ個体で独自の、ただ一つ的能力を駆使する。勿論使い主が使わなければ能力は作動しないから使い主に依存すると言ってもそう大きな間違いではないが——面倒な道具だ、とイワイは吐き捨てた。とてもこんなものは、唯一渡された道具であろうとも、率先して使おうとは思えない。

フォークを寝台の方へと投げ捨ててから、二度目の停止時間の更新が不可能であるために動き出す衛士をイワイはただ、右手を垂らし、左手をポケットに突っ込んで眺めていた。

衛士は頬を殴られ首を左へと捻り、それからゆっくりとイワイへと向き直る。

両者は何かが通じ合ったように、それぞれ口角を上げてくつくと湧き上がるように笑い始めて――。

——かくして時間は、衛士が砂時計を落とす直前に巻き戻る。

倒れるイワイに素早く跨り、両腕を踏み潰す。ポケットからフォークを取り出し、上腕に膝を落とすようにすると、衛士の股はイワイの胸元を圧迫した。

「ハハハッ！ やつとか、てめえサマが、ようやく俺の命を！」

「運が良かったってな。お前は運が悪かった」

「気持ち悪い、謙遜なんて似合わねえな。完璧じゃねーが、砂時計の使用機会は良いんじゃないかねえか？ 俺は少なくとも意表を衝かれたが」

「お前……」

「けっ！ 揺らぐんじゃねエよてめえサマ！ 俺はテメエの家族をぶっ殺したんだぞ……終わらせたくねえのかよ！ もしかしたら記憶を引き継げない、じゃねー……、もしかしたら記憶を引き継ぐかもしれないっ—toに考えろ。てめえサマはまた味わうんだぞ？ あの虚無感。無力さ。分かってんのに自分ではどうにも出来ない絶望間に合わないと分かるのに高まる焦燥……ッ！」

「お前が、殺さなきゃいい話だ！」

「殺さなきゃてめえサマは俺を殺さねえ！ まだわかんねエのか知恵遅れ野郎！」

イワイは凄む。心臓に響くような低い声は、ただそれだけで誰もを近寄らせぬ威圧があった。

苛つきは彼の怒りを呼び起こす。されど煮えきらぬ衛士の言葉は、さらに様々な感情を呼び起こしていた。

——早くしなければ時間制限が来てしまう。そしてそれを終わらせるためにはイワイが死ななければならぬ。

彼がそれを知るのは、特にこれといった問題も無いままに彼と出会った時の事であった。

「こんな……っ！ こんな出会い方さえしてなければ……！」

「馬鹿が。こんな出会い方じゃなけりゃ何も始まらねえんだよ愚図」
「——だがな、オレはお前に心を許さない。どうあれ、お前の事が

少しでも分かったような気がしたけど……お前が！ オレの家族を、家庭を！ ブチ壊した事実ことに変わりは無い！」

「そうだ咆えろ！ それでさっさと——」

衛士が両手で握るフォークを振り上げる。イワイはもう喋ることを諦めた。

彼は無理矢理に昂ぶらせた魂でそのまま肉体を動かし、両腕に力を込める。折れた指が脳みそを掻き乱すような激痛を催させるが、今の興奮状態ではとても痛みを感じている余裕は無かった。

衛士はフォークを振り下ろす。

露出していた白い肌は銀光りする鋭い牙に突かれ、伸び、裂ける。途端に甘い臭いが鼻腔を刺激する赤い血が飛び散った。

イワイの狂った笑顔が血に染まる。フォークが開けた首の穴から空気が漏れ、血はブクブクと泡を吐く。同時に流れる血は共にそこを中心として血溜まりを作り出した。

残るのは返り血にそまる衣服と、その顔。そして手に残る、恐らくこれ以降忘れられないだろう、殺害した感触。

衛士は喉に生えるフォークを眺めながら、背後から怯えた声を上げながら迫る看護師の足音を聞きながら、いつかした、早乙女美琉の父親との問答を思い返した。

——彼はこう言っていた。『君は犯罪を犯すとしたら、どんなものだと思う？』と。

そしてオレはソレに対してやるせなく答えたのだ。『人でも殺してしまいたいそうだと。』

緊張が緩み、意識の定着が朧げになる。視界がぼやけるなかで、全ての、拘束や緊張、それらの開放感を覚える衛士は——この、三六回もの数を繰り返された約九日間を脳裏で蘇らせた。

すると間も無く、そうなる事が当然のように瞳からは涙がこぼれ始めて——やがて意識は消滅する。

衛士はイワイに重なるようにして倒れ、それから程なくして衛士だけが看護師らに発見されることとなる。その時点で、既にイワイ

の存在を知る者は、その記憶から彼の情報を緩やかに消滅させていった。

最終日

目を覚ますと、世界は未だ宵闇の中に在った。

顔を上げようとすると、頬が何かと接着しているようだった。衛士は顔を机から引き剥がすようにしてようやく立ち上がる。椅子を引いて、油塗れになるテーブルをさするようにしてから身体を動かすと凝り固まった筋肉が鈍くも鋭い痛みを突き刺す。そんな激痛に少しばかり、深呼吸をして気を落ち着かせてから、立ち上がり、大きく伸びをした。

——そこは自宅の居間であり、ケータイを確認すると時刻は既に五時〇〇分であった。

寝巻きではない衣服は尋常でない汗を吸い込んで不快感を覚えさせている。衛士は顔から、身体から吹き出る汗をそのままに、気分でも変えようと玄関へ向かい、靴を履いて外に出た。

履き古した靴は気がつく汚れ、黒ずんでいる。しかし履きなれたものであるために心地よく、また動きやすかった。

大きく息を吐くと吐息は白く染まる。同時に、全身に突き刺すような寒さが染み渡った。季節感逞しい気温に、流石に薄着だったかと下着にシャツ、ジーンズという気軽な格好に苦笑する。

——やけに、頭がスツキリとしていた。何かに解放されたような気分だった。

あつという間に汗も引く寒さに身を抱きながら、衛士は閑静な住宅街をゆっくり歩く。夜の散歩も乙だと呟いた。

鍛え抜かれた肉体はプロレスラーのように鋼鉄が如きでは決して無いが、それでもその細身に似合った締まる筋肉を纏っている。されどやはり寒気には勝てないのは、仕方が無いことだろう。

世界はやはり、少なくとも衛士の目に映る範囲は平和に見えた。どれだけの時が経過してもそれだけが変わらないのは、彼にとっての救いと思えた。

冷たい空気を胸いっぱい吸い込むと、目は冴えて心はより落ち着きを持つ。

衛士は等間隔で並ぶ街灯の下で立ち止まり、冷めた目で誰も居ない先を見つめながら呟いた。

「今は気分が良いんだ。邪魔をしてくれるな」

口元には薄い笑み。されどその生気の無い瞳が全てを物語るようだった。彼の友人がその感情の大きな隔たりを見れば狼狽すること請け合いだろう。

——現在は三月三日。”アレ”から半年以上が経過した。試練の三ヶ月前ではない。試練から九ヶ月近くが経過したのだ。そして記憶はしっかりと、衛士の脳に刻まれている。

しかしそれは飽くまでも記憶だけである。

例えば、何気なく朝食を食べたとしよう。しかし味が無い。されど腹が膨れる。時間が経って昼になり、空腹を覚えた。その時に、朝食を食べたはずなのに、と何を食べたか思い出す。そうだ、ご飯に焼き魚、それと味噌汁を食べたのだ。ではどのような味だったのか？ 分からない。味が無かったから。

彼はつまり、そんな記憶だけを持ち合わせていた。

友人達と共に、学園での様々な行事——体育祭、文化祭、球技大会、修学旅行、夏休みには海に行き、元日には初詣に行く。誰々とどんな会話をした。それは覚えている。だがその時何を思ったのか、何を考えたのか、分からない。

ただ行った、体験したという事実だけが記録される。それだけだった。

衛士が鮮明な感情を覚えているのは、六月一日以前までの事。それ以降、今に到るまでには泣き笑い、怒りもしただろう。しかしその熱は一切無い。だから感慨に耽る事も出来ず、ただ遙か昔の事でも思い出すように懐かしむだけだった。

——恐らく、巻き戻した日数分だけが強制的に早送りして月日を経過させたのだろう。

そうしなければならなかったのか、これもまた試練の一つなのかは、定かではない。

しかし衛士が家族を失ったのは事実であり、そしてそれを悲しむ間も無く既に九ヶ月以上が経過^{なが}れていた。

イワイ・ヒデオは死んだだろうか。衛士は自身に問うが、否であると即答される。

奴のスーツは身体能力を向上させる。肉体を強化することだろう。そしてそれ故の強靱な肉体を持つ。だから、治癒能力も、何かの冗談かと思いたいくらいに強化されている筈だ。そしてどちらにせよ、この”道具”の使用に慣れ、ないし素質を持つ人間をそう簡単に手放す、手放せるはずが無い。

イワイもまた、仕方無しに強いられていた一人――されど、未だに許せる相手でもなかった。

過ぎた月日は全てで約二七六日だろう。九日間と言う時間制限を過ぎたのか三〇回。イワイの言葉が正しければ、だが。そして一日目で脱落したのが六日間。そして六月一日から加速が開始したのであれば現在が三月二日でなければならないのだが、砂時計を使用した分だけまた時の加速する分が追加されると考えればこのくらいが妥当であろうと考えられた。

「試練の中で既にノルマの善行一〇〇回は達成されている。トキ・エイジ。貴様はこれよりこちらへ来る権限を得た」

女性の、澄んだ声が透き通るように空気を響かせる。衛士は嘆息しながら冷えた手をポケットに突っ込んで、煌めく星を見上げて、オリオン座を見つける。最も彼が知る星座はそれ以外には冬の大三角形しかなく、無限のように広がる空でそれを探すには見慣れぬ衛士にとって苦難以外の何物ではない。そんな彼は首を振って諦め、俯いた。

「こちらってどちら？ 最低限説明すべき事すら説明しないつーのは、どうなのよ」

「貴様の理解力は驚愕を隠せぬ程に平均を下回っている。話すだけ

無駄、と言う事だ。身をもって覚えろ」

「てめえじゃ話にならねえな。ミシェルを呼べ」

「彼女には既に貴様に対する記憶は無い。黙って——」

不意に心が大きく震えた。

それはまるで——初めて、家族の死体を見つけたときのような動揺だった。

思わず振り向き、数メートル後方にある街灯の下に立ち尽くす女性の姿を睨んでしまう。しかし動じない彼女へと、怒鳴り散らすように疑問を投げた。

「どういう、事だよ！」

褐色の肌には白い短髪が良く目立つ。片目を隠すような髪型で、服装は以前ミシェルがしていたものと同様の、ウェットスーツのよな服。微動だにしない彼女は、キリッと引き締まる口元を緩めてから、吐息を白く染めて言葉に応じた。

「知りたければ付いて来い。怨念を晴らしたくば……」

「黙って話せよ、オレの質問に！」

眉間に皺を寄せ、いつしか影になる眼窩には赤く染まるような殺気が漲っている。されど彼女は涼しい顔で肩をすくめると、同様に睨み、威圧を持って衛士に食い下がった。

「愚図が。貴様は招かれども客人ではない。丁重に扱えとの命を司っては居ない。私がここで貴様の質問に答えてやるのと、力づくで連れ行くのではどちらが容易か判断^{わか}らないか？」

「テメエを倒せば話して貰えるって事だな」

その場に捨てるように呟く衛士は、間髪おかずに駆け出した。その速度はイワイとの戦闘で見せた素早さの比ではなく、俊敏に掛ける衛士は瞬く間にして彼女との距離^{はたち}を縮める。

その一方で褐色の、二十歳前後の風貌を持つ女性はそんな衛士に苛つきを隠せず、太腿の、^{リホルバー}備え付けられているようなホルダーに差した拳銃を引き抜いた。

「低脳……自分の都合しか省みぬ阿呆、何故分らない。今の言葉

で、何故話せぬと理解できない」

噛み締める白い歯の奥で怒りを孕む言葉が漏れ——閑静な住宅街に乾いた銃声が鳴り響く。

衛士は咄嗟に横に飛ぶ。視界が反転し、そしてすぐさま元に戻る。アスファルトに叩き付けた身体に擦り傷のような僅かな痛みが残るが、それ以外に外傷は無い。しかし何かがあるか分からぬ故に、ポケットから取り出す砂時計をその場に叩きつけて、再び姿勢を低くして走り出した。

その瞬間——。

音もなく飛来した何かが、左肩に突き刺さる。強い衝撃が、衛士の前に肉体を押し出す踏ん張りなどを容易に一蹴せしめて仰け反らせ、衛士は勢い良くそのまま空を扇いで、滑って転ぶように背中を叩き付けた。

直後に襲い掛かるのは激しい熱。熱した鉄棒でも押し付けられるような灼熱を左肩に覚え、思考はする余裕を奪われる。間も無く首は流れた血に浸り、生温かさを覚える。だというのに全身からは徐々に熱が引いていくのが良く分かった。

「咄嗟の判断、そのセンスは良い」

冷たい銃口が額を叩いた。気配が近づき強くなるのに、衛士は凄まじい勢いで暗く、何も見えなくなる視界の中で必死になって彼女を探す。やがて見つけるのは、輪郭を曖昧にする人の影だった。

「だが次のチャンスは無い。もし私と対等に渡り合いたいのなら直感だけでは不十分だ。頭を使え」

——それから暫くしてから、衛士は再び姿勢を低くした回避直後の体勢から意識を引き継いだ。

状況は発砲後。そして銃口は衛士へと向き始めている。

衛士は乱れる呼吸をそのままにして再び横に飛び込むように前転する。と、身体が道と民家を遮る壁に衝突し、停止する。その直後に凄まじい速度で飛来する弾丸が地面に打ち出され、アスファルトが砕けて破片となり周囲に飛び散る。

衛士は発砲音の無い射撃に混乱しながらも立ち直り、砂時計を設置することも忘れて再び走り出した。

——相手の拳銃は確実に与えられた”道具”に違いない。その効果は時間差の発砲……だろうが、焦燥に駆られてその時間を確認できては居ない。

だが、本当に効果はそれだけだろうか？

そしてどちらにせよ、もう一度避けられるだろうか？

本当はただ二つ返事で頷いて、彼女の後に付いて行き、向こうに着いたところでミシエルの近況を聞けばそれで満足なのではないだろうか？

だが、もしそれで良いのならは何故イワイは全てを放棄する決断をしたのだろう。裏側を、本性を垣間見たからではないだろうか。

だがどちらにせよ、衛士に抗える力は限られている。

彼は交錯する思考に振り回され、しかしそれを振り払うかのように一直線に走り出して——発砲音で鼓膜を揺らがされる。虚空を貫く弾丸は、一瞬にして右耳の耳たぶを抉り去っていった。

灼熱が襲う。激痛が走る。

しかしそれだけでは、衛士の足を止めることは出来なかった。

彼は諦めない。既に、もうダメだなんて呟きすら失われていた。

でも未だだなんて口にする暇もなく、判断は即座に行動として反映される。

彼女は再び弾丸を込める。衛士は既にあと一步でその硬く握った拳を突き刺せる距離に迫っていた。が——振り下ろす拳銃、そのプラスチックの銃床が衛士の頭部に直撃する。

不意の攻撃に、されど歯を食いしばって拳を振りぬくが、ソレは対象を打ち抜けない。身軽な足捌きによって瞬く間に衛士のすぐ脇に回りこむ彼女は肘を振りぬき、側頭部を打撃する。

さらにくの字に折り曲がる肉体、その腹部に膝を振り上げ強打。

衛士はなりふり構わず両腕を伸ばして乱舞するが、瞬時に頭を屈め、頭上でやり過ごす。そして正拳を握ると迷い無く立ち上がると同時

に上昇を目論み、顎を打ち砕いた。

衛士は目を剥くが、空には星が見えなかった。身体に妙な浮遊感を覚え、直後に凄まじい重力が襲い掛かる。彼はそのまま立ち直ろうとするが、弱々しく震える膝は簡単に崩れ、跪く。

今度は後頭部に銃口が突きつけられた。

「五分前よりダメだ。蛆虫が、所詮この程度……正直、期待外れだ。死んだ家族に顔が合わせられないな？」

くつくつと彼女は肩を震わせて笑いに耽る。だが衛士に見られていないから油断をして居るのか、その目は一切笑っていないかった。

が――不意に銃身は掴まれ、後頭部に押し付けられる。それと共に衛士は立ち上がり、振り返った。銃口は額に移動し、衛士はそれを引き剥がそうとしない。女性はそんな行動に怒気を増幅させられたのか、彼女もまたさらに押し付け、引き金に指をかけた。

「笑いたきや笑えよ……だがな、挑発するなら上手くやれ。イワイみてえにな……中途半端は、下手な殺意をかうぜ」

銃身を掴んだ手を下に潜り込ませて、身を沈めると同時に上へ弾く。真っ直ぐ突くように加わっていた力は、それ故に彼女の身体を僅か前方に傾けさせる。衛士は間抜けに口を開ける彼女の横面を眺めながら拳を握り、立ち上がり様に左拳の腹を自身に見せるよう構え、手首にスナップを効かせる様に頬を目掛けて振り払う。

放たれた裏拳は素直に彼女の頬に吸い込まれ、彼女の身体は大きく傾く。その中で彼女が振り上げた足は手加減も無いままに衛士の鳩尾を膝が貫き――両者はそれぞれ地に伏せ、這い蹲るようにして互いを睨んだ。

「私はそれ程器用じゃないんでね」

「どうでもいい。てめえの事なんざな」

大地を踏み躪るようにして立ち上がり、腰を落として彼女に構える。だが一方で、彼女は嘆息と同時に素早く銃口を衛士に向けて――彼よりやや離れた虚空を打ち抜いた。それが衛士を狙ったものであれば見事に心臓を撃ち貫く位置である。

銃声の余韻を空間に残してから、太腿のホルスターの拳銃をしまう。だがその眉間に皺を寄せたままの険しい表情を崩さず、衛士に向き直った。

「この世界のトキ・エイジはココで死んだ。貴様とて分かるはずだ。既に、この世界で普遍的な人生を歩むことが出来ないのは」

「ったく。問答無用だな……」

されど、どちらにせよ衛士は彼女の後についていくつもりだった。仮に今回の行動で心証が悪くなり切り捨てられたとしても、縋るように、だがその弱さを見せぬように食い縛って追いつく予定だった。衛士は首の骨を鳴らして、立ち直る。彼女は続けた。

「アンダーワールド……我々は此方の世界をそう呼んでいる。覚えておけ。そして以降は簡易な説明に入る。貴様の生活に関わることである為に、聞き逃すことをしてくれるなよ」

「あいよ」

もう緊張感はない。耳の痛みも、既に麻痺してしまっている。

——女に弱いからなのか、そもそも殺意や憎しみが無かったからか、衛士は早くも彼女を許していた。しかしそもそも、許す以前に許さないという状況が無かった。ただ言葉遣い、その発言に怒り心頭しただけであつたのだ。

そんな衛士に彼女も引き締めた眉間を緩め、無表情に戻る。街灯の下で照る白いルージュの塗られた唇は静かに言葉を紡いでいた。

「向こうに着いてから二日間の休息を与える。衣食住は此方で寮を用意してあるから其方で済ませることだ。そして本来ならばミシエルが二日間で覚えるべき事を教えるのだが、生憎此方の都合でそれが不可能となった。それ故に、担当は他の者が付く」

「イワイは？」

「……奴の言葉を信じるのは勝手だが、鵜呑みにはするな。奴に限った事ではないが——兎も角、イワイ・ヒデオは既に此方側の人間だ」

——ならば、イワイが衛士の両親を殺したのも、あるいは彼女等

の命令なのかもしれない。

ただ何もせずに見ていたのだろうか？ 彼がどんな考えであるの行動に到ったのか、その本心は分からないが、少なくとも止められる立場であったのに、それをしなかった。

オレはそんな所にこの身を委ねようとしている。だというのに、これといった感情が湧かなかった。

心に広がるのはちよつとした虚無感だけ。衛士は溜息をついて、なるほどと頷いた。

「此方の世界での携帯電話は向こうでは使えず、連絡用の端末は此方で用意する。通貨は特に統一されてはいない。が、基本的には”円”だ。それから……、以上だ」

彼女は視線を宙に彷徨わせてから、小さく頷くように衛士を見据えて強く言い放つ。

「着替えは？」

「基本的には此方で用意する特殊なスーツだが、休息時は自由だ。ただし持ち込みは現金以外であれば、既に渡されている道具……貴金属以外ならば許されている。が、向こうで仕入れる事が出来るものばかりだ。思い入れが無いのであれば、特に荷物にする理由はないと思われる」

「口座に大金があるんだが……」

「申請すれば此方で手続きをし、引き出せるようにしておく」

彼女は顔色一つ変えず、目を見て淡々と答える。衛士は気にせず気になった事を口にし続けた。

「お前等が所属しているのは？」

「貴様が配属される際に説明を受けるだろう。詳しい説明は向こうです。では……そうだな。七時まで時間を――」

「いらねえな。さっさと連れて行け」

「ふう。思い切りが良いのは見事だが……」

「説教なんて聞きたかねえよ」

彼女は頬に僅かな笑みを浮かべる。少しばかり、何かに期待する

ような顔で、それでもそれを抑えるように眉間に皺を寄せた。

衛士はポケットに手をつっ込んだまま、やがて肩の上に彼女の手を添えられる。だが彼女は精一杯手を伸ばした状態で、極力近づきたくは無いようであった。

それから彼女は目配せして、行くぞ、と語る。衛士はただ頷いた。

――衛士が家族を失った翌年三月三日。衛士が砂時計を手に入れたから一ヶ月……体感的には僅か二ヶ月後、衛士は惜しげもなく自身が育ってきた世界を辞す。その瞬間、同時に時衛士の存在を知る全ての人間の記憶から、そして保存されている記録から、彼が最初から存在していなかったかのように、彼に関わる記憶、記録、その殆どが消滅した。

それが、時衛士の、秘められし最初の物語である。

世界は緩やかに、破滅と平和との狭間で揺らぎ始めていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4827r/>

誰かを救える五分前 Part0

2011年8月22日03時23分発行